甲府市文化財調査報告 21

史跡 武田氏館跡X

―平成13年度主郭部北側馬出、字三角地点試掘調査　概要報告書―

2003

甲府市教育委員会

序

甲府市教育委員会では史跡武田氏館跡の保存・活用を図ることを目的に整備活用委員会を設置し、目下、整備基本構想・基本計画の策定作業を進めております。また、史跡指定区域内で生じている数々の問題につきましても、住民生活と史跡保護の調和を図るべく、文化庁・県教育委員会との協議を踏まえましてその解決に積極的に取り組んでいるところでございます。

具体的には、住民要望に基づく史跡公有地への「お屋形様の散歩道」設置や市道整備、堀法面崩落部の改修、スポット公園建設などですが、平成13～14年度に地元自治会と甲府市教育委員会が協力して実施した松木堀一帯の大規模な美化作業では、見違えるほどの美しい景観を取り戻すことができ、喜ばしい限りでございます。

甲府市教育委員会では、「市民から愛される史跡」を目指しまして、引き続き、懸案事項の解決に向けた取り組みを行うとともに、散策会や発掘現場の説明会を開催して史跡保護への理解を深めて参りたいと存じますので、皆様方の御支援と御協力を御願い申し上げます。

本書には、昨年度に実施しました主郭部北側馬出の発掘成果を収録いたしましたが、土橋や暗渠、石で区画された堀などの遺構が検出され、予想外の成果をあげることができました。大変貴重な学術データでございますので、武田氏館跡の解明に限らず、広く中世城郭研究への活用を図れるものと大いに期待しているところでございます。

末筆となりましたが、日頃より史跡整備事業や発掘調査に御指導をいただいております関係各位に、厚く御礼申し上げる次第でございます。

平成15年３月

甲府市教育委員会
教育長　角　田　智　重

例　　言

1．本書は山梨県甲府市古府中町・屋形三丁目・大手三丁目地内に所在する国指定史跡武田氏館跡の、平成13年度に実施した整備基本構想・基本計画策定に関わる事前の試掘調査の概要報告書である。

2．本館跡は、昭和13年（1938）に国史跡の指定を受けており、文化庁・県教育委員会・史跡武田氏館跡調査団の指導の下、甲府市教育委員会が主体となって調査を実施した。調査経費は国・県の補助金の交付を受けている。

3．本書に関わる試掘調査の担当は伊藤正彦・山﨑雅恵であり、対象地区・調査面積は以下の通りである。

字三角地点	20㎡
主郭部北側馬出地点	60㎡

4．本書の編集・執筆は、中込　功(文化芸術課長)を責任者とし、伊藤正彦が行った。

5．本書の挿図は中村里恵が作成した。

6．本書に関わる出土遺物及び記録図面・写真等は甲府市教育委員会で保管している。

7．本書に関わる写真測量業務は㈱フジテクノに、出土品の保存処理業務は㈶山梨文化財研究所にそれぞれ委託した。

8．発掘調査及び報告書作成に際して次の機関・諸氏からご指導ご協力を賜った。厚くお礼を申し上げる次第である。

文化庁文化財保護部記念物課　山梨県教育委員会学術文化財課　相模原市立博物館
武田神社　伊藤正義　磯貝正義　小野正敏　北垣聰一郎　清雲俊元
笹本正治　鈴木　誠　萩原三雄　藤澤良祐　八巻與志夫

（敬称略）

凡　　例

1．本書に掲載した遺構番号は、調査現場において付けたものである。

2．遺構名は各遺構の形状・検出状況に応じて調査現場において付けたものである。

3．全体図、遺構・遺物実測図の縮尺は図中に表示した通りである。

4．遺構断面図における水平数値は、海抜高度を示し、単位はmである。

5．報告書中の方位は磁北を示している。

発掘調査参加者

（一　般）

川口格一　小池幹子　小宮通子　清水秀樹
寺田恒造　花曲敬子　望月貴美子　望月宏美

（都留文科大学）

浅木一希　井部利春　林　雅彦　川中裕二
野澤南海子　法月麻友美　山口あずさ　滝沢和彦
柳沢拓哉　堂前陽子　大竹直己　佐藤三和
小沢正幸　首藤久士　利光恭子　武者智子
浅野目裕美　近野由希子　三浦宏介　野澤渓子

（帝京大学）

東　正浩　木下　学　仲山雅也　金子武史
富樫　裕　土屋健作　青木洋介　宮川義弘
茨城絢子　安藤理恵　植田裕之　高岡　優

（東京大学）

辻畑圭亮　佐藤雄基　我妻光洋　長瀬威志
辛島有吾　関端一憲

（南山大学）

中原幸絵

目　　次

序
例　　言
凡　　例
目　　次
挿図・表目次

第1章　字三角地点

第1節　調査概況
1　調査に至る経緯……1
2　調査地の概要……1
3　調査の方法と経過……1
第2節　調査の成果
1　遺構と遺物……3
2　小　括……5

第2章　主郭部北側馬出

第1節　調査概況
1　調査地の概要……8
2　調査の方法と経過……8
第2節　調査の成果
1　遺構と遺物……10
2　小　括……36

挿　図　目　次

図１　年度別調査範囲
図２　字三角地点全体図……2
図３　遺構配置図……3
図４　ピット１～９……4
図５　溝　　跡……5
図６　遺物実測図……6
図７　遺構変遷……8
図８　北側馬出地点全体図……9
図９　炭化材検出状況……11
図10　暗　　渠……12
図11　北側馬出地点土層堆積(1)……13～14
図12　北側馬出地点土層堆積(2)……15～16
図13　遺物実測図(1)……17
図14　遺物実測図(2)……18
図15　遺物実測図(3)……19
図16　遺物実測図(4)……20
図17　遺物実測図(5)……21
図18　遺物実測図(6)……22
図19　遺物実測図(7)……23
図20　遺物実測図(8)……24
図21　遺物実測図(9)……25
図22　遺物実測図(10)……26
図23　金属器・石器実測図……27
図24　壁土実測図(1)……28
図25　壁土実測図(2)……29
図26　木舞下地模式図……37

別添　史跡武田氏館跡主郭部北側馬出地点

表　目　次

表１　字三角地点出土遺物観察表……7
表２　北側馬出地点出土遺物観察表……30～35
表３　出土壁土一覧表……37

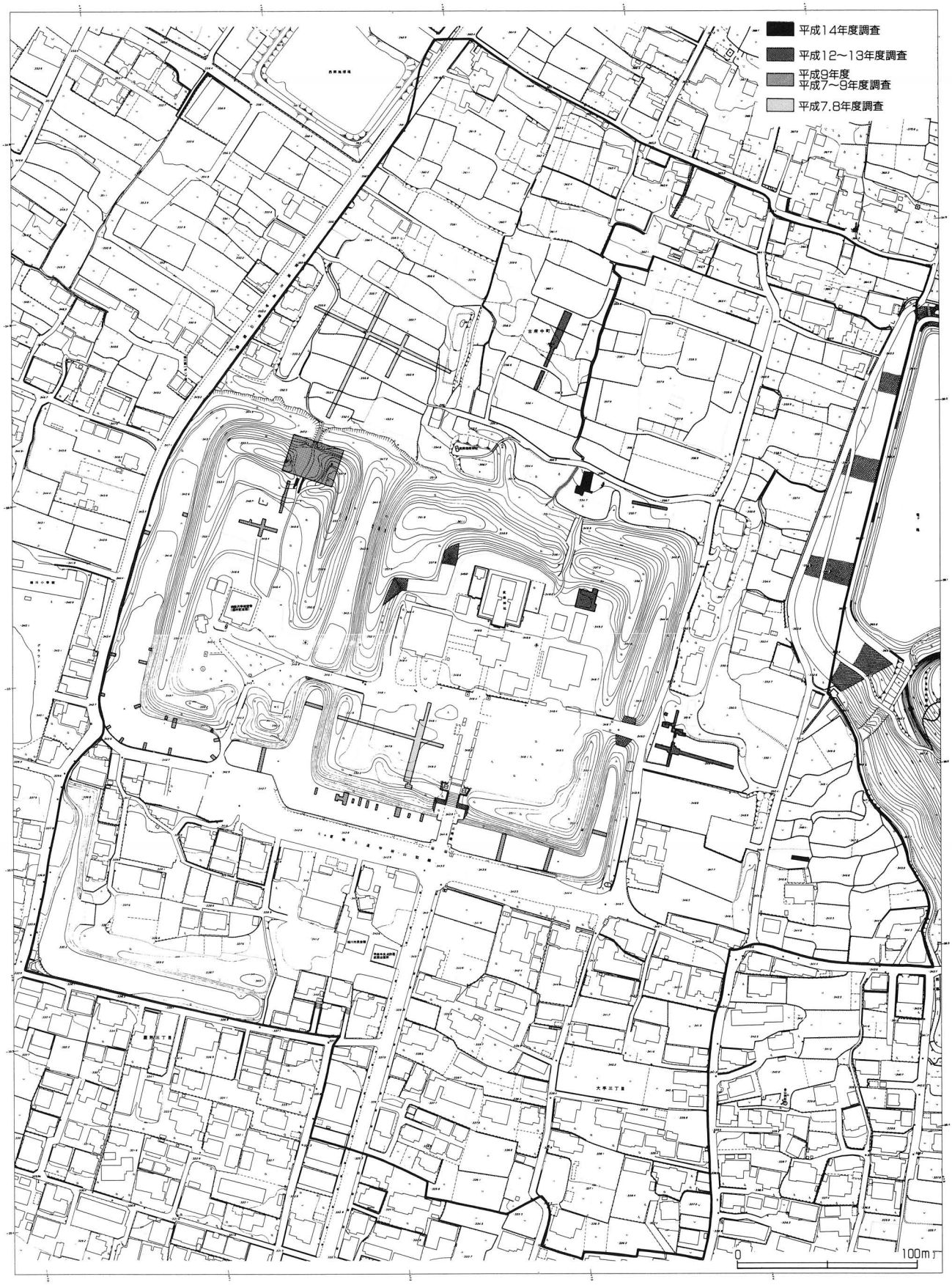


図1　年度別調査範囲

第１章　字三角地点

第１節　調査概況

１．調査に至る経緯

本調査は、平成７年より実施している史跡武田氏館跡整備基本構想・基本計画策定に関る、基本資料収集を目的とした試掘調査の一環として実施した。平成12年度までの調査成果は『史跡武田氏館跡発掘調査概要報告書』Ⅲ・Ⅳ・Ⅸとしてすでに刊行している。平成13年度は字三角地点・主郭部北側馬出地点を調査した。調査地点の選定に際し、史跡武田氏館跡調査団会議に諮り、承認を経ている。

２．調査地の概要

主郭部東側に総堀が存在し、館の東端を画している。総堀は、近世に御所堰と呼ばれた水路から水を取り込んでおり、『甲斐国志』は「相川ノ水ヲ引キ外郭ノ溝ニ湛ユ」と記述する。調査地は総堀の東側、字三角に位置する。周辺は家臣屋敷地と推定され、現在、市道鍛冶小路線が総堀に接して南北に通じている。この道は古くから存在していたらしく、『国志』は「躑躅崎へ一道ヲ隔ツル」、あるいは「端門ノ前ナル縦道」などと記載する。一帯は水田として土地利用されていた。

３．調査の方法と経過

調査は、平成13年８月29日から開始した。幅２ｍ、長さ10ｍのトレンチを設定し、人力により掘り下げ、調査を行った。９月中旬、確認した遺構図面を作成後、一旦調査を終了している。翌年３月19日に写真測量を、翌日には川砂・土嚢により養生処置を行ったのち、埋め戻し、調査を終了した。

字三角地点全景

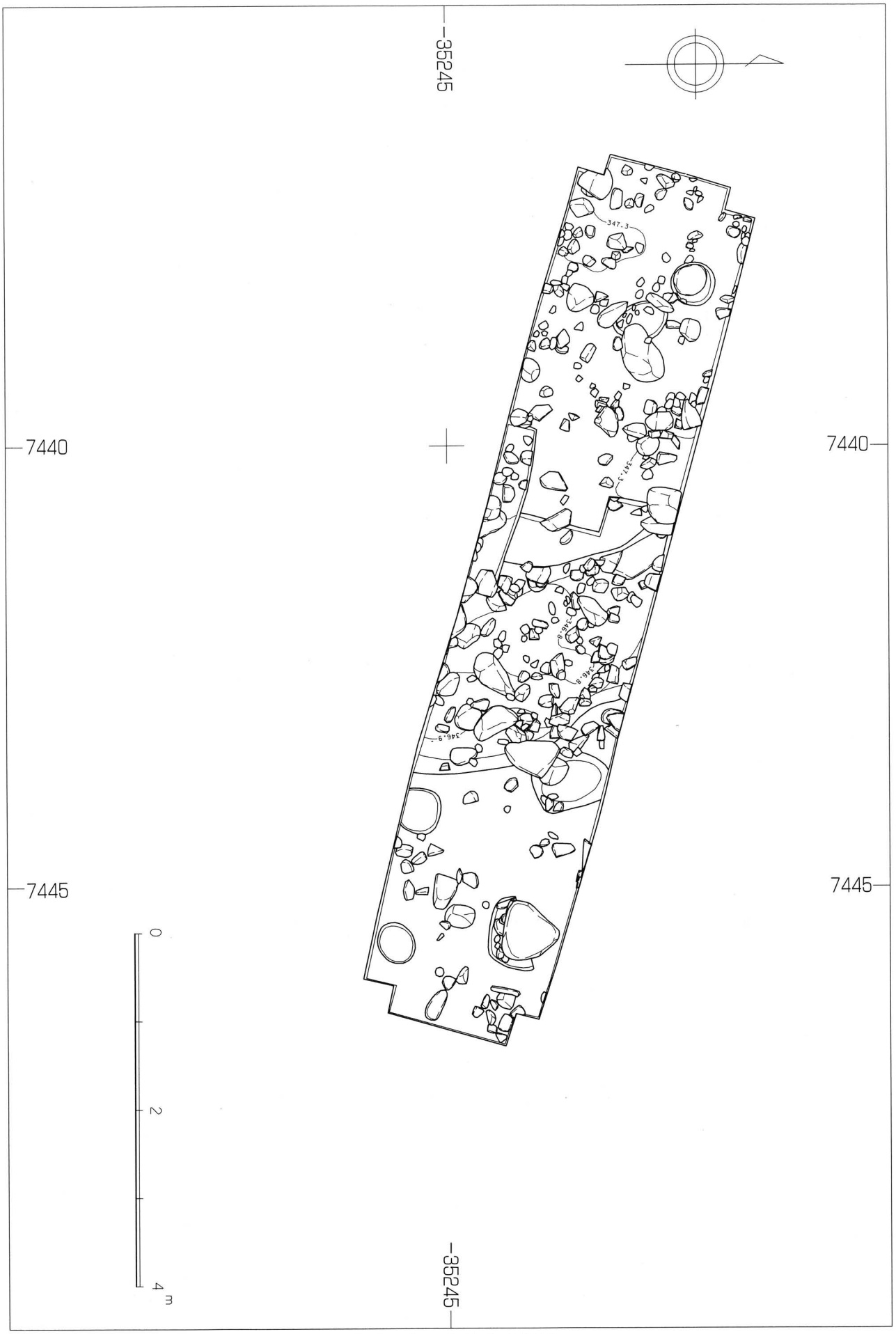

-35245
7440
7440
7445
7445
347.3
347.3
346.8
346.8
346.9
0
2
4
m
-35245

図２　字三角地点全体図

第２節　調査の成果

１．遺構と遺物

耕作土・床土の下層、地表下0.20ｍが遺構確認面となる。調査ではピット８基、溝１条を確認した。今後の調査によっては見直しするものもあるが、調査時点での遺構名をそのまま使用した。トレンチ中央から検出した溝を境に西側は、遺構確認面が礫混じりの土となり、遺構数が減少するのに対し、東側から多くの遺構が確認された。

(1)ピット（図３．４）

調査では８基のピットを確認した。多くが溝を境に東側から検出される。遺物がともなわないものなどもピットとして扱っている。ピット２は欠番とした。

ピット１

トレンチ東側に位置し、水田床土直下から確認された。径0.60ｍ程の扁平な礫を中心に据え、周囲にほぼ円形の掘り込みが確認できた。建物礎石と思われ、礎石周囲に根石として長径0.05～0.20ｍの大小様々な礫が据えられていた。掘り込み規模は径0.90ｍ程となる。礎石の原位置を保つため半截にとどめ、掘り込みの深さも確認していない。

ピット３

トレンチ東側から確認された。径0.45ｍ、深さ0.15ｍを測り、平面円形を呈する。長径0.05～0.18ｍ程の礫が中央に集中していた。出土遺物などは確認できなかった。

ピット４

トレンチ中央に位置し、溝跡と重複する。長軸0.80ｍ、短軸0.58ｍ、深さ0.32ｍを測る。平面長円形を呈し、礫混じりの土を掘り込んだためか断面不整形となる。上層から0.20ｍまでに集中して、大小多くの礫が混入していた。

出土遺物は細片ばかりだが、多くを確認している。すべて土器類であり、ほとんどがかわらけである。図化できたものを掲載した（図６－１～４．６）。

ピット５

一部調査区外となるが、径0.53ｍ、深さ0.08ｍを測る。平面円形を呈し、小礫が集中する。出土遺物は確認でき

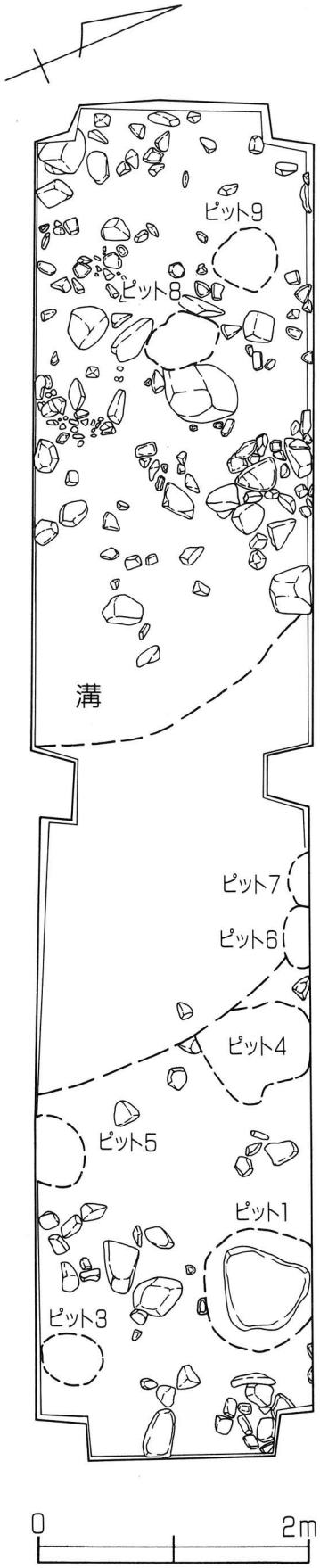


図3　遺構配置図

なかった。

ピット６

ピット７と重複し、一部調査区外となるが、径0.45ｍ、深さ0.17ｍを測る。平面略円形を呈し、中央部に礫が集中する。出土遺物は確認できず、土層堆積からもピット７との新旧関係は明らかにできなかった。

ピット７

ピット６と重複し、一部調査区外となる。径0.42ｍ、深さ0.17ｍを測り、平面略円形を呈する。出土遺物はなく、ピット７との新旧関係も明らかにできなかった。

ピット８

トレンチ西側に位置し、ピット９と近接する。長軸0.63ｍ、短軸0.43ｍ、深さ0.12ｍを測り、平面長円形を呈する。上層に大小多くの礫が集中し、混入する。出土遺物は確認できなかった。

ピット９

トレンチ西側に位置し、ピット８と近接する。径0.50ｍ、深さ0.14ｍを測り、平面略円形を呈する。上層に礫が多く集中していた。

出土遺物は摺鉢片１点を確認している（図６－５）。

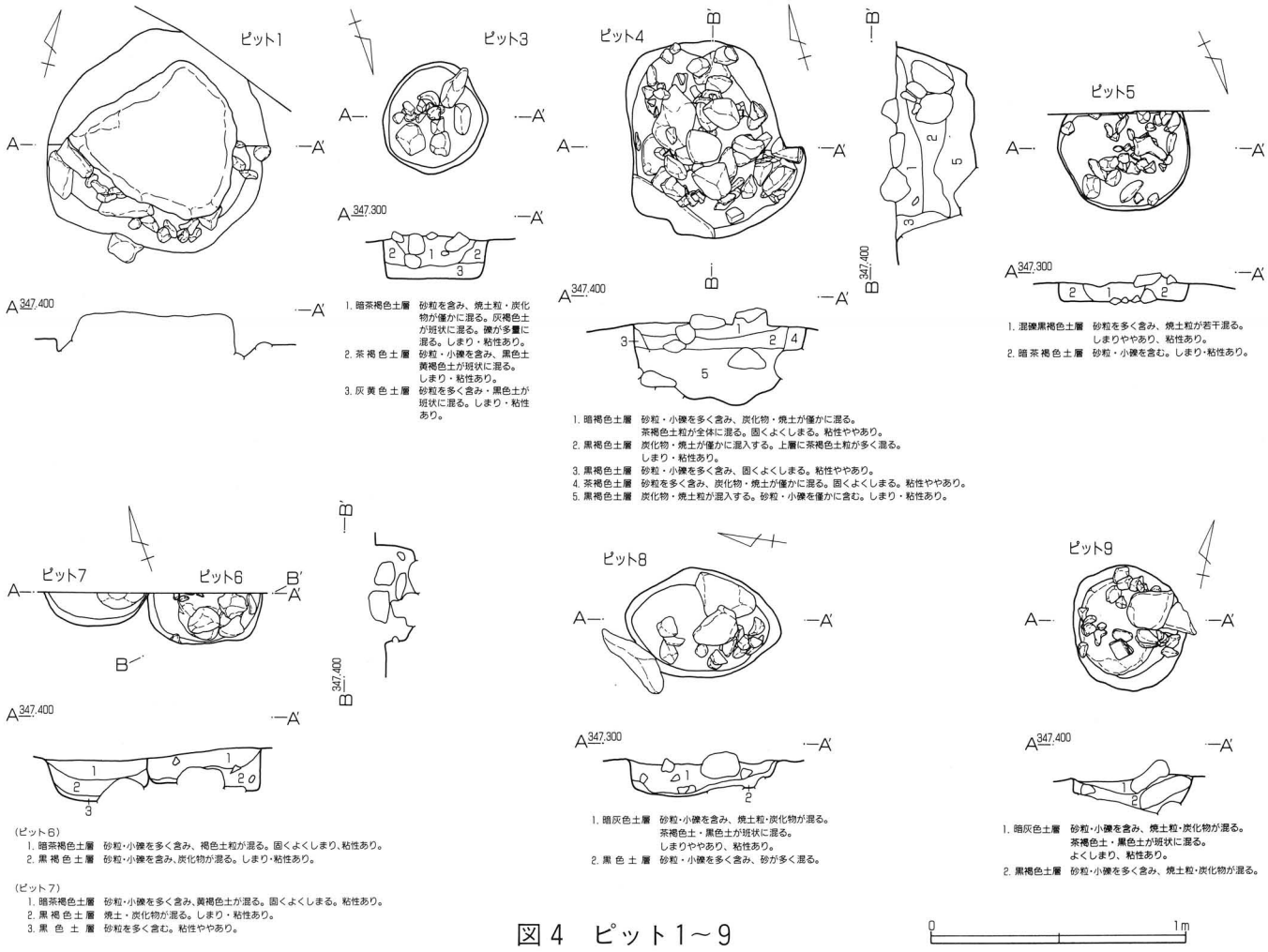


図４　ピット1～9

(2)溝（図５）

調査区中央から、ピット４～６と重複して検出された。礫混じりの土を掘り込んだ素掘りの溝であり、幅1.85～2.35ｍ、深さ約0.30～0.48ｍを測る。ピット群に先行する遺構となり、土層堆積から東西の立ち上りに高低差が生じる。本遺構を境に西側からの遺構確認が僅少となる。

出土遺物は僅かであった。かわらけ片１点を図化している（図６－７）。

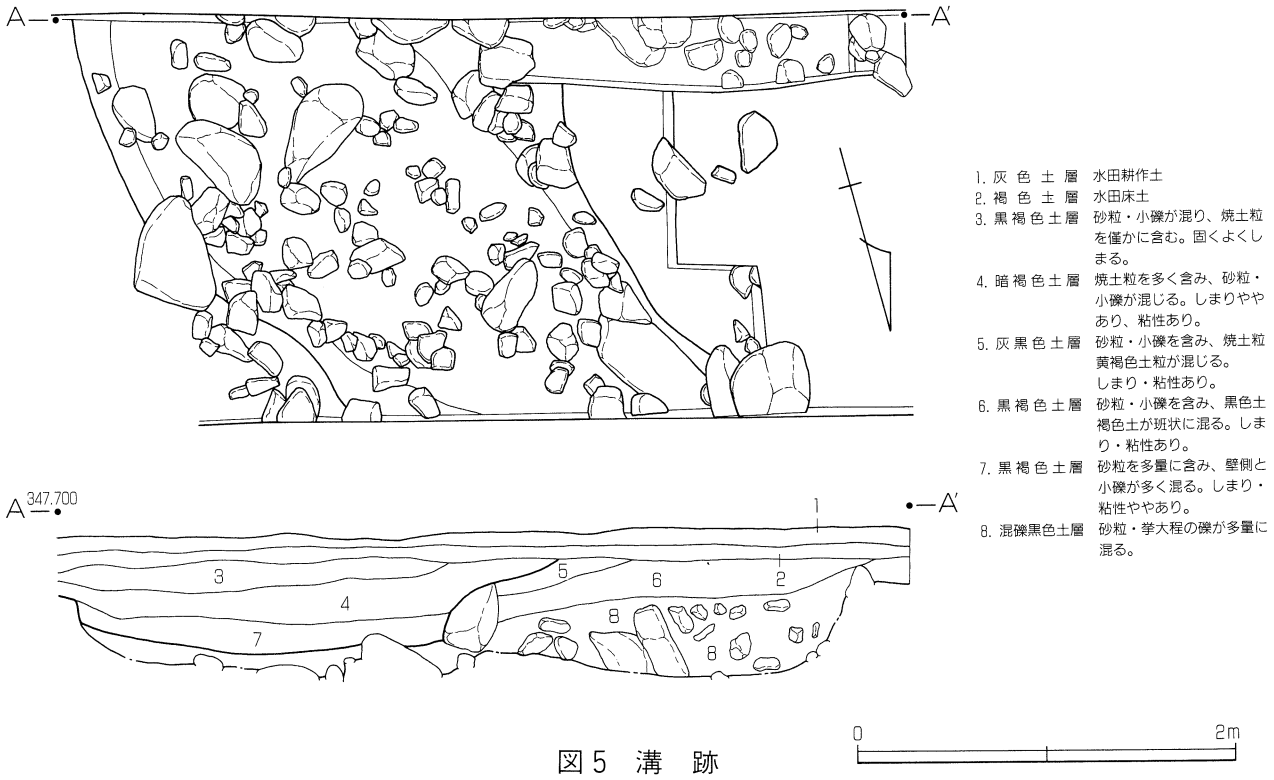


図５　溝　跡

(3)遺構外遺物（図６－８～21）

遺構にともなわない遺物を取りあげる。多くが細片となったものばかりであり、水田床土直下からの出土となる。かわらけ片が多数を占め、陶磁器が僅かに見られた。

８～11は全てロクロ成形され、底部に糸切りされるかわらけであり、12～14は舶載陶磁器である。12は口縁部に稜花形の刻みを施す青磁折腰皿、13は白磁端反皿、14は染付端反碗である。15～19が瀬戸美濃製品となり、15が天目碗である以外、他は灰釉皿である。20が外面錆釉、内面鉄釉を施す陶器片、21が須恵器片である。

２．小　括

調査ではピット・溝などが確認された。検出した遺構は重複関係から２時期の変遷が捉えられる。溝跡が先行する遺構であり、礎石の残るピット１が構造物の柱穴となる以外、具体像は明らかではない。『国志』が記載する「縦道」や総堀などに規制された土地利用となるであろうが、検出した溝跡が総堀などと軸を違えている状況は、遺構の重複関係から得られた結果もあわせ、規制以前の構築を予想させる。総堀構築が明らかでない現状では心もとない推測であるが、周辺一帯の土地利用は、総堀構築が一つの画期となるであろう。

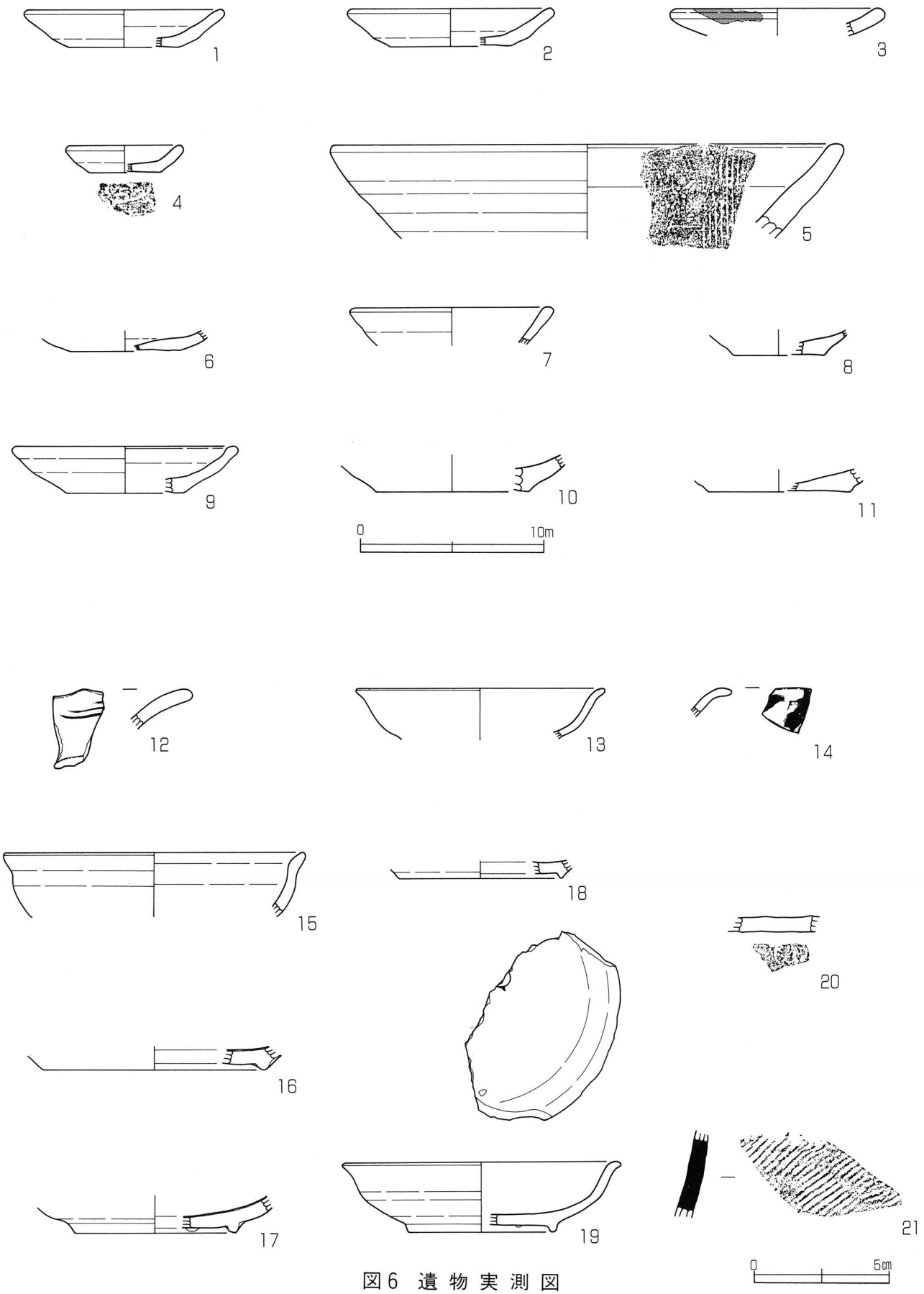


図6 遺物実測図

表１　字三角出土遺物観察表

単位(cm)

図	番号	出土位置	種別・器種	法量(cm) 口径	底径	器高	部位	観察所見(調整・文様・その他)	胎土	備考(時代等)
6	1	ピット４	土器　かわらけ	10.6	2.0	6.1	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	密	
6	2	ピット４	土器　かわらけ	11.0	2.1	6.6	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
6	3	ピット４	土器　かわらけ	11.2			口縁～体部	ロクロ成形、外面スス付着	密	
6	4	ピット４	土器　かわらけ	6.1	1.5	3.9	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
6	5	ピット９	土器　擂鉢	27.8			口縁～体部	ロクロ成形、刷目摩耗	やや粗	
6	6	ピット４	土器　かわらけ			6.1	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	密	
6	7	１号溝	土器　かわらけ	10.6			口縁～体部	ロクロ成形	やや密	
6	8	一括	土器　かわらけ			5.0	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	密	
6	9	一括	土器　かわらけ	12.4	2.6	6.4	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗ナデ	密	
6	10	一括	土器　かわらけ			8.4	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
6	11	一括	土器　かわらけ			7.8	底部	底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
6	12	一括	青磁　折腰皿				口縁部	口縁部稜花形、内面櫛描文	緻密	
6	13	一括	白磁　端反皿	9.0			口縁～体部		緻密	
6	14	一括	染付　碗				口縁部	外面唐草文	緻密	
6	15	一括	瀬戸美濃　天目茶碗	11.0			口縁～体部	被熱	密	後IV新
6	16	一括	瀬戸美濃　灰釉丸皿			8.2	底部	付高台	密	大窯２
6	17	一括	瀬戸美濃　灰釉皿			5.9	体部～底部	付高台、輪ドチ痕	密	大窯１or２
6	18	一括	瀬戸美濃　灰釉丸皿			6.0	底部	付高台	密	大窯２or３
6	19	一括	瀬戸美濃　灰釉端反皿	10.0	2.6	5.4	口縁～底部	見込み部印花文、付高台、輪ドチ痕被熱	密	大窯１
6	20	一括	陶器				底部	内面鉄釉、外面錆釉	密	
6	21	一括	須恵器　甕				体部	内面ナデ、外面叩き痕	密	

第２章　主郭部北側馬出

第１節　調査概況

１．調査地の概要

主郭部北側には堀を隔て、土橋にて北側曲輪群に通じる虎口が開口する。多くの古絵図は、土橋前面に土塁と堀、堀のみ、あるいは石塁を鍵状に巡らせた馬出空間を描く。現状、この空間は３段に区画され、南北約25ｍ、東西約30ｍ程の規模となる。水田・畑地として利用され、北側は通路となり、東端に堀が一部残る。『甲斐国志』が館東側に存在する大手馬出土塁について、「端門ノ前ニ馬出ノ塁アル」（「屋形跡」の項）と記述するのに対し、この地点に関する記述は全く見えない。周辺一帯は、すでに江戸時代から耕地化が進んでいたらしいが、戦前までは、東端に残る堀も馬出空間を取り巻くよう残存しており、戦後通路構築に際し埋めたという。

２．調査の方法と経過

調査は、平成13年８月１日から開始した。土橋中心線を基軸として幅４ｍ、長さ10ｍのトレンチを南北方向に設定し、表土から人力により掘り下げを行った。トレンチ中央から南側にかけて堀を確認し、埋没に際し多量の礫が混入していた。その他、暗渠水路、土塁、石積みなどを確認し、２時期の変遷が想定された。11月13日までに記録図面の作成、記録写真の撮影を終え、いったん調査を終了した。翌年３月12日から再開し、19日に航空写真測量を行っている。川砂・土嚢により養生処置を行ったのち、重機で埋戻し、26日には全ての調査を終了した。調査期間中、８月28日には整備活用委員会が開催され、現場視察を行っている。

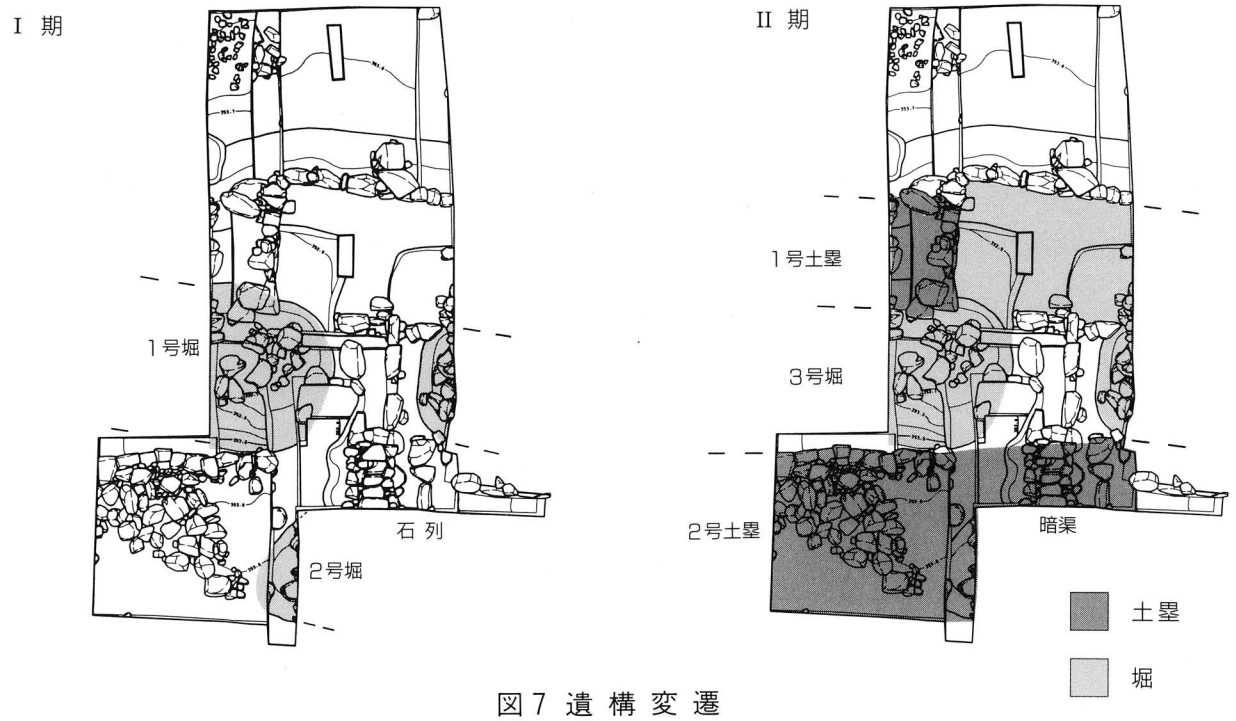


図７ 遺構変遷

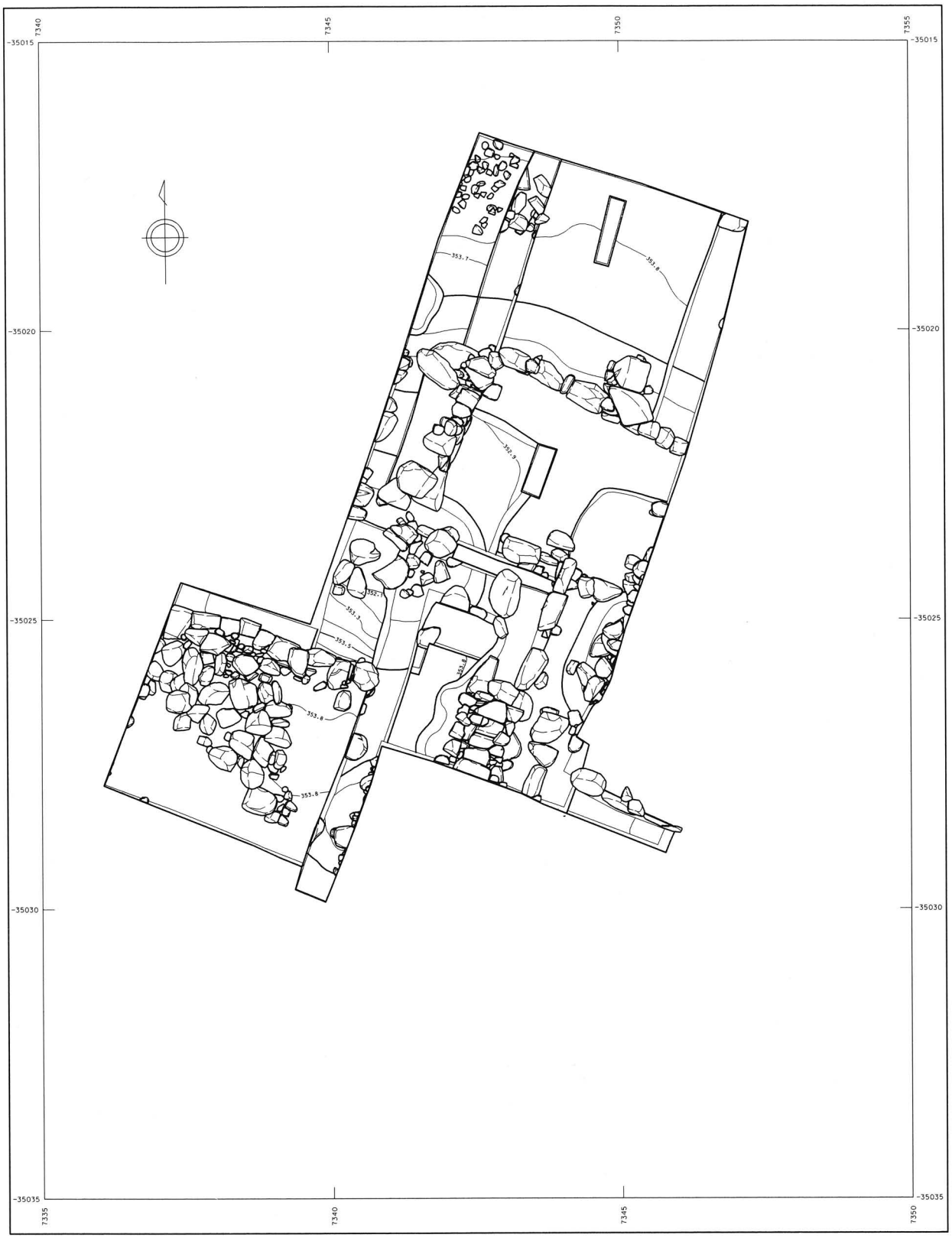


図８　北側馬出地点全体図

第２節　調査の成果

１．遺構と遺物

(1)堀

１号堀（図11）

トレンチ中央に位置する。大きく２段階の変遷を遂げており（図７)、拡張された後も依然として堀としての機能を有しているが、様相が一変するため拡張前を１号堀とし、拡張後を３号堀とする。完掘に至っていないため規模など不明な点はあるが、上幅3.10ｍを測る水堀と推定される。調査時から湧水がみられ、多量の礫が混入していた。幅1.80ｍ程を掘り残し、通路としている。

多量の出土遺物が見られたが、堀の最終廃絶時に混入したものと考えられるため全てを３号堀出土遺物と判断した。１号堀に帰属する確実な遺物はなかった。

２号堀（図12）

トレンチ南端で確認している。堀の立ち上がり地点であるため規模などやや不確定な点はあるが、幅2.18ｍ、深さ0.70ｍを測る。１号堀と対となって存在し、喰い違い形態となる。断ち割りによる土層観察では、堀の南北両側に版築状の土層堆積が確認でき、１号堀を掘り残して設けた土橋から続く通路部分と考えられ、この堀により迂回して侵入する経路が想定できる。

出土遺物はかわらけ片があるが、細片のため図化できなかった。

３号堀（図９、11)

トレンチ中央に位置し、１号堀を拡張し、張り出し部を設けた形態を３号堀とした。確認した範囲で土橋部分の前方を北側へ2.50ｍ、東西方向に3.50ｍ程拡張し、堀を張り出している。張り出し部は、西側から北側にかけて堀底から石積みを施す。土橋として活用していた通路部分に石組みの排水路を設け、堀への排水口にも石積みを施す。張り出し部の堀底は南側にかけて深くなり、１号堀部分に排水を集約している。北側石積みは高さ0.60ｍ、長さ3.60ｍ程を確認し、１石もしくは２石を据えている。

土器類の他、炭化材・壁土・金属器など多量の出土遺物が見られた。大部分が張り出し部の北側石積み周辺から出土している。堀の最終廃絶時に混入したものと考えられるため全てをこの遺構からの出土遺物と判断した（図13～20、23～25)。

(2)土塁

１号土塁（図11)

トレンチ中央西端に位置し、東西方向の土塁となる。盛土部分が確認できないため、土塁となるか定かではないが、北側裾部分に堀に通じる排水溝が確認され、堀内から多量の壁土なども出土しているため土塀などの基壇部とも考えられる。基底部幅2.10ｍ、堀底部分に高さ0.40～0.90ｍ、長さ2.80ｍの石積みが施される。石積みは堀の拡張に際し、張り出し部の石積みと一対で構築されている。

出土遺物は２点ある（図22－20、21)。

２号土塁（図12)

トレンチ南端に位置し、東西方向に構築された幅3.80ｍ程の土塁となる。盛土部分はす

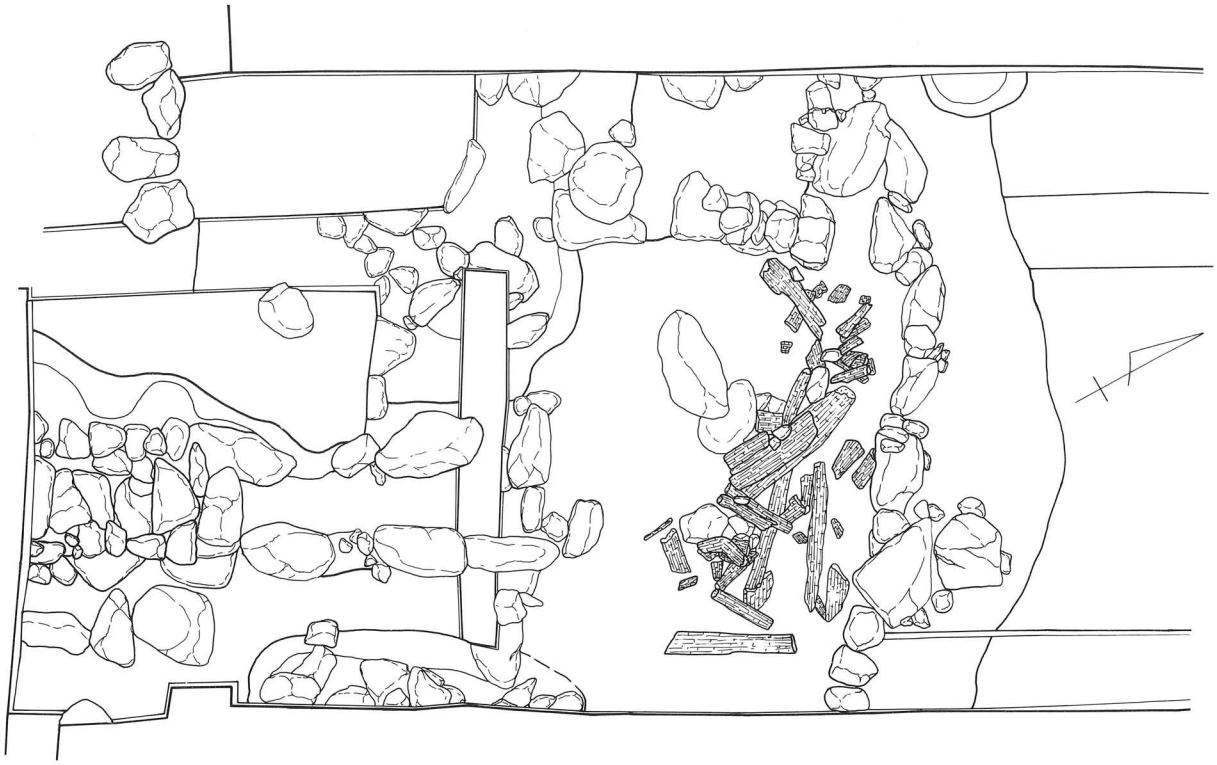


図9　炭化材検出状況

でに削平され判然としないが、土塁裾部に石積みが構築され、石積み背後には多くの礫が散在している。確認した範囲で石積みは、高さ0.40～0.64m、長さ3.74mを測り、基底部のみ1石から2石が残存しいる。2号堀及び通路部分を埋め、3号堀と一対に構築される。

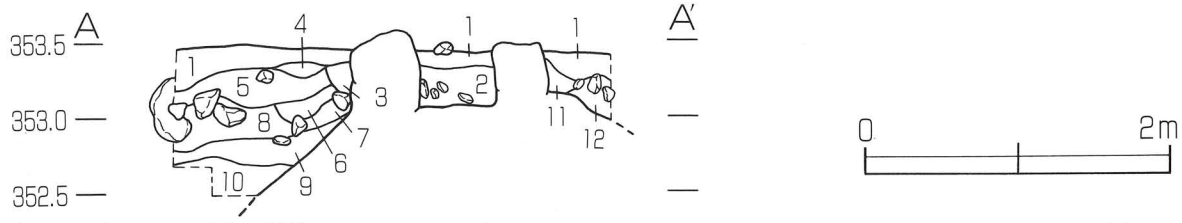
(3)暗渠（図10）

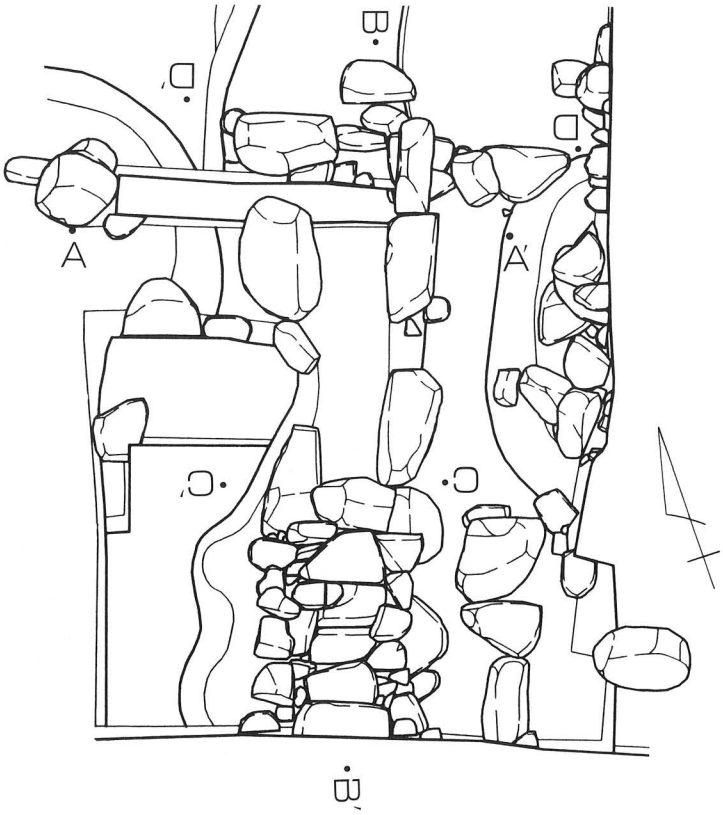
1号堀土橋部分に構築される。通路として活用していた幅1.80m程の箇所を利用し、排水路を構築している。石組みにより築かれ、幅0.40m、深さ0.20～0.40m、確認した範囲で長さ4.00mの規模となる。3号堀への排水口部分には、堀底から高さ0.50～0.60m、長さ2.20mにわたり石積みを構築している。排水を集約するため、堀底は排水口部分が最も高く、東西両側が低くなる。暗渠部分と開渠部分があり、暗渠部分は土塁敷と重なり、土塁内を通過し、堀へ通じるよう設計された排水路と解釈できる。2号土塁・3号堀などと一対に築かれる。

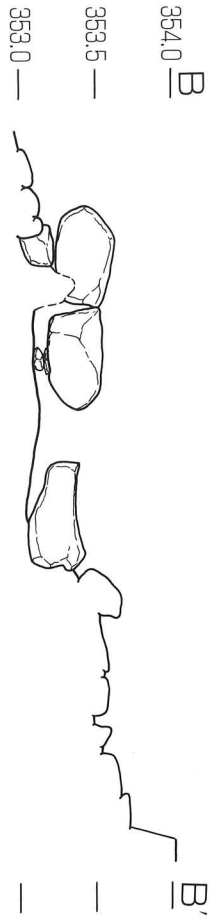
出土遺物は、からわけのみ見られ、4点を図化した（図22－1～4）。

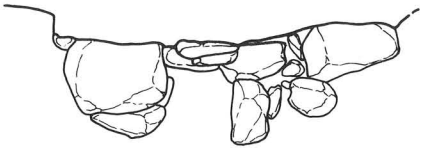
(4)石列（図12）

トレンチ南端、暗渠脇に位置する。長さ1.50m、南北方向に3石のみ検出した。土層堆積から2号土塁に先行すると考えられる。暗渠構築により定かでないが、土橋に並行し、出入り口部を区画する石列であろうか。









1. 混礫暗褐色土層　砂粒・小礫を多く含む、黄褐色土・褐色土が混ざる。
2. 暗褐色土層　焼土・炭化物を多量に含む。しまり、粘性あり。

排水口側面図

1. 黒褐色土層　小礫を多く含む。粘性ややあり、しまりあり。
2. 黄褐色土層　炭化物・焼土を多量に含む。
3. 茶褐色土層　粘性強く、しまりあり。
4. 黄褐色土層　小礫を含む。粘性、しまりあり。
5. 黄褐色土層　炭化物・焼土を多く含む。
6. 黄褐色土層　粘性、しまり強い。
7. 黄褐色土層　炭化物・焼土を多く含む。粘性、しまりあり。
8. 黒褐色土層　炭化物・焼土を多く含む。粘性、しまりあり。
9. 黒褐色土層　粘性・しまりあり。粒子細かい。
10. 黄褐色土層　炭化物・焼土を含む。
11. 茶褐色土層　炭化物・焼土を多量に含む。粘性、しまりあり。
12. 茶褐色土層　礫を多く含む。

図10　暗　渠

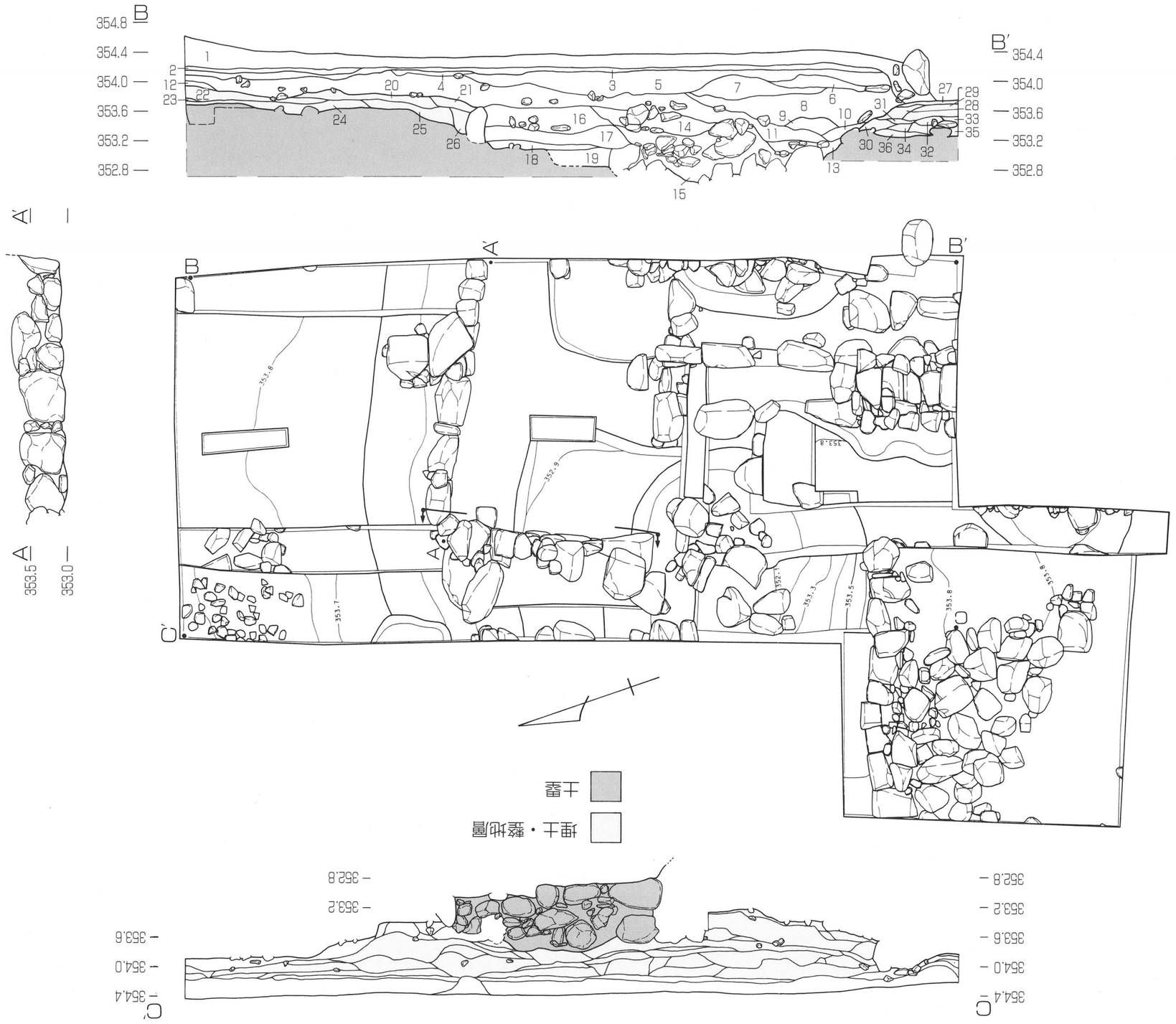
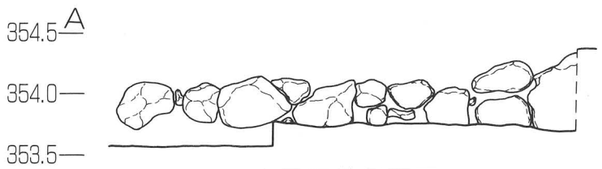


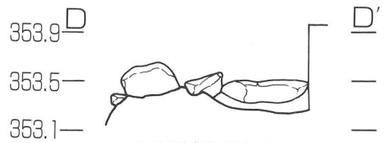
図 11　北側馬出地点土層堆積（1）

1. 暗褐色土層　表土・耕作土
2. 暗褐色土層　耕作土
3. 黄褐色土層　床　土
4. 茶褐色土層　砂粒混る。粘性ややあり、しまりあり。
5. 暗黄褐色土層　砂粒を多く含む。粘性、しまりあり。
6. 茶褐色土層　粘性・しまりなし。
7. 黄褐色土層　小礫を多量に含む。粘性なく、しまり強い。
8. 暗黄褐色土層　砂粒・小礫を含む。粘性なく、しまり強い。
9. 暗黄褐色土層　炭化物・焼土を多く含む。粘性なく、しまり強い。
10. 茶褐色土層　炭化物・焼土を僅かに含む。粘性、しまりあり。
11. 黄褐色土層　砂粒・小礫を多量に含む。粘性なし、しまりあり。
12. 黄褐色土層　砂粒を含み、粘性強い。しまりあり。
13. 灰黄褐色土層　炭化物・焼土を含む。粘性、しまり強い。
14. 黄褐色土層　砂粒を多く含む。粘性ややあり、しまりあり。
15. 黒褐色土層　炭化物・焼土を多く含む。粘性、しまりあり。
16. 黒褐色土層　炭化物・焼土・遺物が多量に混る。粘性、しまりあり。
17. 灰黄褐色土層　炭化物・焼土が僅かに混る。粘性なく、しまり弱い。
18. 灰褐色土層　粘性強く、しまりあり。
19. 黄褐色土層　砂粒が多く混り、鉄分が沈澱する。粘性強くよくしまる。
20. 黄褐色土層　砂粒が僅かに混る。粘性強く、しまりあり。
21. 黄褐色土層　粘性なく、しまりあり。
22. 黒褐色土層　炭化物・焼土が僅かに混る。粘性ややあり、しまりあり。
23. 黄褐色土層　砂粒を多く含む。粘性、しまりあり。
24. 茶褐色土層　砂粒を含む。粘性ややあり、しまりあり。
25. 黄褐色土層　粘性強く、しまりあり。
26. 黒褐色土層　炭化物・焼土を僅かに含む。粘性強く、しまりあり。
27. 黄褐色土層　粘性あり、固くよくしまる。
28. 暗黄褐色土層　砂粒・小礫を含む。粘性ややあり、しまりあり。
29. 茶褐色土層　小礫を含む。粘性なく、しまりあり。
30. 灰黄褐色土層　粘性、しまりあり。
31. 褐色土層　赤味を帯びる。粘性、しまり強い。
32. 褐色土層　赤味を帯びる。粘性、しまり強い。
33. 黒褐色土層　粘性、しまりあり。
34. 茶褐色土層　粘性ややあり、しまりあり。
35. 黒褐色土層　粘性ややあり、しまりあり。
36. 茶褐色土層　炭化物・焼土を僅かに含む。粘性、しまりあり。

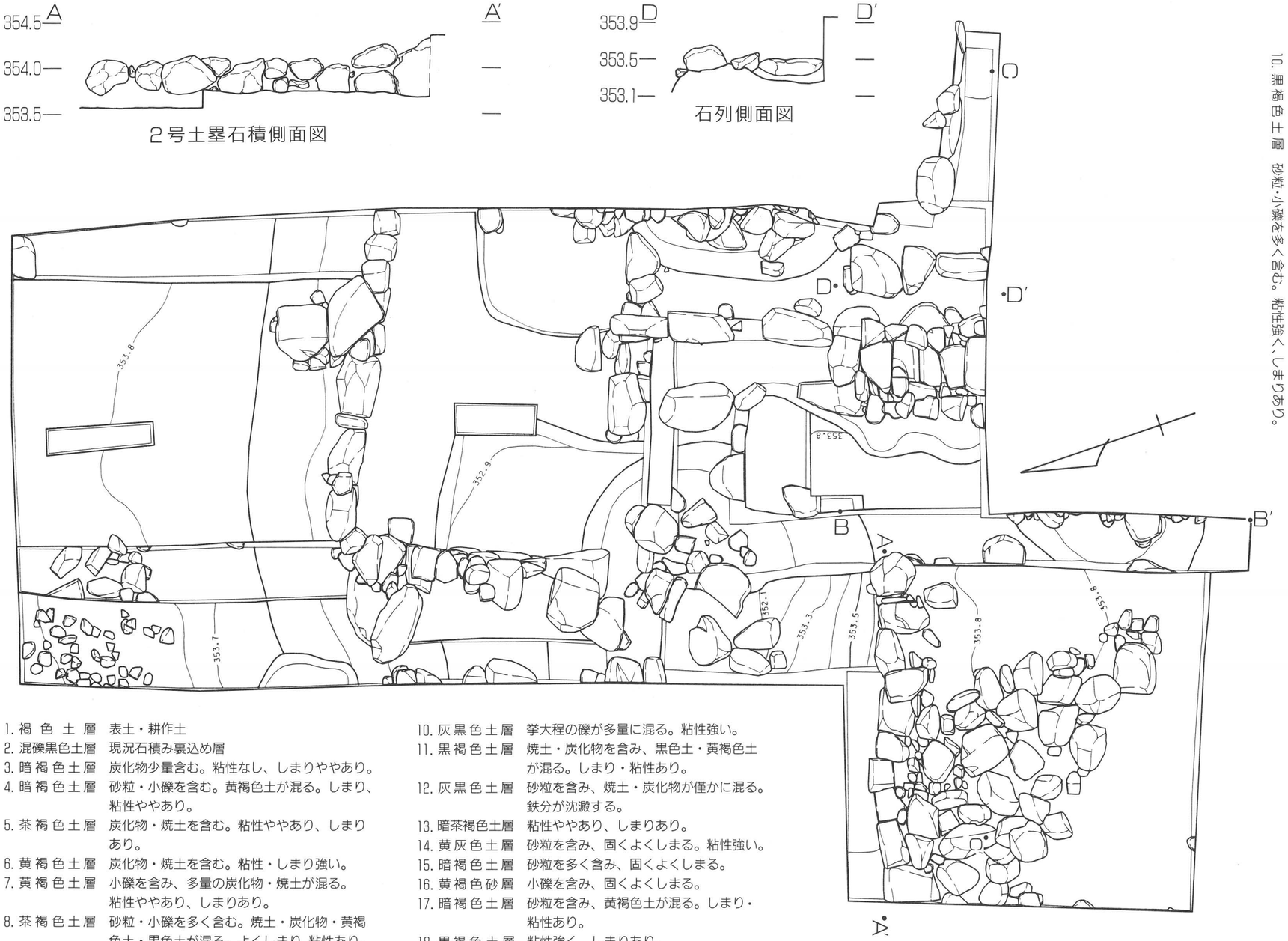
0　4m

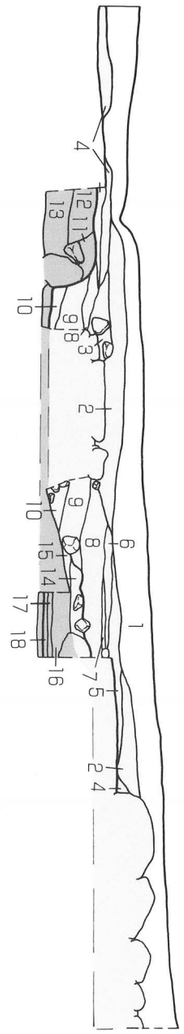


2号土塁石積側面図

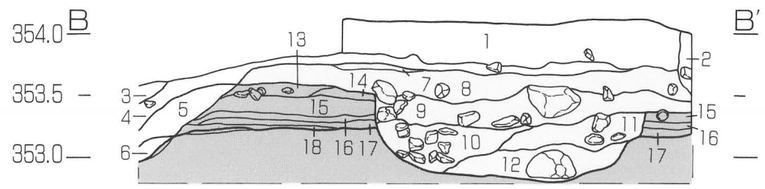


石列側面図





1. 褐色土層　表土・耕作土
2. 褐色土層　耕作土
3. 黄褐色土層　砂粒・礫を多く含む。粘性なく、しまり弱い。
4. 黄褐色土層　砂粒を多く含む。粘性なく、しまりあり。
5. 黄褐色土層　やや赤味を帯び、粘性強く、よくしまる。
6. 茶褐色土層　砂粒を多く含む。粘性あり、しまりあり。
7. 黄褐色土層　B−B′7層に対応する。
8. 茶褐色土層　B−B′8層に対応する。
9. 暗茶褐色土層　砂粒・小礫を含み、炭化物・焼土が僅かに混る。粘性、しまりあり。
10. 黒褐色土層　砂粒・小礫を多く含む。粘性強く、しまりあり。
11. 黒褐色土層　小礫を多量に含む。粘性なく、固くしまる。
12. 茶褐色土層　砂粒・小礫を含む。粘性なく、しまりあり。
13. 茶褐色土層　粘性、しまりあり。
14. 黄灰色土層　B−B′14層に対応する。
15. 黒褐色土層　粘性、しまりあり。
16. 暗褐色土層　B−B′15層に対応する。
17. 黄褐色砂層　B−B′16層に対応する。
18. 暗褐色土層　B−B′17層に対応する。



1. 褐色土層　表土・耕作土
2. 混礫黒色土層　現況石積み裏込め層
3. 暗褐色土層　炭化物少量含む。粘性なし、しまりややあり。
4. 暗褐色土層　砂粒・小礫を含む。黄褐色土が混る。しまり、粘性ややあり。
5. 茶褐色土層　炭化物・焼土を含む。粘性ややあり、しまりあり。
6. 黄褐色土層　炭化物・焼土を含む。粘性・しまり強い。
7. 黄褐色土層　小礫を含み、多量の炭化物・焼土が混る。粘性ややあり、しまりあり。
8. 茶褐色土層　砂粒・小礫を多く含む。焼土・炭化物・黄褐色土・黒色土が混る。よくしまり、粘性あり。
9. 茶褐色土層　8層より礫が多く混入し、粘性強い。
10. 灰黒色土層　拳大程の礫が多量に混る。粘性強い。
11. 黒褐色土層　焼土・炭化物を含み、黒色土・黄褐色土が混る。しまり・粘性あり。
12. 灰黒色土層　砂粒を含み、焼土・炭化物が僅かに混る。鉄分が沈澱する。
13. 暗茶褐色土層　粘性ややあり、しまりあり。
14. 黄灰色土層　砂粒を含み、固くよくしまる。粘性強い。
15. 暗褐色土層　砂粒を多く含み、固くよくしまる。
16. 黄褐色砂層　小礫を含み、固くよくしまる。
17. 暗褐色土層　砂粒を含み、黄褐色土が混る。しまり・粘性あり。
18. 黒褐色土層　粘性強く、しまりあり。

0　2m

図12　北側馬出地点土層堆積（2）

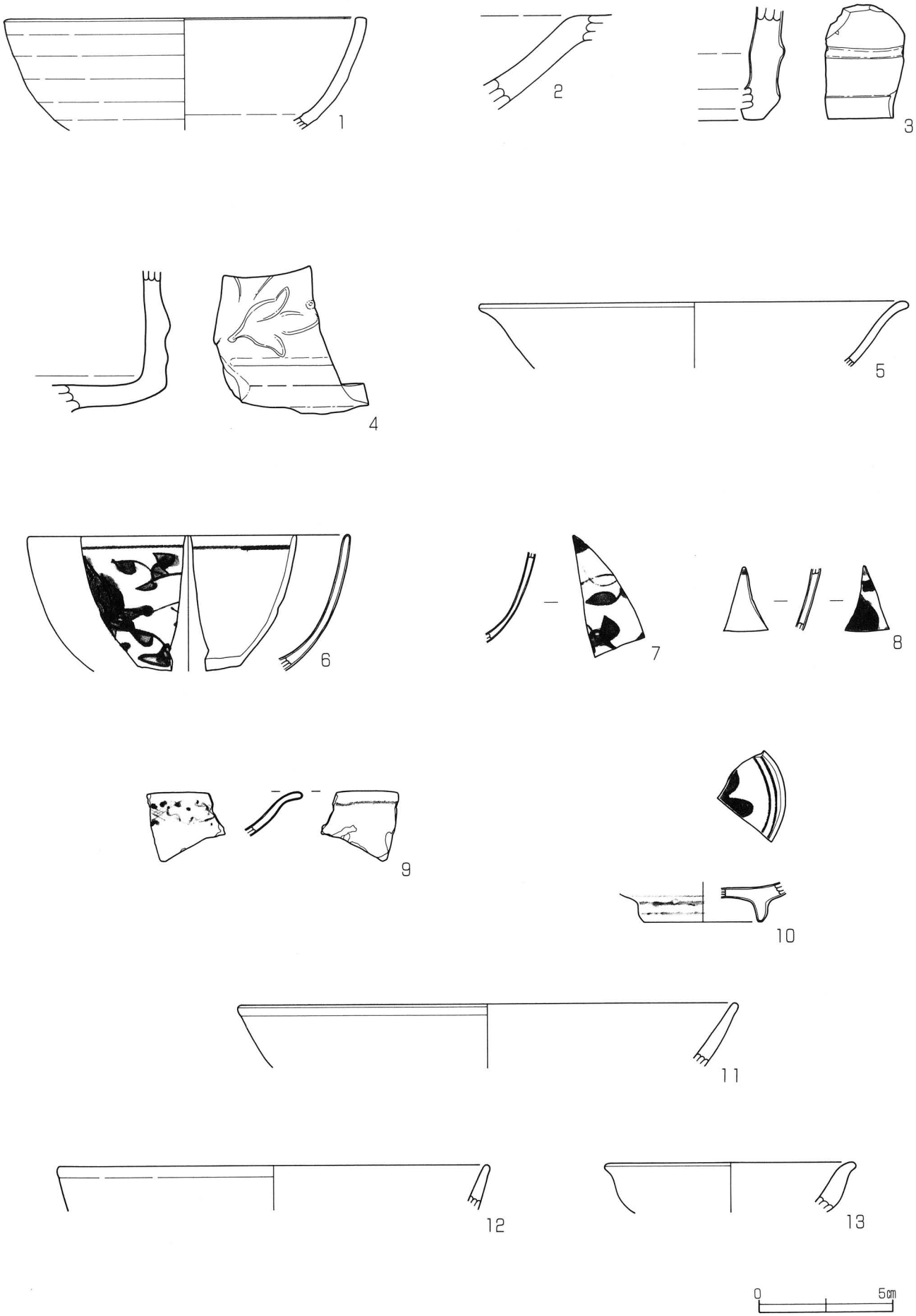


図13 遺物実測図（1）

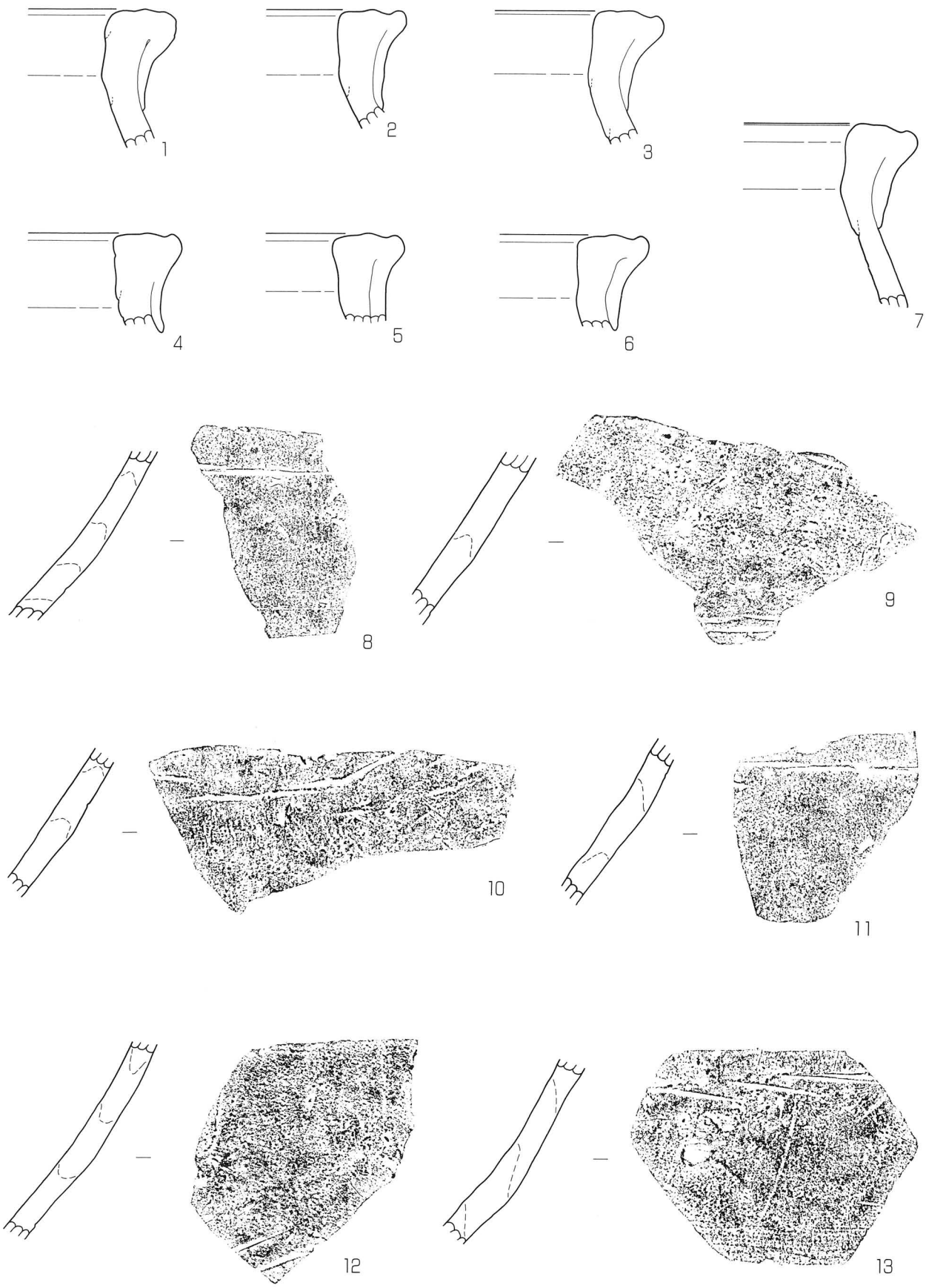


図14　遺物実測図（2）

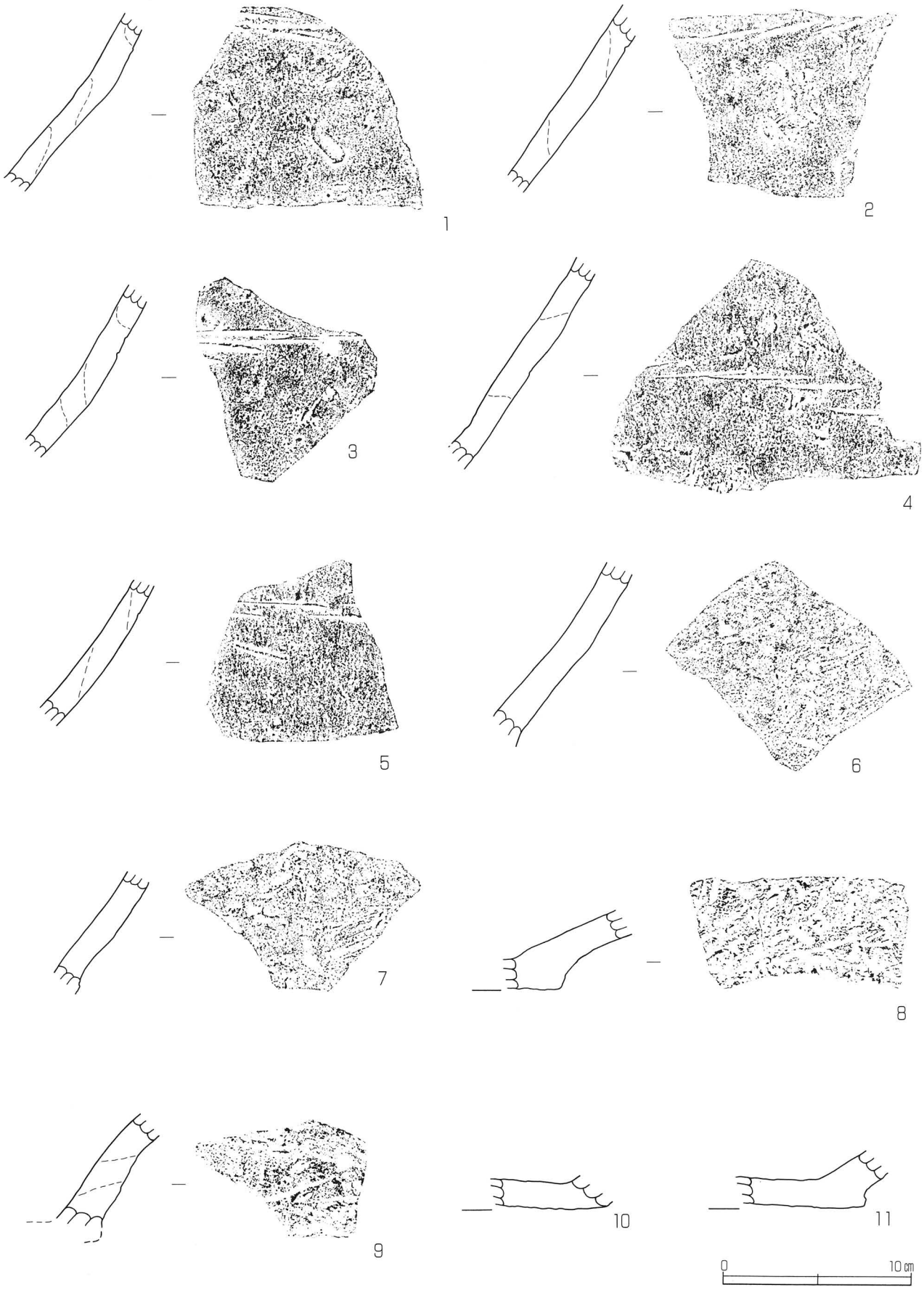


図15　遺物実測図（3）

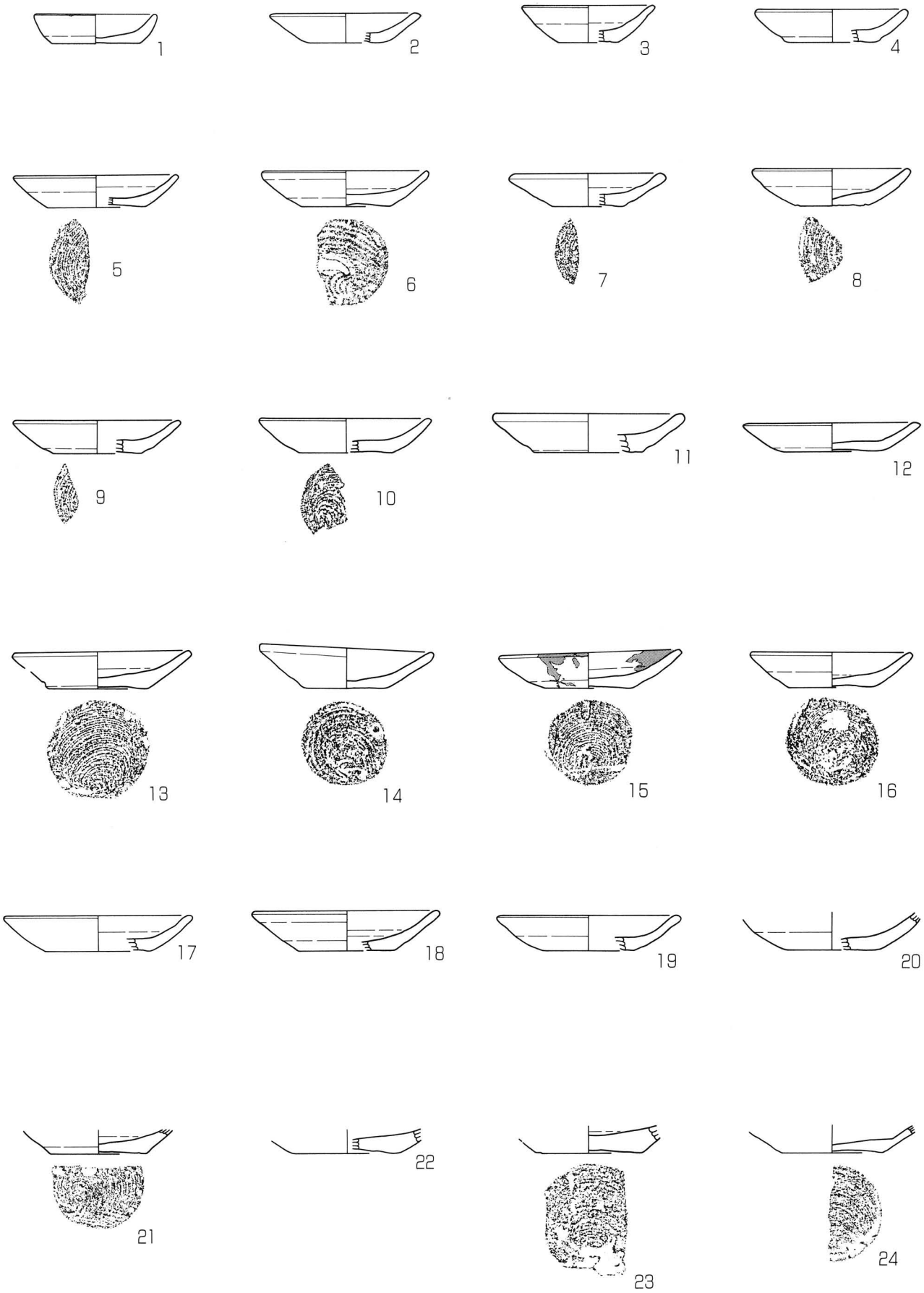


図16 遺物実測図（4）

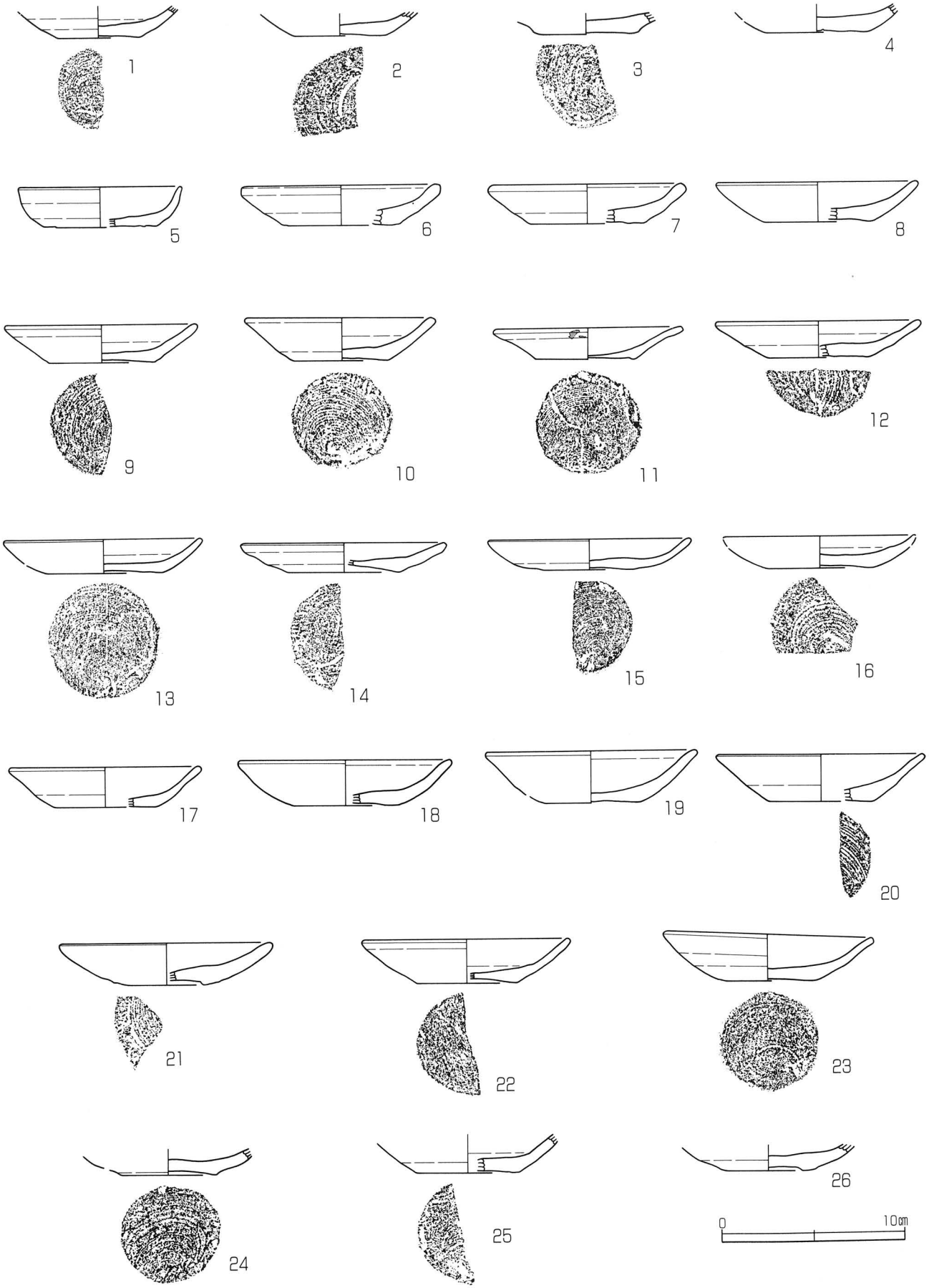


図17 遺物実測図（5）

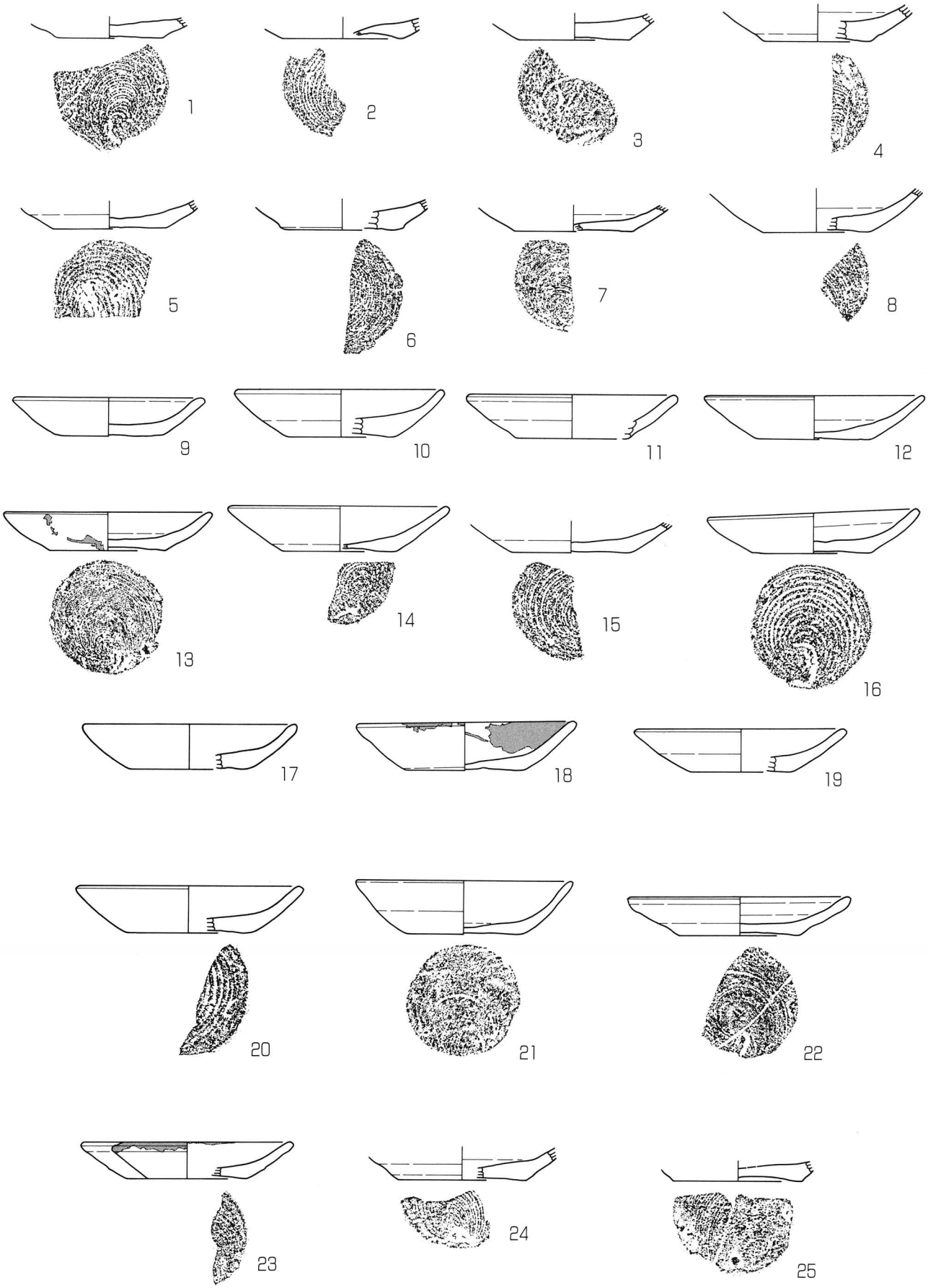


図18 遺物実測図（6）

0 10cm

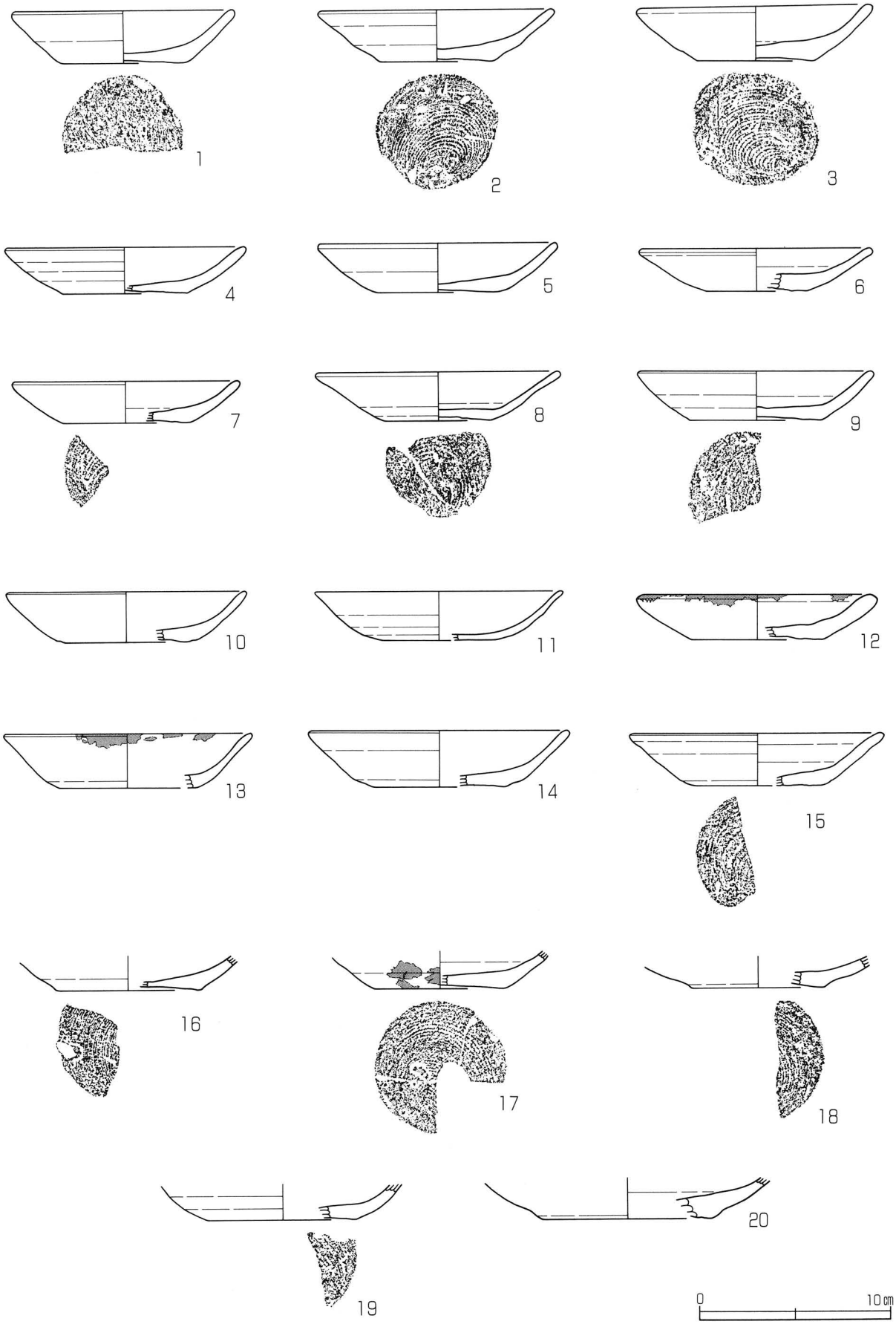


図19 遺物実測図（7）

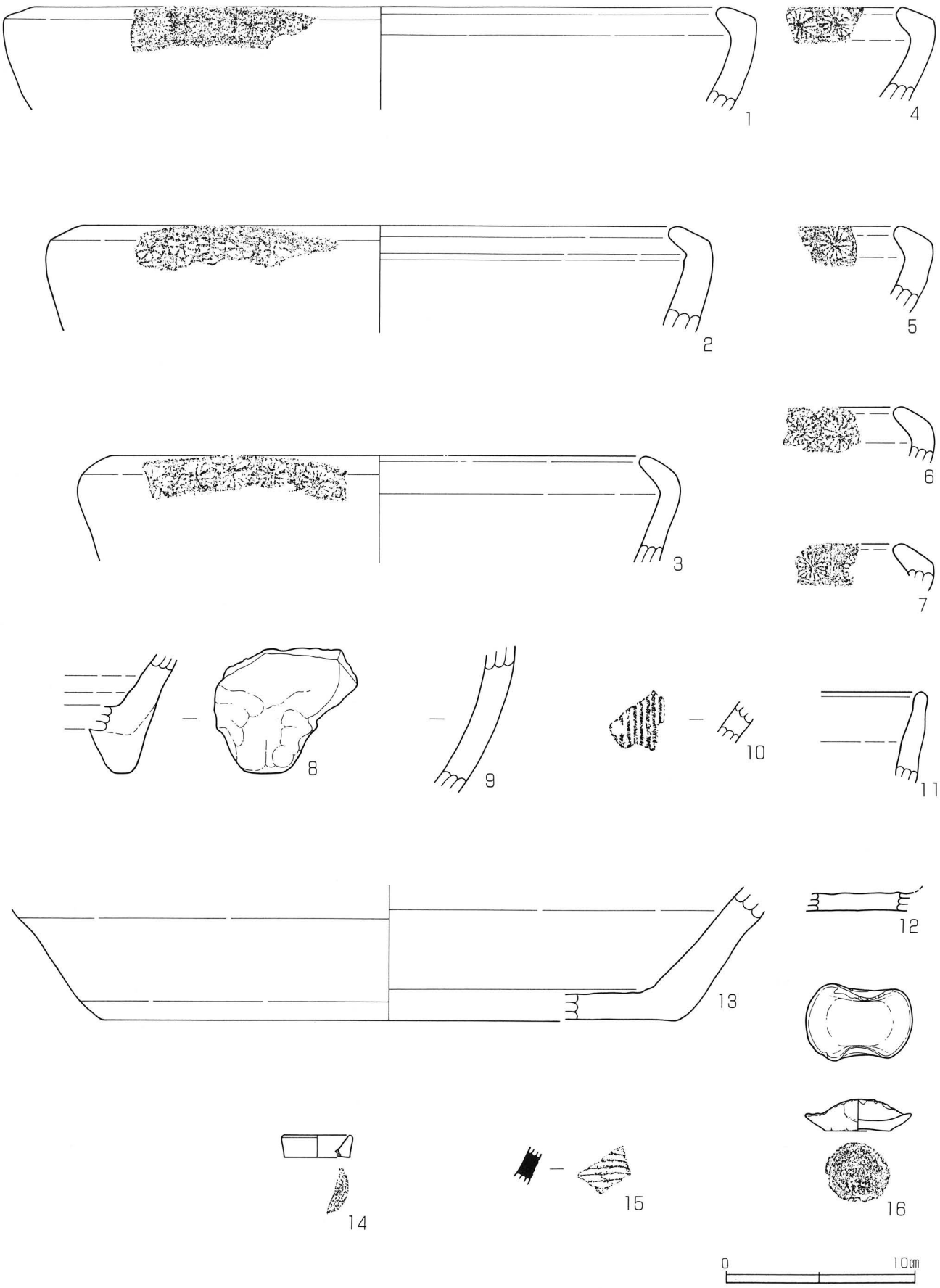


図20 遺物実測図（8）

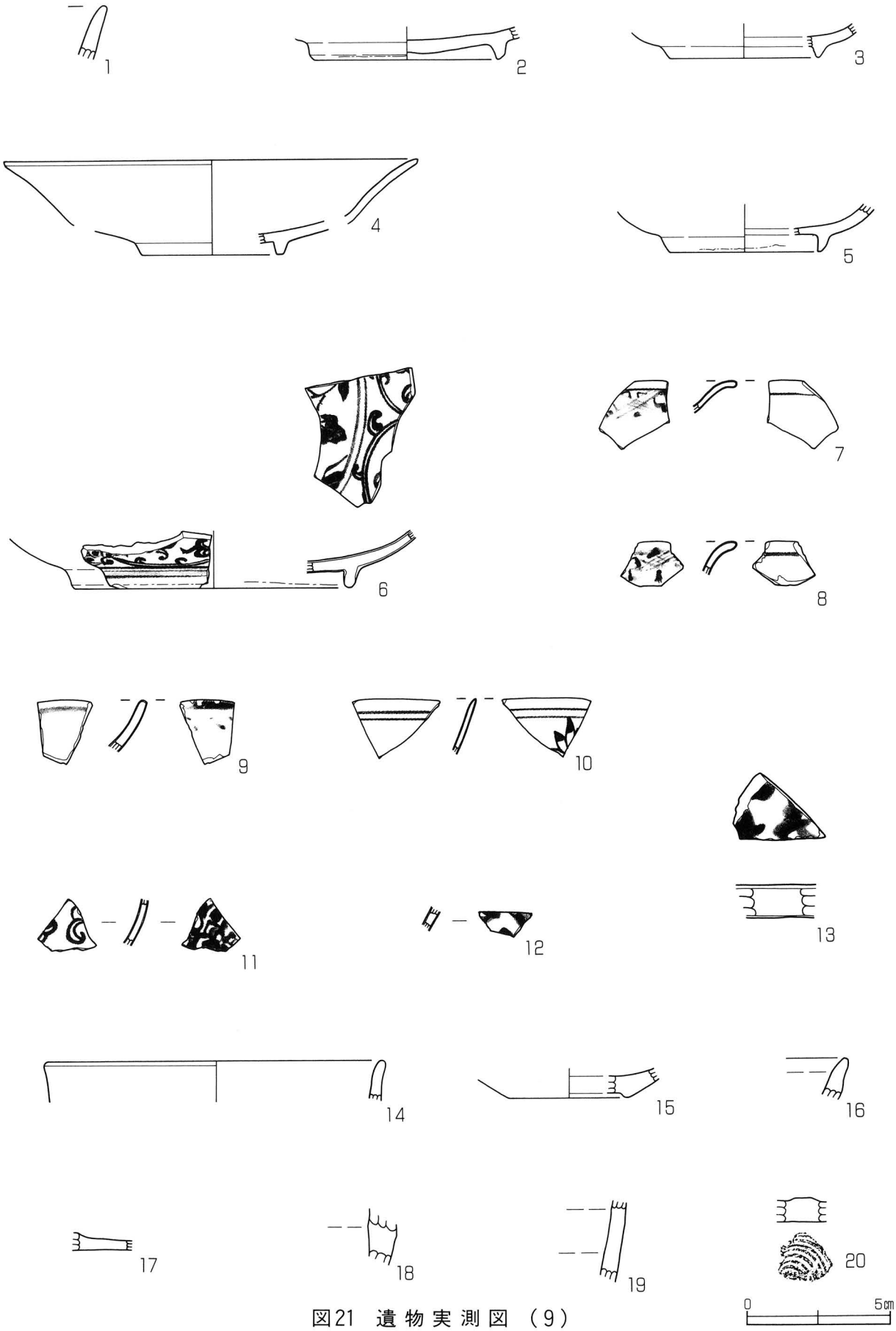


図21　遺物実測図（9）

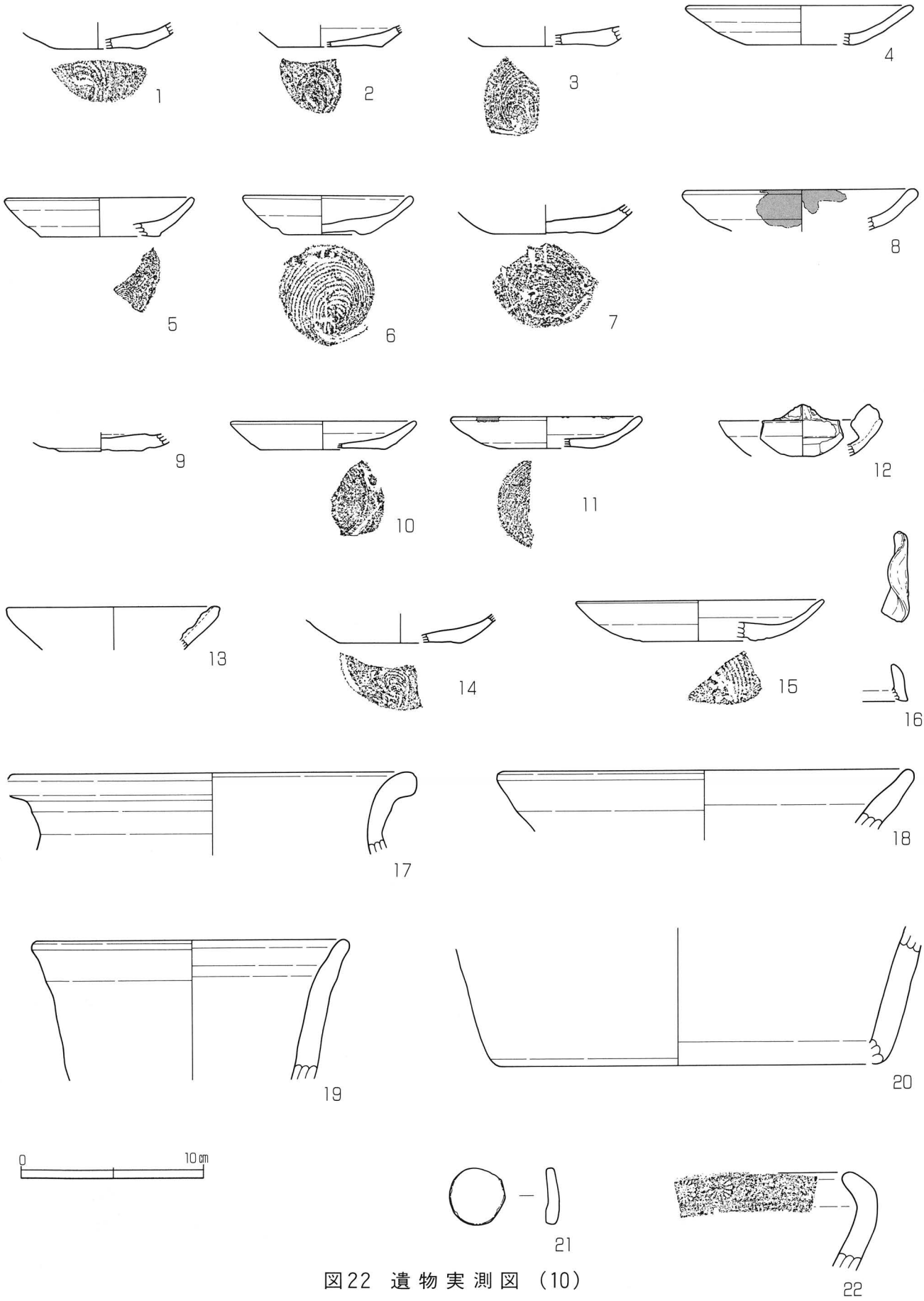


図22 遺物実測図（10）

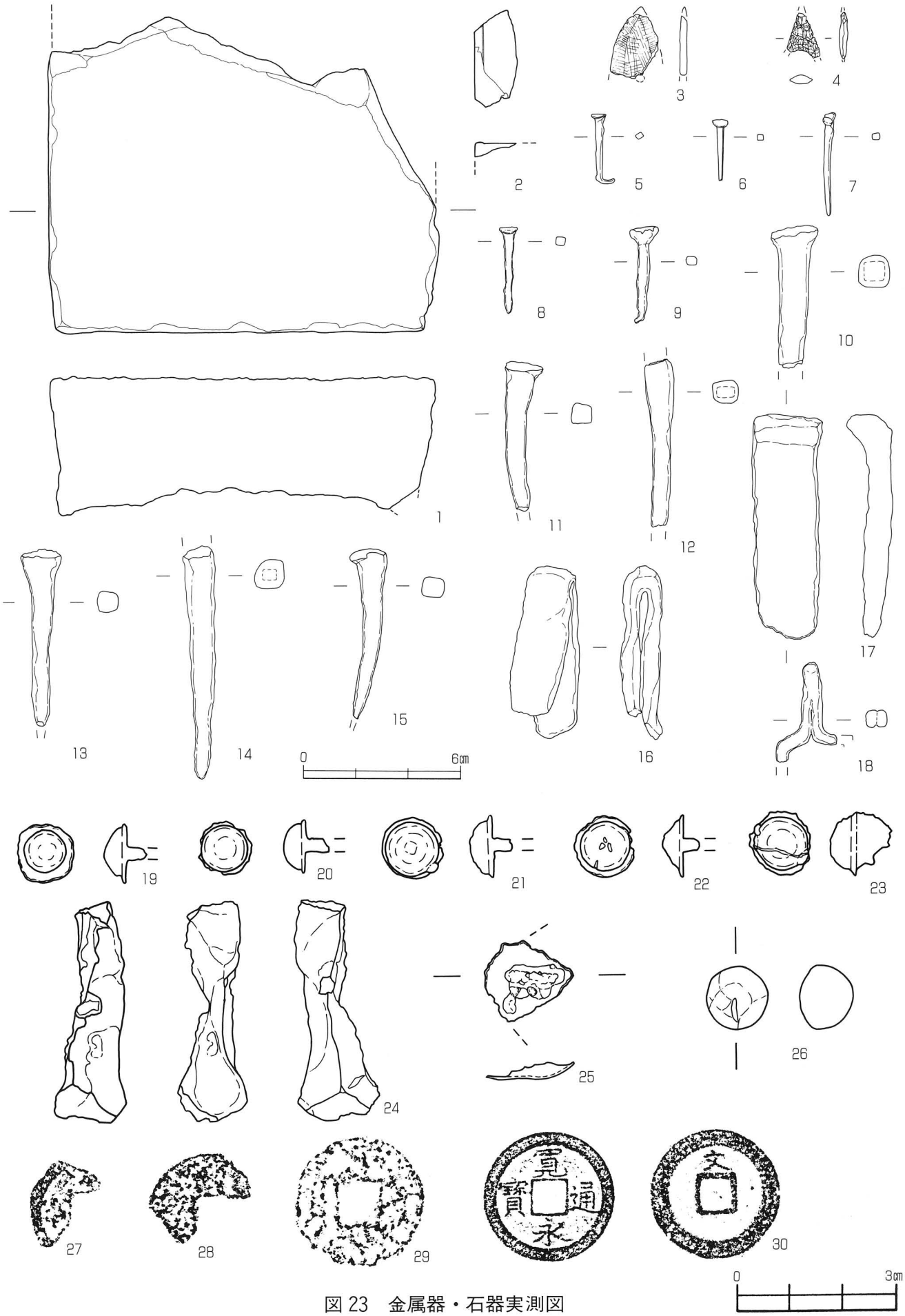


図 23　金属器・石器実測図

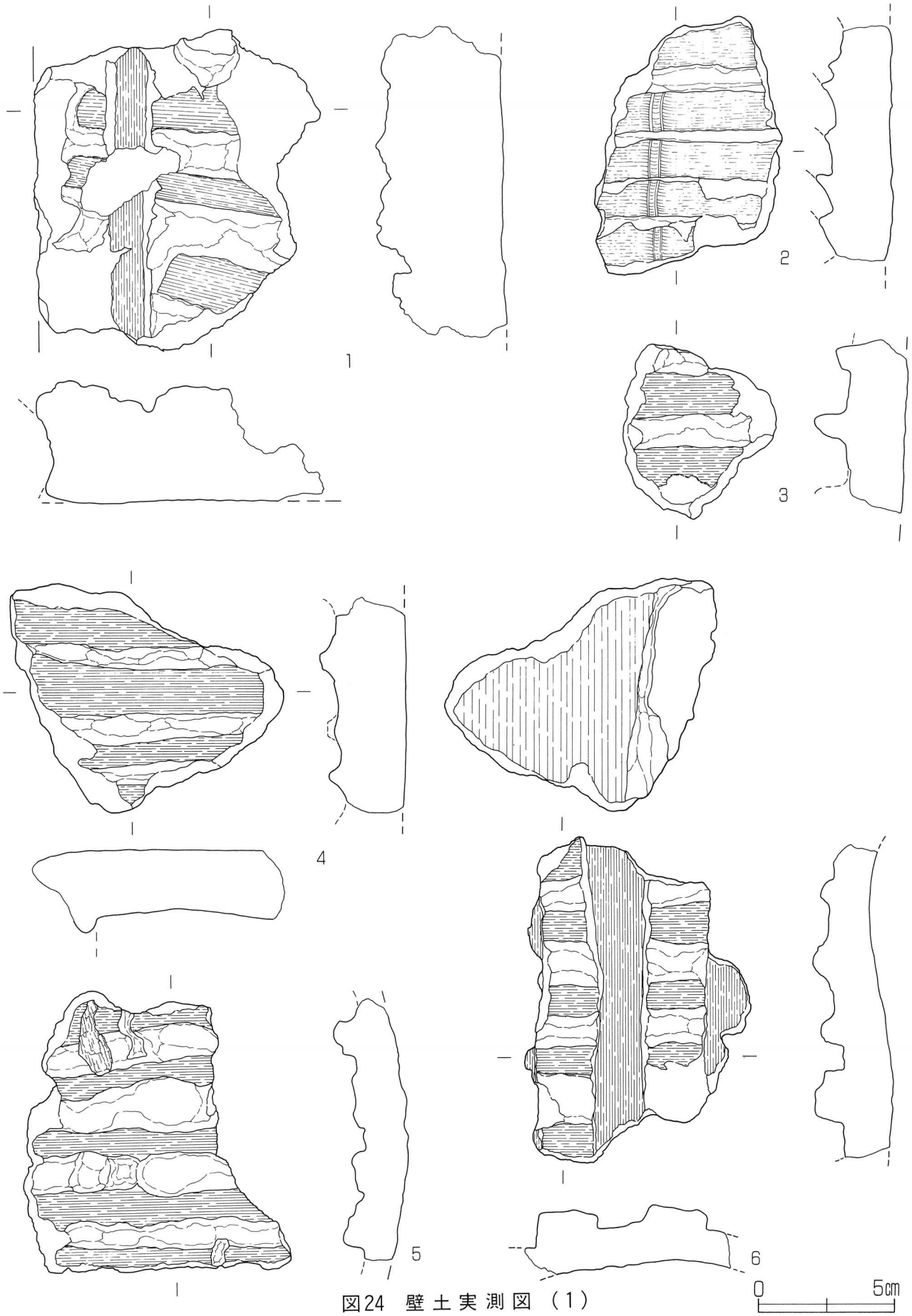


図24　壁土実測図（1）

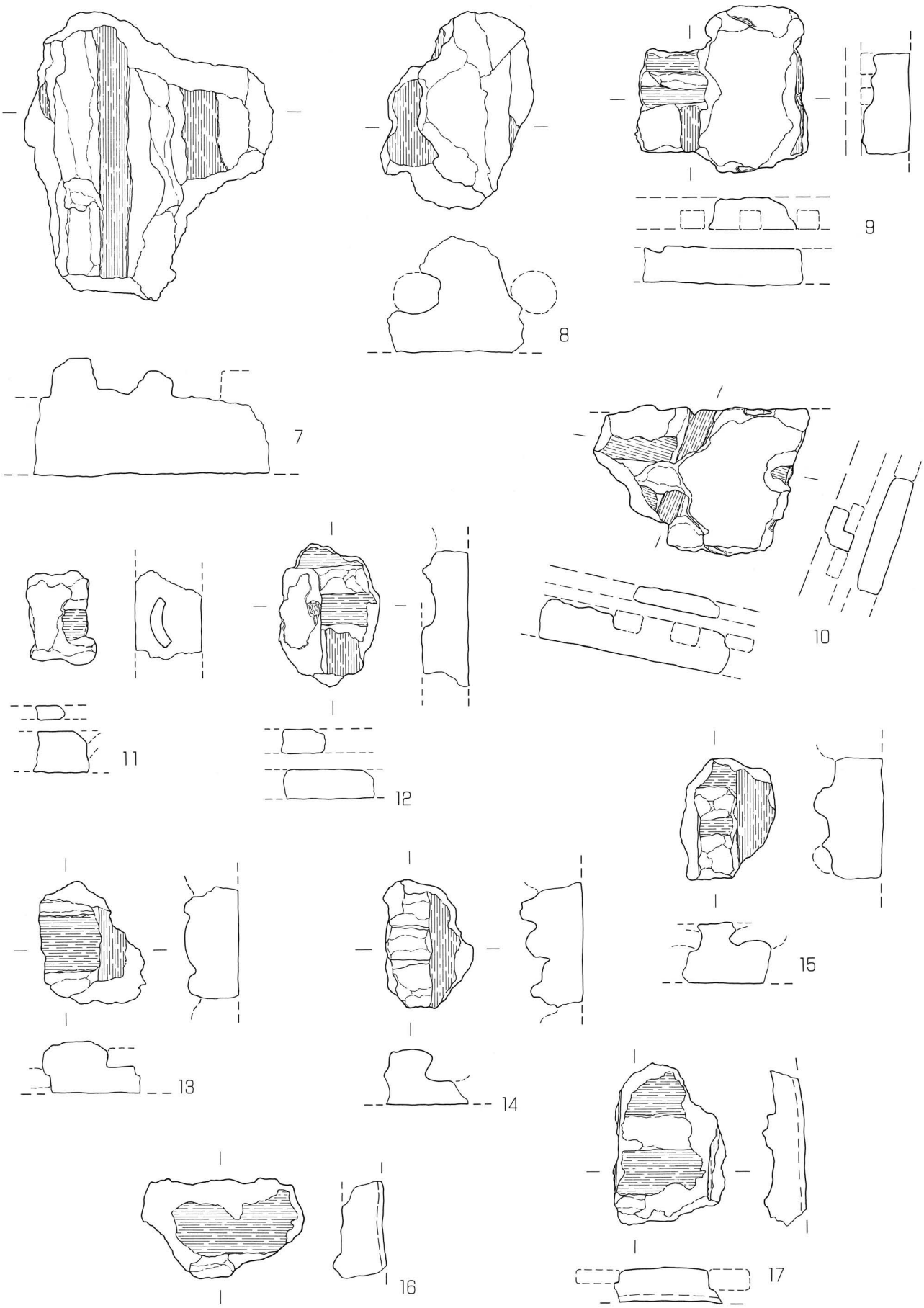


図25　壁土実測図（2）

表２　北側馬出出土遺物観察表

単位(cm)

図	番号	出土位置	種別・器種	法量(cm) 口径	底径	器高	部位	観察所見(調整・文様・その他)	胎土	備考(時代等)
13	1	３号堀	青磁　碗	13.0			口縁～体部	被熱	密	
13	2	３号堀	青磁　盤				体部		やや密	
13	3	３号堀	青磁　酒会壺				底部	被熱	密	
13	4	３号堀	青磁　香炉					被熱、花弁文	密	
13	5	３号堀	白磁　端反皿	16.0			口縁～体部		緻密	
13	6	３号堀	染付　碗	11.8			口縁～体部	外面唐草文	緻密	
13	7	３号堀	染付　碗				体部	外面唐草文	緻密	
13	8	３号堀	染付　碗					外面唐草文	緻密	
13	9	３号堀	染付　皿				口縁部	四方襷文	緻密	
13	10	３号堀	染付　(端反)碗？			4.4	底部	高台内まで施釉	緻密	
13	11	３号堀	瀬戸美濃　灰釉平碗	18.4			口縁～体部	被熱	やや粗	大窯１
13	12	３号堀	瀬戸美濃　灰釉平碗	16.0			口縁部	被熱	やや粗	大窯１
13	13	３号堀	磁器　皿	9.0			口縁～体部		緻密	江戸？
14	1	３号堀	常滑　甕				口縁部		密	
14	2	３号堀	常滑　甕				口縁部		密	
14	3	３号堀	常滑　甕				口縁部		密	
14	4	３号堀	常滑　甕				口縁部		密	
14	5	３号堀	常滑　甕				口縁部		密	
14	6	３号堀	常滑　甕				口縁部		密	
14	7	３号堀	常滑　甕				口縁部		密	
14	8	３号堀	常滑　甕				胴部		やや粗	
14	9	３号堀	常滑　甕				胴部		やや密	
14	10	３号堀	常滑　甕				胴部		やや粗	
14	11	３号堀	常滑　甕				胴部		密	
14	12	３号堀	常滑　甕				胴部		密	
14	13	３号堀	常滑　甕				胴部		やや密	
15	1	３号堀	常滑　甕				胴部		やや粗	
15	2	３号堀	常滑　甕				胴部	内面指頭痕	密	
15	3	３号堀	常滑　甕				胴部	内面ヘラナデ	やや密	
15	4	３号堀	常滑　甕				胴部		密	
15	5	３号堀	常滑　甕				胴部		密	
15	6	３号堀	常滑　甕				胴部		やや密	
15	7	３号堀	常滑　甕				胴部	内面ヘラナデ、外面指頭痕	やや密	
15	8	３号堀	常滑　甕				底部		密	
15	9	３号堀	常滑　甕				底部	外面重ね焼き痕	密	
15	10	３号堀	常滑　甕				底部		密	
15	11	３号堀	常滑　甕				底部		密	
16	1	３号堀	土器　かわらけ	6.4	1.6	4.8	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
16	2	３号堀	土器　かわらけ	7.4	1.6	2.9	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや粗	
16	3	３号堀	土器　かわらけ	7.2	2.0	3.2	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
16	4	３号堀	土器　かわらけ	8.0	1.8	5.2	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや粗	
16	5	３号堀	土器　かわらけ	8.8	1.8	5.4	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
16	6	３号堀	土器　かわらけ	8.7	2.0	4.8	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
16	7	３号堀	土器　かわらけ	7.8	1.8	4.0	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
16	8	３号堀	土器　かわらけ	8.3	2.0	4.0	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
16	9	３号堀	土器　かわらけ	8.9	1.8	4.8	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
16	10	３号堀	土器　かわらけ	9.0	1.9	5.0	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
16	11	３号堀	土器　かわらけ	10.1	2.1	5.8	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや粗	

図	番号	出土位置	種別・器種	法量(cm) 口径	底径	器高	部位	観察所見(調整・文様・その他)	胎土	備考(時代等)
16	12	3号堀	土器 かわらけ	9.0	1.6	5.8	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
16	13	3号堀	土器 かわらけ	9.6	2.0	5.5	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
16	14	3号堀	土器 かわらけ	9.2	2.2	4.6	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
16	15	3号堀	土器 かわらけ	9.6	1.9	4.7	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り 口縁部・見込み部スス付着	やや密	
16	16	3号堀	土器 かわらけ	8.6	1.9	4.8	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
16	17	3号堀	土器 かわらけ	10.0	1.9	5.8	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
16	18	3号堀	土器 かわらけ	9.8	2.2	5.2	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
16	19	3号堀	土器 かわらけ	9.5	1.9	5.0	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
16	20	3号堀	土器 かわらけ			5.4	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや粗	
16	21	3号堀	土器 かわらけ			5.2	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
16	22	3号堀	土器 かわらけ			5.8	底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
16	23	3号堀	土器 かわらけ			5.8	底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
16	24	3号堀	土器 かわらけ			5.6	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
17	1	3号堀	土器 かわらけ			4.6	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
17	2	3号堀	土器 かわらけ			5.0	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
17	3	3号堀	土器 かわらけ			5.8	底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
17	4	3号堀	土器 かわらけ			5.8	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
17	5	3号堀	土器 かわらけ	8.8	2.2	6.2	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや粗	
17	6	3号堀	土器 かわらけ	10.2	2.2	6.4	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや粗	
17	7	3号堀	土器 かわらけ	10.3	2.2	6.4	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや粗	
17	8	3号堀	土器 かわらけ	10.9	2.2	6.2	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや粗	
17	9	3号堀	土器 かわらけ	10.4	2.1	5.9	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
17	10	3号堀	土器 かわらけ	9.9	2.4	5.4	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
17	11	3号堀	土器 かわらけ	10.2	1.8	5.5	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り 口縁部スス付着	やや粗	
17	12	3号堀	土器 かわらけ	11.1	2.0	5.4	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
17	13	3号堀	土器 かわらけ	10.7	1.9	6.4	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
17	14	3号堀	土器 かわらけ	10.9	1.6	6.1	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
17	15	3号堀	土器 かわらけ	10.9	1.7	5.2	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
17	16	3号堀	土器 かわらけ	10.4	1.8	6.0	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
17	17	3号堀	土器 かわらけ	10.3	2.2	5.6	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
17	18	3号堀	土器 かわらけ	11.4	2.5	5.8	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
17	19	3号堀	土器 かわらけ	11.5	2.9	5.6	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
17	20	3号堀	土器 かわらけ	11.2	2.6	5.8	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	

図	番号	出土位置	種別・器種	法量(cm) 口径	底径	器高	部位	観察所見(調整・文様・その他)	胎土	備考(時代等)
17	21	3号堀	土器 かわらけ	11.4	2.3	4.4	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
17	22	3号堀	土器 かわらけ	11.1	2.4	5.6	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
17	23	3号堀	土器 かわらけ	11.1	2.6	5.4	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
17	24	3号堀	土器 かわらけ			5.5	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
17	25	3号堀	土器 かわらけ			5.8	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
17	26	3号堀	土器 かわらけ			5.3	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
18	1	3号堀	土器 かわらけ			6.0	底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
18	2	3号堀	土器 かわらけ			6.5	底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
18	3	3号堀	土器 かわらけ			6.0	底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
18	4	3号堀	土器 かわらけ			3.0	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
18	5	3号堀	土器 かわらけ			6.2	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
18	6	3号堀	土器 かわらけ			6.8	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
18	7	3号堀	土器 かわらけ			6.4	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
18	8	3号堀	土器 かわらけ			6.0	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
18	9	3号堀	土器 かわらけ	10.0	2.1	6.0	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
18	10	3号堀	土器 かわらけ	11.0	2.6	6.2	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや粗	
18	11	3号堀	土器 かわらけ	11.0	2.4	6.2	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
18	12	3号堀	土器 かわらけ	11.7	2.4	6.4	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
18	13	3号堀	土器 かわらけ	11.1	2.1	6.3	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り 外面スス付着	やや粗	
18	14	3号堀	土器 かわらけ	11.6	2.5	6.2	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
18	15	3号堀	土器 かわらけ			6.6	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
18	16	3号堀	土器 かわらけ	11.3	2.2	6.7	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
18	17	3号堀	土器 かわらけ	11.4	2.5	6.6	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや粗	
18	18	3号堀	土器 かわらけ	11.7	2.6	6.6	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗 内面・外面口縁部スス付着	やや密	
18	19	3号堀	土器 かわらけ	12.4	2.4	5.6	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
18	20	3号堀	土器 かわらけ	11.9	2.6	6.8	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
18	21	3号堀	土器 かわらけ	11.6	3.0	6.5	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
18	22	3号堀	土器 かわらけ	12.3	2.1	6.6	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
18	23	3号堀	土器 かわらけ	11.2	2.0	6.4	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
18	24	3号堀	土器 かわらけ			7.0	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
18	25	3号堀	土器 かわらけ			7.1	底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
19	1	3号堀	土器 かわらけ	11.4	2.8	7.0	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
19	2	3号堀	土器 かわらけ	12.2	2.8	6.0	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
19	3	3号堀	土器 かわらけ	12.1	2.8	6.2	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り 内外面タール付着	やや密	

図	番号	出土位置	種別・器種	法量(cm) 口径	底径	器高	部位	観察所見(調整・文様・その他)	胎土	備考(時代等)
19	4	3号堀	土器 かわらけ	12.5	2.5	6.6	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り 底部漆？付着	やや密	
19	5	3号堀	土器 かわらけ	12.4	2.6	6.8	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
19	6	3号堀	土器 かわらけ	12.0	2.3	5.4	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
19	7	3号堀	土器 かわらけ	11.7	2.2	7.0	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
19	8	3号堀	土器 かわらけ	12.7	2.6	5.6	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
19	9	3号堀	土器 かわらけ	12.1	2.6	7.1	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
19	10	3号堀	土器 かわらけ	12.5	2.7	7.4	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
19	11	3号堀	土器 かわらけ	12.9	2.6	6.0	口縁～底部	ロクロ成形、底部摩耗	緻密	
19	12	3号堀	土器 かわらけ	11.6	2.4	7.2	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや粗	
19	13	3号堀	土器 かわらけ	13.0	2.9	7.3	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗 口縁部内外面スス付着	やや密	
19	14	3号堀	土器 かわらけ	13.5	3.0	7.2	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
19	15	3号堀	土器 かわらけ	13.0	2.8	7.2	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
19	16	3号堀	土器 かわらけ			8.0	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
19	17	3号堀	土器 かわらけ			7.0	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
19	18	3号堀	土器 かわらけ			7.2	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
19	19	3号堀	土器 かわらけ			7.9	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
19	20	3号堀	土器 かわらけ			9.0	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや粗	
20	1	3号堀	土器 火鉢	37.0			口縁部	ロクロ成形、口縁部に菊花文押印	やや密	
20	2	3号堀	土器 火鉢	32.0			口縁部	ロクロ成形、口縁部に菊花文押印	やや密	
20	3	3号堀	土器 火鉢	28.8			口縁部	ロクロ成形、口縁部に菊花文押印	やや密	
20	4	3号堀	土器 火鉢				口縁部	ロクロ成形、口縁部に菊花文押印	やや密	
20	5	3号堀	土器 火鉢				口縁部	ロクロ成形、口縁部に菊花文押印	やや密	
20	6	3号堀	土器 火鉢				口縁部	ロクロ成形、口縁部に菊花文押印	やや密	
20	7	3号堀	土器 火鉢				口縁部	ロクロ成形、口縁部に菊花文押印	やや密	
20	8	3号堀	土器 火鉢				脚部		やや密	
20	9	3号堀	土器 火鉢か				体部		やや粗	
20	10	3号堀	土器 擂鉢				体部		やや粗	
20	11	3号堀	土器 内耳鍋か				口縁部	ロクロ成形	やや密	
20	12	3号堀	土器 内耳鍋				底部	ロクロ成形	やや粗	
20	13	3号堀	土器 捏鉢			31.0	体部～底部	ロクロ成形	やや密	
20	14	3号堀	土器 かわらけ	3.6	1.2	3.6	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
20	15	3号堀	須恵器 甕				胴部	外面叩き目	密	
20	16	3号堀	土器 耳皿	4.4	2.2	3.4	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
21	1	一括	青磁 碗				口縁部		緻密	
21	2	Tr－1	白磁 端反皿か			6.6	底部	高台畳付無釉、砂敷焼成	緻密	
21	3	一括	白磁 端反皿か			5.4	体部～底部	高台畳付無釉、砂敷焼成	緻密	
21	4	一括	白磁 端反皿	14.7	3.4	5.0	口縁～底部	被熱	緻密	
21	5	一括	白磁 端反皿か			5.4	体部～底部	高台畳付無釉、砂敷焼成	緻密	
21	6	Tr－1	染付 (端反)皿			9.8	体部～底部	内外面・見込みとも唐草文 砂敷焼成	緻密	
21	7	一括	染付 端反皿				口縁部	口縁部内面 四方襷文	緻密	

図	番号	出土位置	種別・器種	法量(cm) 口径	底径	器高	部位	観察所見(調整・文様・その他)	胎土	備考(時代等)
21	8	一括	染付　端反皿				口縁部	口縁部内面、四方襷文	緻密	
21	9	一括	染付　碗				口縁部	被熱	緻密	
21	10	一括	染付　皿				口縁部	外面竹文	緻密	
21	11	Ｔｒ－１	染付　碗				体部		緻密	
21	12	一括	染付				体部		緻密	
21	13	一括	染付				底部	被熱	緻密	
21	14	Ｔｒ－２	瀬戸美濃　天目茶碗	11.9			口縁部	被熱	密	大窯１か
21	15	Ｔｒ－１	瀬戸美濃　灰釉丸皿			2.3	体部～底部	被熱、削り出し高台	やや密	大窯１or大窯２
21	16	一括	初山　天目茶碗				口縁部		密	大窯３後半
21	17	Ｔｒ－２	瀬戸美濃　鉄釉小瓶か				底部	内面施釉、外面錆釉	やや粗	大窯１か
21	18	一括	瀬戸美濃　鉄釉壺or瓶					外面施釉	やや密	後期様式
21	19	一括	美濃　飴釉徳利				体部		やや粗	５・６小期
21	20	一括	瀬戸美濃　鉄釉小壺or小瓶				底部	内面施釉、外面露胎 底部回転糸切り	やや密	後期様式
22	1	１号暗渠	土器　かわらけ			5.4	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
22	2	１号暗渠	土器　かわらけ			6.8	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
22	3	１号暗渠	土器　かわらけ			7.0	底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
22	4	１号暗渠	土器　かわらけ	12.1	2.2	5.8	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
22	5	Ｔｒ－１	土器　かわらけ	10.0	2.2	6.6	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
22	6	Ｔｒ－２	土器　かわらけ	9.1	2.2	5.4	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
22	7	Ｔｒ－２	土器　かわらけ			6.2	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
22	8	Ｔｒ－２	土器　かわらけ	12.6			口縁～体部	ロクロ成形、内外面タール付着	やや密	
22	9	Ｔｒ－２	土器　かわらけ			4.6	底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
22	10	一括	土器　かわらけ	10.0	1.6	7.0	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
22	11	一括	土器　かわらけ	10.4	1.8	5.4	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り 口縁部スス付着	やや密	
22	12	一括	土器　かわらけ	8.8			口縁～体部	ロクロ成形 被熱による瓦質化、内面溶融物付着	やや粗	
22	13	一括	土器　かわらけ	11.5			口縁～体部	ロクロ成形 被熱による瓦質化、内面溶融物付着	やや粗	
22	14	一括	土器　かわらけ			6.8	体部～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや粗	
22	15	一括	土器　かわらけ	13.5	2.3	7.4	口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り	やや密	
22	16	一括	土器　耳皿		2.1		口縁～底部	ロクロ成形、底部回転糸切り痕摩耗	やや密	
22	17	一括	陶器　鉄釉壺	21.8			口縁部	被熱	密	
22	18	一括	土器　捏鉢	22.4			口縁部	ロクロ成形	やや密	
22	19	Ｔｒ－２	土器　捏鉢(?)	17.1			口縁～体部	ロクロ成形	やや密	
22	20	１号土塁	土器　鍋(?)			21.8	体部～底部	内面ロクロナデ、外面指ナデ	やや粗	
22	21	１号土塁	土製品土製円盤(?)	径3.1　厚0.7					やや密	
22	22	Ｔｒ－２	土器　火鉢				口縁部	ロクロ成形、口縁部に菊花文押印	やや密	

図	番号	出土位置	種　別	(cm)			(g)	備　考
				長	幅	厚	重	
23	1	3号堀	五輪塔　地輪	24.15	29.45	10.60	9400	石材　安山岩
23	2	3号堀	石製品　硯	3.66	1.55	0.58	2.60	石材　砂岩
23	3	一括	石器　磨製石鏃	2.50	1.81	0.22	1.50	石材　粘板岩？
23	4	一括	石器　打製石鏃	1.72	1.27	0.29	0.40	石材　黒曜石
23	5	3号堀	金属製品　釘	2.67	0.36	0.22	0.70	鉄製
23	6	3号堀	金属製品　釘	2.34	0.25	0.24	0.70	鉄製
23	7	3号堀	金属製品　釘	3.96	0.33	0.31	1.00	鉄製
23	8	3号堀	金属製品　釘	3.31	0.40	0.41	1.40	鉄製
23	9	3号堀	金属製品　釘	3.75	0.46	0.47	1.60	鉄製
23	10	3号堀	金属製品　釘	5.40	1.45	1.22	12.70	鉄製
23	11	3号堀	金属製品　釘	5.72	1.03	0.85	7.90	鉄製
23	12	3号堀	金属製品　釘	6.41	1.03	0.79	7.70	鉄製
23	13	3号堀	金属製品　釘	6.76	1.09	1.06	8.60	鉄製
23	14	3号堀	金属製品　釘	8.90	1.17	1.13	14.40	鉄製
23	15	3号堀	金属製品　釘	6.56	1.07	0.84	6.70	鉄製
23	16	3号堀	金属製品　不明	6.58	2.56	1.51	25.60	鉄製
23	17	3号堀	金属製品　楔	8.59	2.42	1.11	64.10	鉄製
23	18	3号堀	金属製品　不明	3.88	0.78	0.78	4.40	鉄製
23	19	3号堀	金属製品　鋲	0.80	頭部径1.10	釘厚2.55	0.70	銅製、釘断面方形
23	20	3号堀	金属製品　鋲	0.83	頭部径1.10	釘厚0.27	0.80	銅製、釘断面方形
23	21	3号堀	金属製品　鋲	0.81	頭部径1.20	釘厚0.25	0.90	銅製、釘断面方形
23	22	3号堀	金属製品　鋲	0.73	頭部径1.20	釘厚0.23	0.80	銅製、釘断面方形
23	23	3号堀	金属製品　鋲	1.16	頭部径1.20	釘厚　－	1.40	銅製、釘断面方形
23	24	3号堀	金属製品　不明	4.25	幅　1.57	厚　0.93	13.90	銅製？
23	25	3号堀	金属製品　不明	1.52	幅　1.65	厚　0.31	0.40	銅製
23	26	3号堀	金属製品　鉄砲玉	径1.20		重7.80		鉛製
23	27	3号堀	銭貨	径　－	孔径　－	厚　0.26	重　1.10	
23	28	3号堀	銭貨	径　－	孔径　－	厚　0.23	重　0.50	
23	29	3号堀	銭貨	径　2.50	孔径　0.67	厚　0.25	重　1.70	
23	30	表土層一括	銭貨	径　2.52	孔径　0.59	厚　0.11	重　2.60	寛永通宝

2．小　括

(1) 遺構の変遷

多くの遺構・遺物を検出するとともに新たな知見を得ることができた。検出した遺構は重複関係から2時期の変遷が捉えられる。堀の拡張を画期として、通路をも改変され、様相は大きく一変する。

Ⅰ期

1号堀・2号堀・石列などが存在すると考えられる。東西方向に構築された1号堀は幅1.80m程を掘り残し、土橋を設けている。約1.50m南側にも1号堀と並行し、対となる2号堀が存在する。喰い違い形態をなし、迂回して侵入する経路が想定できる。2号堀脇から確認できた版築状の土層堆積が土橋から続く通路と考えられる。石列はこうした通路を画していたのであろう。

Ⅱ期

3号堀・1号土塁・2号土塁・暗渠などが存在する。1号堀は拡張され、張り出し部を設けることにより3号堀となる。張り出し部は堀底から石積みが施され、排水を集約するため、旧1号堀にかけて深くなり、引き続き堀としての機能を有している。南側に存在した2号堀や通路部分を埋め、2号土塁が構築され、幅3.80m程の規模となり、裾部に石積みが築かれる。土塁内に構築された暗渠は、通路として活用していた土橋上に通じ、3号堀へと排水する。この排水路は石蓋をかけ暗渠となる部分と、開口する部分があり、検出状況も、土塁敷きと暗渠部が重なる結果となる。張り出し部西側には1号土塁が築かれ、土塀などの基壇部とも考えられる。北側の裾部に堀に通じる排水溝を設けており、構造物が存在した可能性がある。

Ⅰ期に位置づけられる主要遺構は堀のみであり、喰い違いとなる複雑な経路を堀の配置により創出しているのに対し、Ⅱ期は土塁を構築し、土塀などの構築物をも配しているのが確認できる。土塁・堀・暗渠などを一対に構築し、通路の改変をともなう改修により馬出空間は大きく変貌を遂げている。

(2) 壁土

各地の遺跡から壁土の出土が報告され、詳細な観察を加えた考察事例もみられる(註1)。特に、文献・絵画資料、寺院や城郭修理報告などを集成し、古代より現代に至る壁の変遷を編年的にまとめた山田氏の業績(註2)からは、材料・工法・左官技術など多くを学ぶことができる。ここでは多くの先行業績に導かれ、いくつか気付いた点をまとめておく。

①出土状況（図9、11）

3号堀から大量の壁土が出土した。堀を境に調査区南側一帯から検出されたが、多くは堀の北端、堀底から0.30m程上層に堆積、集中していた。壁土混入土（図11-16層）は層厚0.30mを測り、多量の炭化材・土器片なども含み、堀北端の石積み天端に沿って水平に堆積していた。堀が埋め立てられていることは明瞭であり、多数の礫や径1mに及ぶ巨礫も混入していた。壁土は埋め立てに際し混入・投棄されたものである。

②壁土の状態（図24、25、表３）

多くが小片となり、被熱を受けた土塊であるが、胎土にスサ材と思われる藁状繊維を混入しており、木舞・貫など建築部材の痕跡が確認できるもの、少数であるが表面に上塗されたものも確認できた。木舞下地の場合、木舞部分を境に内外両面から塗り上げるが、多くは壁の中央（木舞部分）で割れた状態である。数点であるが、内外壁面が残り、炭化した木舞が残存している断片もある。いずれの壁土も木舞組み上げ→下塗→中塗→（上塗）の工程を経ており、左官工法で仕上げられた壁の断片と考えられる。小片のため天地は判然としないが、以下、実測図に基づき記述する。

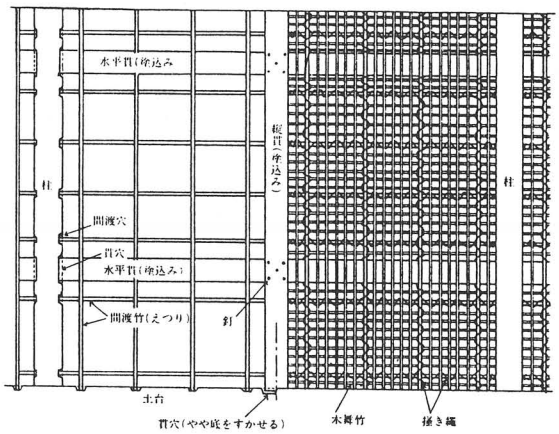


図26　木舞下地模式図
（『日本の壁』INAX出版より転載）

③壁土の特徴

胎土・下地材・木舞組みの状況などから何点かの特徴が指摘できる。

ア）胎土に５mm程の小礫を多く含む一群（図24－１～４、図25－７．８、以下図版番号は略す。）と、篩にかけたように均一で、目の細かい土を用いた一群（５．６．９～17）がある。

イ）下地材は、多くの断片に竹の痕跡が認められるが、榑の使用も数点ある。一点であったが、８は丸木を用いている。幅はいずれも１～２cmの割竹・小割材である。

表3　出土壁土一覧表　　単位cm

NO	下地材		下地組み	下地間隔		壁厚	備　考
	種類	幅		縦方向	横方向	(　)縦横	
図24-1	竹	1.2	木舞一重桟	－	1.2~1.9	(9.2)	縦貫(?)痕あり
図24-2	竹	1.5	木舞一重桟ヵ	－	0.3~0.9	(5.8)	
図24-3	竹ヵ	1.5	木舞一重桟ヵ	－	1.3	(7.0)	
図24-4	竹	0.9~1.6	木舞一重桟ヵ	－	0.8	(6.2)	縦貫(?)痕あり
図24-5	竹	1.0	木舞一重桟ヵ	－	1.0~1.2	(4.2)	被熱により瓦質化 鉄製品付着
図24-6	榑ヵ	1.0~1.5	木舞一重桟	2.2	1.3~1.8	(5.6)	被熱により瓦質化
図25-7	榑	1.0	木舞一重桟ヵ	1.7	－	(8.6)	
図25-8	丸木	径1.6	木舞一重桟ヵ	2.6	－	(8.6)	
図25-9	榑	0.8	木舞一重桟	1.3	0.6	3.3	
図25-10	榑	1.0	木舞一重桟	0.9~1.1	0.7	2.3	
図25-11	竹	1.7	木舞一重桟ヵ	－	－	2.5	
図25-12	竹	1.2	木舞一重桟	－	1.0	2.6	鉄製品付着
図25-13	竹	2.0	木舞一重桟	2.0	－	(3.8)	
図25-14	竹	1.4	木舞一重桟	－	1.2~1.7	(4.4)	
図25-15	竹	1.3	木舞一重桟	1.0	1.2	(5.2)	
図25-16	榑	1.3	木舞一重桟ヵ	－	－	(4.0)	上塗り(厚0.2)あり
図25-17	榑	1.5	木舞一重桟	3.3	1.3	(3.0)	上塗り(厚0.2)あり

ウ）下地組みが確認できるものは全て一重桟となる。２～５．７．８．11．16は一方向の木舞痕のみ認められるが、これに直交する下地材が存在したと思われ、一重桟となる可能性がある。二重桟、木摺下地などの痕跡は見出せなかった。

エ）内外の壁面が残り、壁体の厚さが判明するものがある（９～12）。いずれも３cm程の厚みとなり、一方で推定10cm程の厚さとなるもの（１）も存在する。

オ）数点であったが、表面に厚さ２mm程の上塗を施したもの（16．17）がある。

これら諸特徴から本来、同一の壁体を構成していたと推測されるものに（３と４）、（９と10）、（11と12）、（14と15）、（16と17）などがある。

④文献から見た土壁構築

史料１　「快元僧都記」(註３)

鶴岡八幡宮の再建造営工事に際し、「築地普請」・「壁彩色」などの記事が見える。「白壁師」・「土朱塗師」と呼ばれる職人や「弥六」あるいは「十郎左衛門」など頭領と推定される人物が登場し、上塗・彩色を行っている。上塗・彩色の材料であろうか、白壁土・麻布・膠・米・桶・炭などが記録され(註４)、御殿は上塗工程だけでも三回、塗り上げられている(註５)。天文５年８月19日条に「白壁師上倉、可彩色所有之故也」とあり、上塗・彩色する

場合のみ白壁師を呼び出している。壁構築に際し、白壁師が下地から全て一貫して施工せず、上塗工程と下地組み・荒塗工程とに分割されている。さらに詳細に見れば、上塗・彩色されるのは仮殿・楼門など限られた建物のみである(註6)。

史料2　「北条家朱印状」(註7)

永禄6年（1563）6月10日、玉縄城の塀修理に関し、田名「百姓中」に対し代官の指図のもと五年ごとの修理を命じた後、資材について詳細な指示を記載する。

構築材は「男柱」の他、「小尺木」・「間渡の竹」・「大和竹」を挙げる。「男柱」は一間ごとに立てることが指示されているため須柱に、「小尺木」は貫に、太さ七寸の「間渡の竹」は細割りにし、「大和竹」とともに木舞下地に用いたのであろう。木舞竹を格子目状に編む編材として「縄」があり、屋根材として「萱」がある。「すたわら」はスサ材に用いられたものであろう。以上、七種の資材が指示される。厚さ8寸の壁体を構築するため、石混じりの赤土を強固に搗き固めるよう施行上の注意を指摘した後、その後の維持管理についても命じる。永禄8年、同城の清水曲輪塀修理に関し、同一内容を指示する史料もある(註8)。

史料3　「今川氏真朱印状」(註9)

永禄8年（1565）10月7日、見付城修築に際し、米屋弥九郎が「塀柱」を調達し、その功として「酒役」免除を与えられる。商人米屋弥九郎が、修築資材を調達している。

史料4　「今川氏真朱印状」(註10)

永禄11年（1568）4月15日、引間城の塀修築に関し、「入野郷百姓」に対して25間分を割り当てている。「如前々」とあるためすでに普請役として確立していたと考えられる。

史料5　「北条家朱印状」(註11)

天正4年（1576）3月晦日、江戸城の塀4間分の修築を阿佐ケ谷「百姓」に命じる。

史料6　「北条家朱印状写」(註12)

天正7年（1579）10月2日、新地(註13)の塀構築資材として、太さ8～9寸の「くり・こなら」材66本の進上を命じる。栗材などの堅木がない場合にコナラ材を許容しているなど材種にまで関心を示している。

この他、数例が北条氏関係史料に確認できる(註14)。多くが城普請に際し、普請役として近隣の郷村に塀修築を課しており、史料2・4などは区域を限り割り当て、恒常的な維持管理の体制まで窺える内容である。史料5の追書きには、奉行が塀構築の仕様を心得ている旨が記され、すでに塀構築に際し、一定の仕様が完成していたことが想定できる。構築材の材種・数量規格、資材単価、施行にまで具体的な記述が及ぶ史料2は、土についての規格・単価の記述がなく、上塗に関する何らの指示も見出せない。玉縄城の土塀は周辺の土砂を用いて構築され、上塗も施されていなかったと思われる。同様に、史料1にも土に関する記述は「白壁土」のみであり、周辺の土砂を用いた構築と推定されるが、限定した建物に行う上塗・彩色工程では、「白壁師」の存在とともに土までも選別されていたことが窺われる。

⑤小結

具体的な記述をなす史料2や各地からの出土例は大いに参考となり、今回取り上げた史

史料1

天文二年　閏二月廿八日　下廊所残悉破畢、築地用意也
　　晦日　昨日二十九日、白壁師、同土朱塗師来テ仮殿瑞籬彩色有之
　　八月十六日　（前略）築地用意共京大工毎日下地作之、（後略）
天文三年　六月廿二日　（前略）白壁土以下社頭江被上之
　　七月　九日　白壁師弥六父子、楼門之上彩色足代結之。可入物見具・麻布・膠・米・桶・炭等也、不能具禄、自十七日彩色了、青・黄・赤・白・黒
天文四年　二月　三日　白壁師弥六足代以下結之、御供休部屋等彩色了
　　廿八日　（前略）白壁膠千丁読請取之由申了
　　晦日　（前略）仍自近郷炭六駄、白壁師所来了、奉行太田兵庫助方也、此彩色ニ粳米・膠・炭・肆毛等也、（後略）
　　三月　一白壁　大工十郎左衛門
　　六月　一日　白壁弥六馬場木屋移徒畢、多分社頭腰壁出来
　　十九日　膠二千本自大道寺被渡小別当、白壁師請取之（後略）
　　八月　二日　閼伽井辺構彩色白壁之木屋
天文五年　八月十九日　白壁師上倉、可彩色所有之故也
　　十月　十一日、十二日、十三日迄（中略）白壁師等召上
　　十九日・廿日　下宮廻廊跡築地普請連続
　　廿七日・廿八日　四五間普請出来了、仍数百人毎日宮中入、御殿仮葺下地誘畢
　　閏十月　三日　箱根別当請取築地六間出来了
　　六日　大侍中築地六間出来、九郎殿請取六間
　　九日　為昌十二間之一築地悉出来畢、南大門之白壁以下用意有之、上葺等出来
　　一築地覆者萱同垣悉出来、漸大門朱墨白黄青之彩色有之
天文八年　三月十六日　挿築地可築人数召連遠山上倉（後略）
　　七月　一日　（前略）白壁師弥七郎上倉、御殿壁塗畢
　　一御殿以朱塗之下地先胡粉也、三遍計以朱可塗之由申、格子大都仕付畢
　　九月　一当月中白壁十郎左衛門父子御殿之朱塗之
天文九年　正月十一日　白壁師父子上倉、即武内彩色、至二月致之
　　七月廿六日　（前略）同白壁師上倉
　　一（前略）仍御隔子朱土塗之
天文十年　正月廿八日　挿築地普請之用意、遠山以下江戸在城衆支度

史料3

於見付国府新酒屋弐間之事（印文「如律令」）（遠江国豊田郡）

右、任訴訟之旨領掌訖、然者去々年以来遠州忩劇之処、於見付城中走廻、殊塀柱等相調令奉公云々、為神妙之間、於彼酒役者為新給恩令扶助之条、停止地頭代官之綺、永不可有相違之状如件、

永禄八年乙丑十月七日
米屋弥九郎

史料2

玉繩御城塀之事、（相模國東郡）
東郡・三浦郡・久良岐郡三郡へ被仰付候、但末代之定也、五年ニ一度充可致之事、（相模國）（相模國）（武蔵國）
五間　八十貫役　田名（相模國東郡）
此請取中城、
一、男柱五本、一間ニ一本立、廻一尺三寸、長さ九尺、少成共三寸より内之木ハ、是を可撰捨、栗木ニ定事、
此代百廿五文、一本廿五文充、
一、小尺木拾五本、一間ニ三本充、長さ七尺、
此代四十五文、一本三文充、
一、間渡之竹十本、一間ニ貳本充、ふとさ七寸、（木）
此代六十文、一本六文充、
一、大和竹廿束、一間ニ四束充、
此代百文、一束五文充、
一、繩卅房、一間ニ六房充、
此代十五文、一文ニ二房充、
一、萱廿把、一間ニ四把充、
此代廿文、一文ニ一把充、
一、すたわら卅把、一間ニ六把充、
此代十文、一文ニ三把充、
合三百七十五文
此代田名懸錢之内を以、致前引、殘員數如毎年可致進納者也、
一、塀之あつさ八寸、中へ石ましり之赤土を、いかにもかた（厚）（如何）（堅）くつきかため可申、奉行人之作事ニ可有之事、（固）
一、大風之後ハ、奉行人不及催促、其郷之者來而、塀之覆繩結可致直、此塀末代致請切上、少も雨ニあたらさる様ニ、節と覆之繩結可致直事、可爲肝要事、（驚）
一、塀之人手間之事、一間ニ四人程、五間ニハ廿人也、一日ニ罷出、致出來様可然事、此人足其年ニ當大普請之内を以可被召仕也、
以上
右、於此定末代不可有相違、然者、五年ニ一度充可仕直、猶善九郎代隨觸可走廻、此上致無沙汰付而者、諸百性一と可被爲切頸之旨、被仰出者也、仍被定置所如件、（北條康成）
永禄六年癸亥六月十日（虎朱印）
田名地頭・代官
百姓中
○本文書ノ紙繼目裏ニ、印文「調」ノ朱印アリ。

史料4

引間領之内入野郷事、（印文「如律令」）（遠江国敷智郡）
今度為熊野最花領相定之間、引間城之塀如前々弐拾五間相勤之、此外雇之夫年中卅六日勤之上者、其外之諸役等之事一切免許畢、但城中火急之惣普請就有之者、以其次可勤之、此外陣夫四人之儀出陣并所々番手之時計可立之、平世之儀者、縦雖時之奉行人申付、一円可令停止之、若於背此旨輩者、依言上可加下知者也、仍如件、

永禄十一年四月十五日
入野郷
百姓等

史料5

江戸中城塀之事、（武蔵國豊島郡）
四間　阿佐ケ谷（武蔵國多摩郡）
右、江戸中城塀四間當郷請取ニ、自今以後定置者也、依之掟條々、
一、大風吹散時者、嶋津主水・小野兵庫助・太田四郎兵衛三人觸次第、三日中修覆可致之事、
一、請取之塀破損をハ、何時も彼三人如申付可致之、扨又一年之内何ケ度致候共、奉行之取證文御尋之砌、明鏡ニ可申上事、
一、若奉行人横合非分申付儀有之ハ、小田原へ來、可捧目安事、（相模國西郡）
以上
右、來四月晦日を切而、塀嚴密ニ可致之者也、仍如件、
追而、塀之致様ハ三人之奉行得作意、奉行如申、手際をよく可致之者也、
天正四年丙子三月晦日（虎朱印）
阿佐ケ谷　小代官
百姓中

史料6

新地塀之用、大平之郷星屋拘内、くり・こなら六十六（駿河国駿東郡）堅木なくハこなら類にても本可進上候、ふとさ八九寸一尺迄、美濃守殿代々可為切候定之外、壱本も過上為切間敷候、仍如件、（北条氏規）
己卯十月二日（天正七年）（印文「禄寿応穏」）
星屋殿

料を用い城普請に言及した論考もある(註15)。出土した壁土が、最も厚いもので10cm程となるのに比べ、茅ケ崎城出土の土壁(註16)や史料から復元される玉縄城の事例は厚さ20cm程の壁体となり、大きく異なる。数点だが壁体の厚さが判明する壁土は、厚3cm程となり、篩にかけたように均一な胎土であり建物壁と推定する。上塗を施した壁土も推定3～4cm程の厚さとなり、やはり建物壁と推定する。勝瑞館の調査報告は、会所と推定される礎石建物に厚3cm程の土壁が存在した可能性を指摘しており、壁土の胎土もスサなどを含まず精製されたものという(註17)。建物のどの部位に用いられたか言及されていないが、本遺跡の出土事例も建物壁と考えられる。

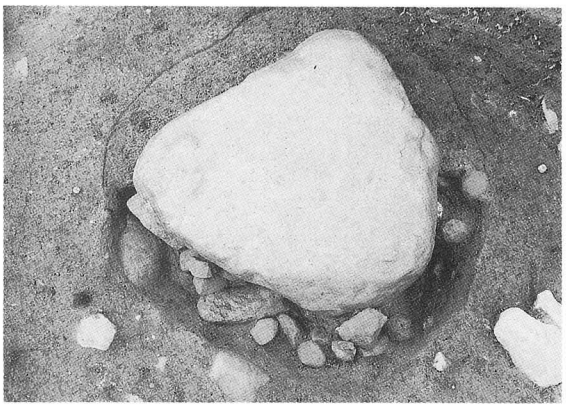
すでに指摘されているが(山田註2)、耶蘇会宣教師の報告には信貴山城や安土城に上塗が施されていた記述があり、絵図資料にも門の両脇のみ白塗された土塀が描かれ、同一邸内でも主要建物のみを白塗している。出土資料中、上塗を残す壁土が主要建物など限定した箇所の断片である可能性は十分考えられるが、いかなる箇所か、その特定にまで至らなかった。

館の虎口前面、馬出空間からの出土事例であるため、多くが土塀などと推定していたが、諸特徴から数種の壁体が推測できた。文献・各地の出土例とともに、堀の埋立にともなう出土状況なども勘案すれば、周辺から雑多に混入したものと解釈すべきで、土塀などの構造物の他、何種類かの建物壁が含まれるであろう。

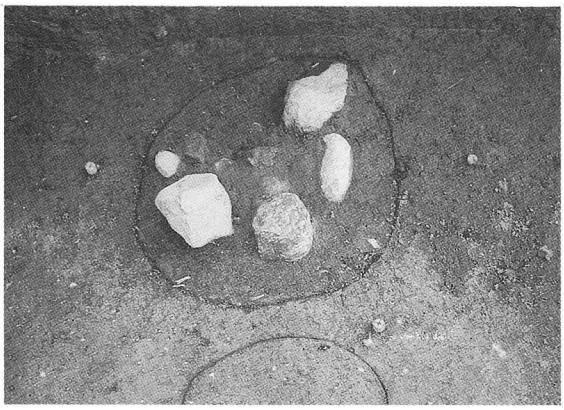
註

1．田邊英男「草戸千軒出土の壁土Ⅰ」「同 Ⅱ」『草戸千軒』No.204、No.212号
2．山田幸一『壁』法政大学出版局1981年
3．下山治久編『戦国遺文 後北條氏編』補遺編　東京堂出版2000年
4．天文3年6月22日条、同年7月22日条。なお、天文4年2月晦日条にも記載される。
5．天文8年7月条
6．彩色を施す建物は、「仮殿」(天文2年閏2月29日条)、「楼門」(同3年7月9日条)、「閼伽井辺構」(同4年8月条)、「南大門」(同5年閏10月9日条)、「大門」(同年閏10月条)、「御殿」(同8年7月1日条)、「武内」(同9年正月11日条)、「御隔子」(同年7月26日条)がある。
7．『戦国遺文　後北條氏編』第1巻815号
8．「北条家朱印状」『戦国遺文　後北條氏編』第2巻925号
9．『静岡県史資料編7』中世3－3293号文書
10．『静岡県史資料編7』中世3－3454号文書
11．『戦国遺文　後北條氏編』第3巻1837号
12．『静岡県史資料編7中世4－1233号文書』
13．泉頭城（静岡県清水町）と推定される。則竹雄一「戦国期駿豆境界地域の大名権力と民衆－天正年間を中心に－」『沼津市史研究』第8号1999年
14．『戦国遺文　後北條氏編』第2巻1280号、『同書』第3巻2078号、2283号、『同書』第4巻3196号、3204号、3205号など。
15．下山治久「後北条氏の城郭管理と城普請」『戦国の兵士と農民』角川出版　杉山博先生還暦記念会編1978年
小和田哲男「戦国大名今川氏の築城人夫役について」『静岡大学教育学部研究報告〈人文・社会科学編〉』35　1984年
16．㈶横浜市ふるさと歴史財団『茅ケ崎城Ⅲ』2000年
17．徳島県教育委員会『勝瑞館跡－守護町勝瑞遺跡東勝地地点　第7次発掘調査概要報告書－』2001年

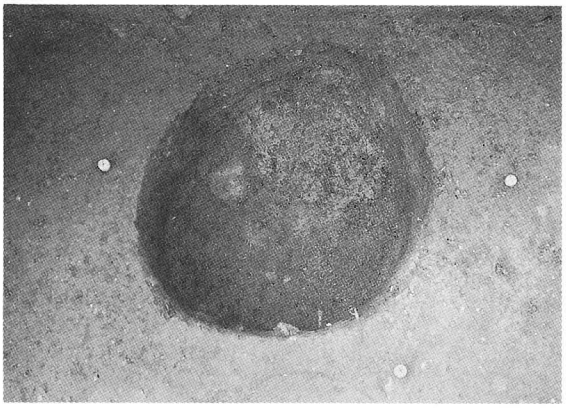
調 査 風 景



ピット1



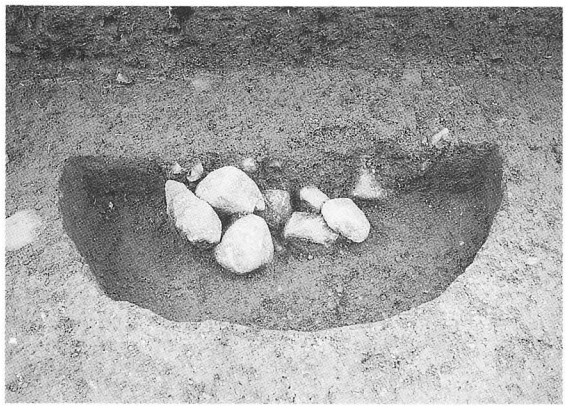
ピット3 検出状況



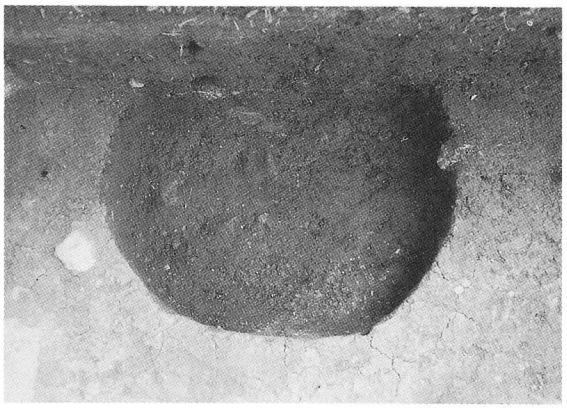
ピット3 完掘状況

ピット4 遺物検出状況

ピット4 完掘状況

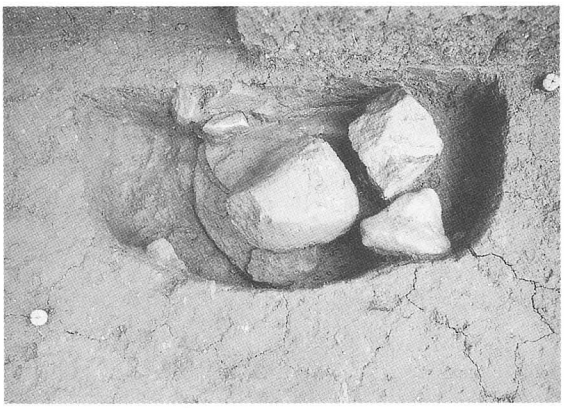


ピット5 礫検出状況

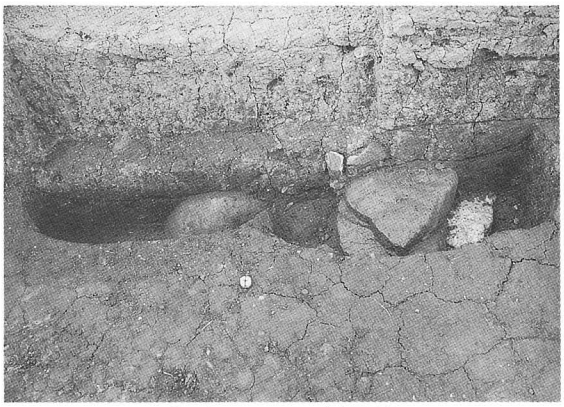


ピット5 完掘状況

図版1 字 三 角 地 点



ピット6 礫検出状況



ピット6，7 完掘状況

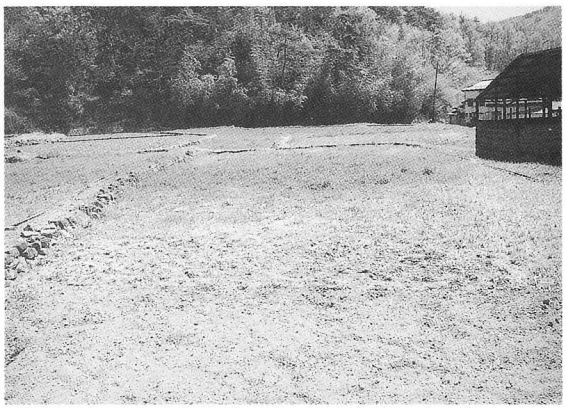
ピット8 完掘状況

調 査 風 景

ピット9 遺物検出状況

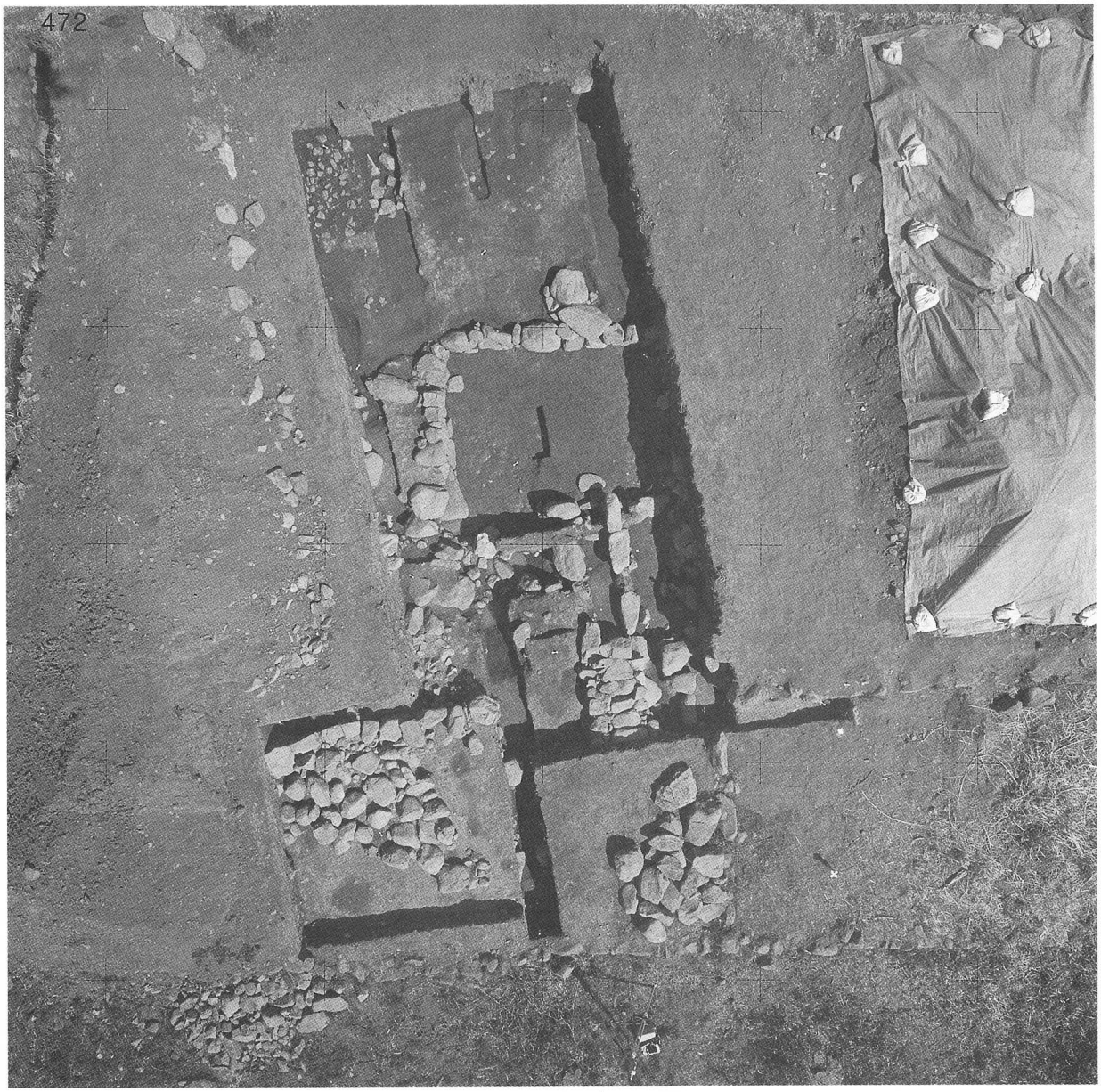
ピット9 完掘状況

溝 完 掘 状 況



調 査 地 近 景

図版2 字 三 角 地 点



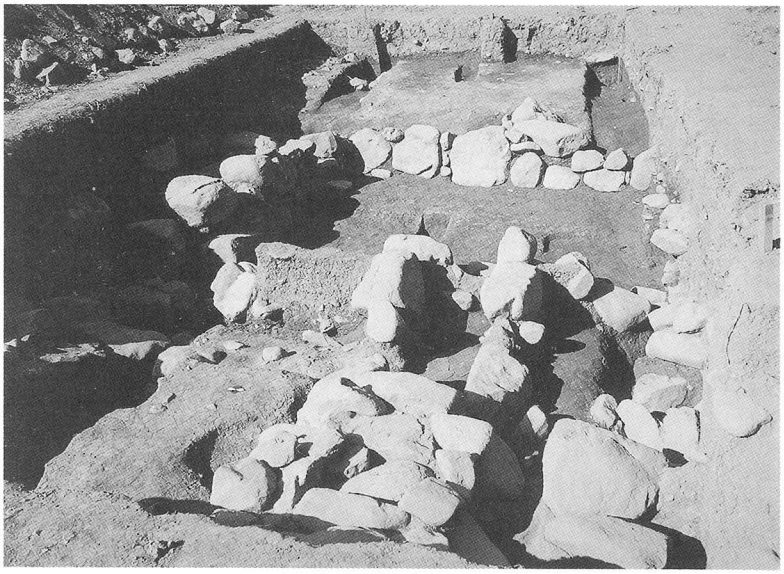
北側馬出地点全景

主郭部北側虎口・土橋

調査状況

図版3　北側馬出地点

手前 暗渠
奥　3号堀



3号堀北側石積み

3号堀西側石積み

図版4　北側馬出地点

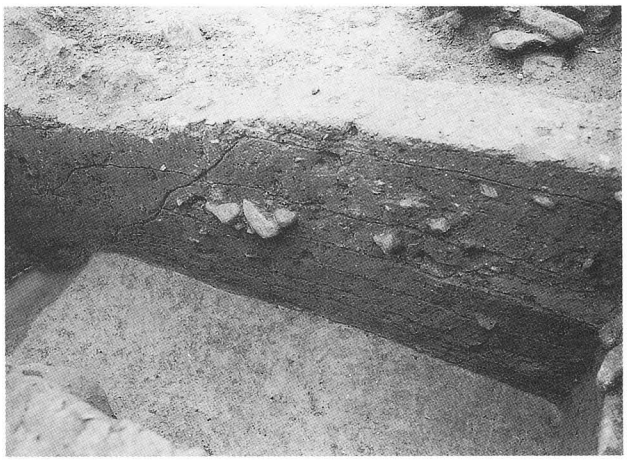
暗渠

暗渠開口部

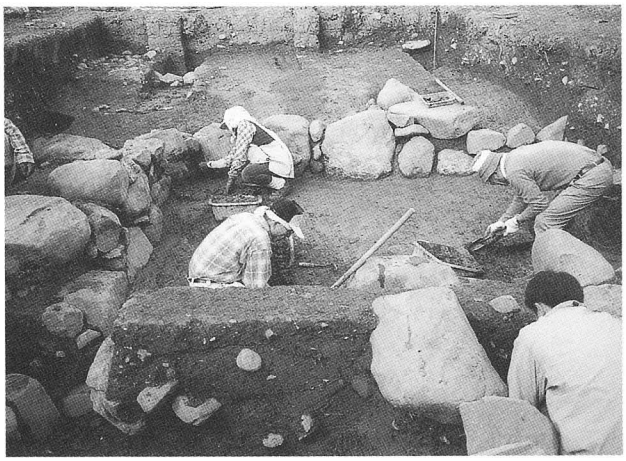
2号土墨

図版5　北側馬出地点

炭化材検出状況



堀落ち込み土層堆積



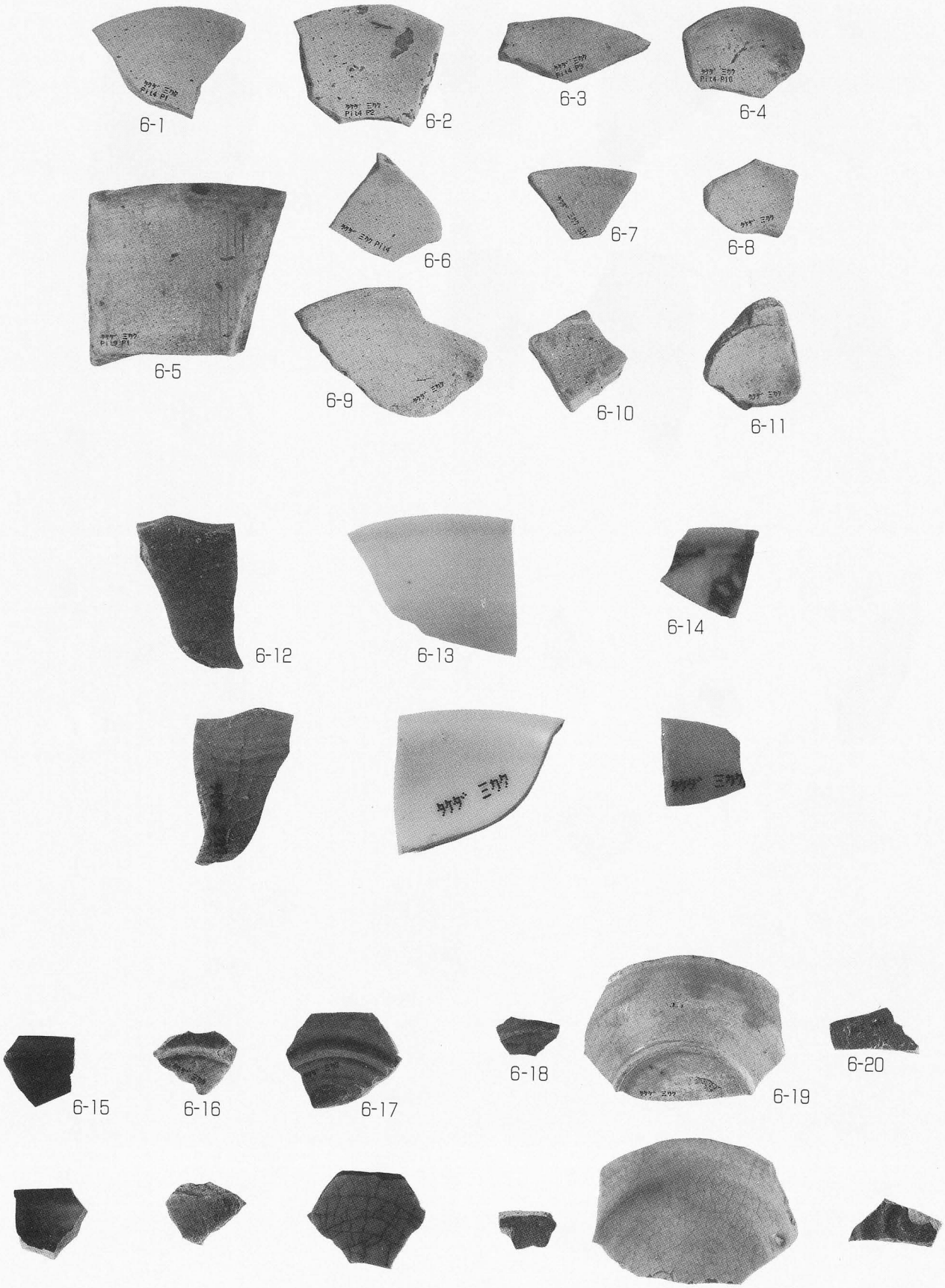
調査状況

2号土塁石積み

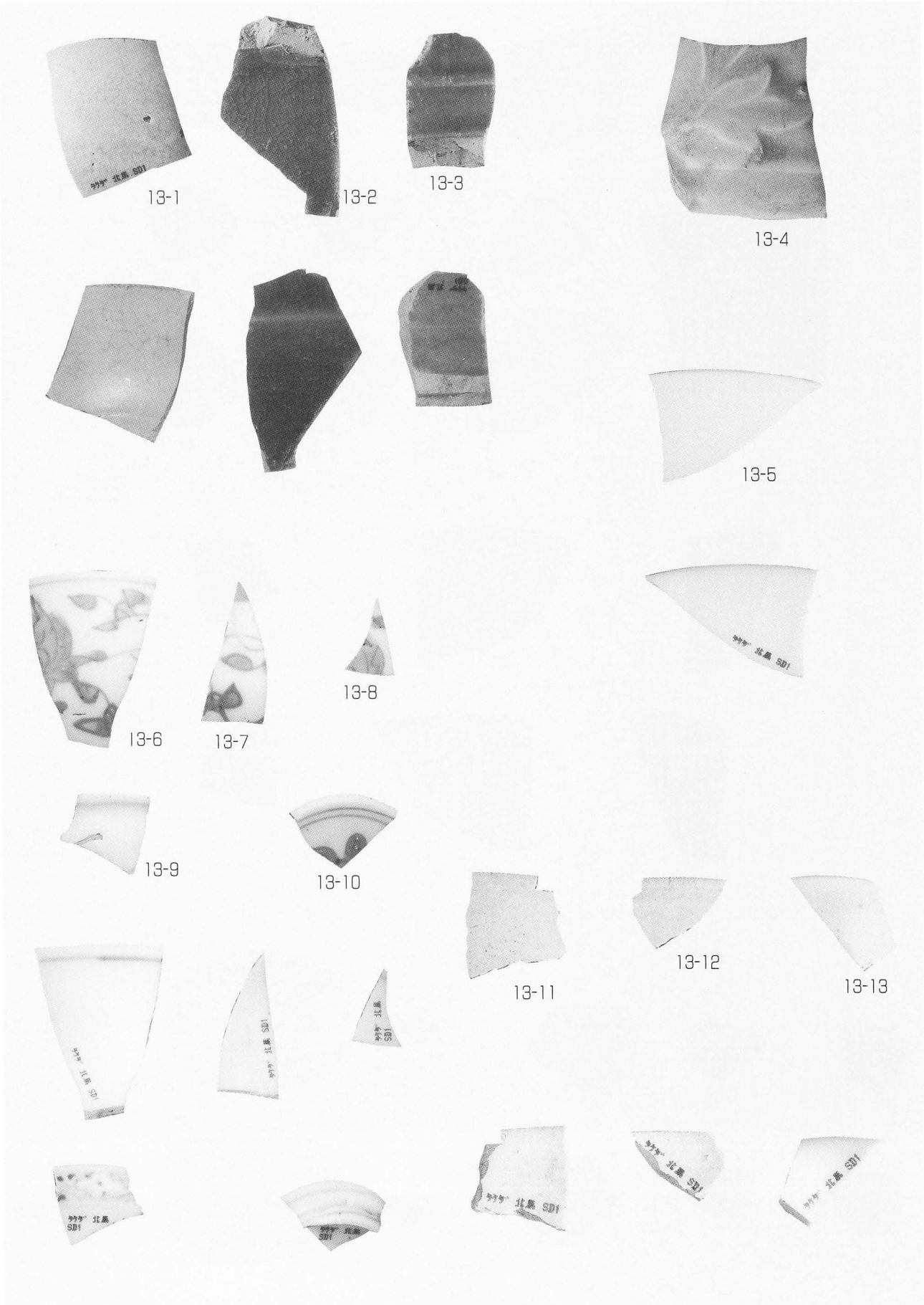
左／石列　　右／暗渠

見学会風景

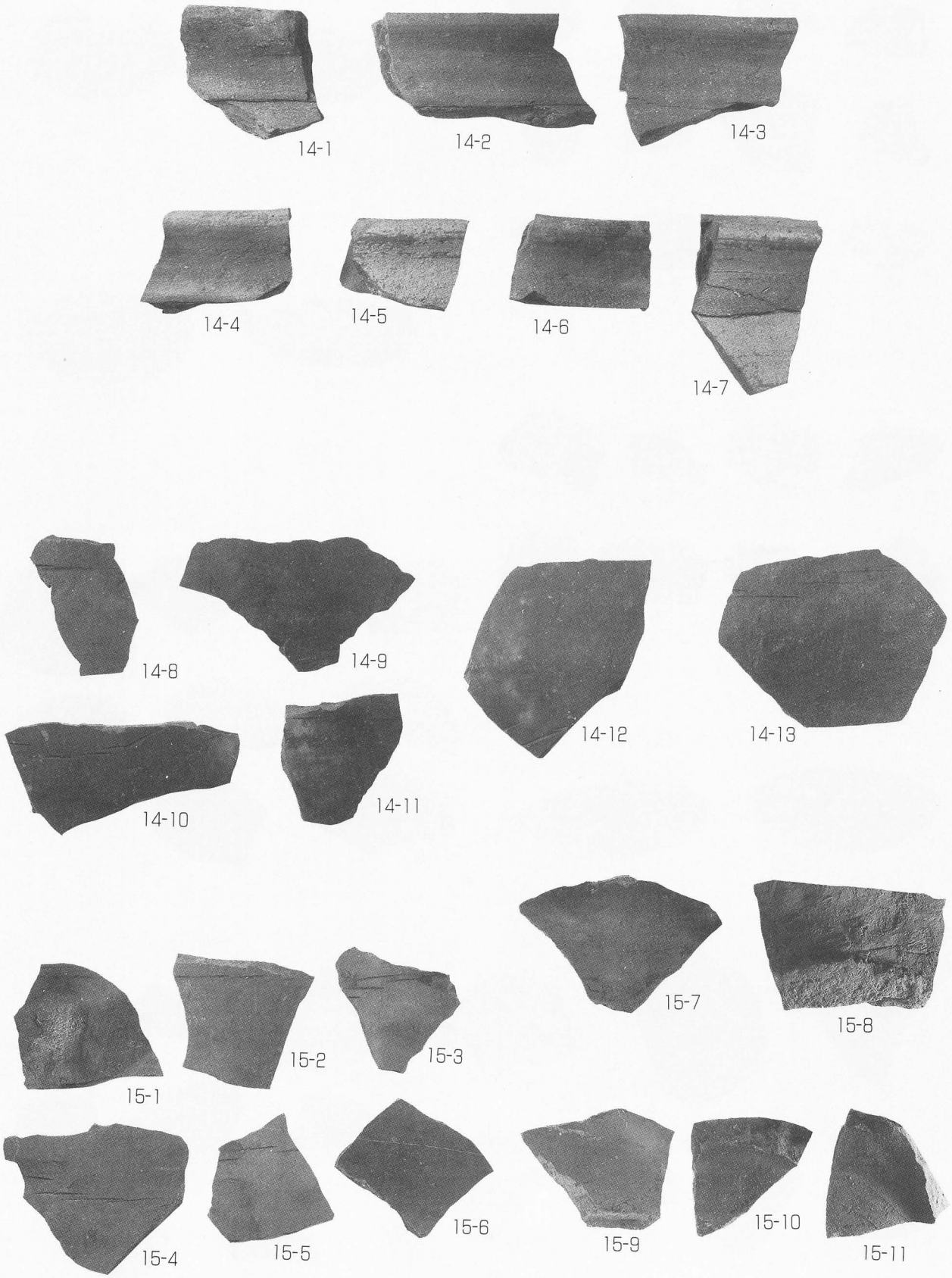
図版6　北側馬出地点


6-1
6-2
6-3
6-4
6-5
6-6
6-7
6-8
6-9
6-10
6-11
6-12
6-13
6-14
6-15
6-16
6-17
6-18
6-19
6-20

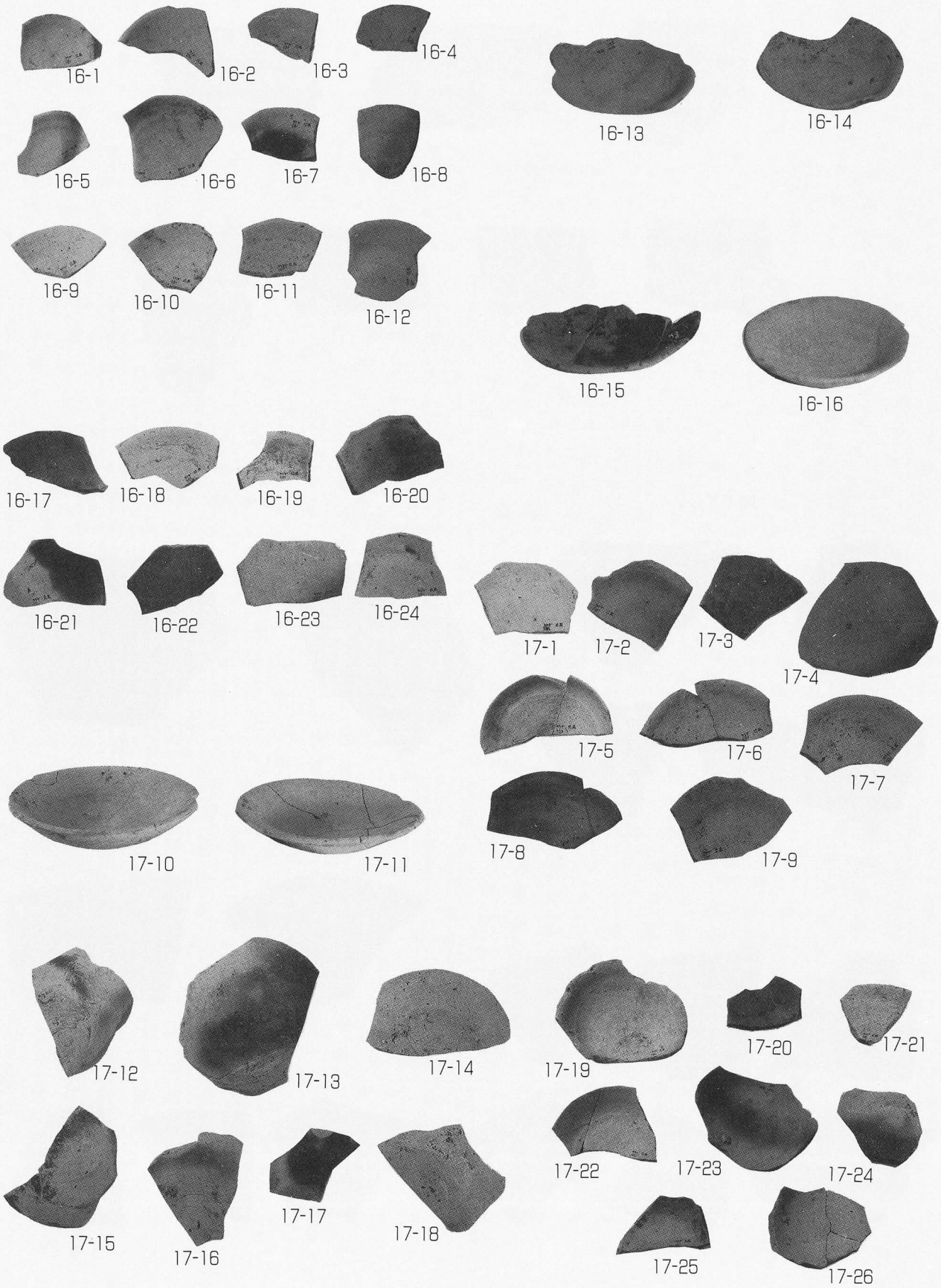
図版7　出土遺物（1）



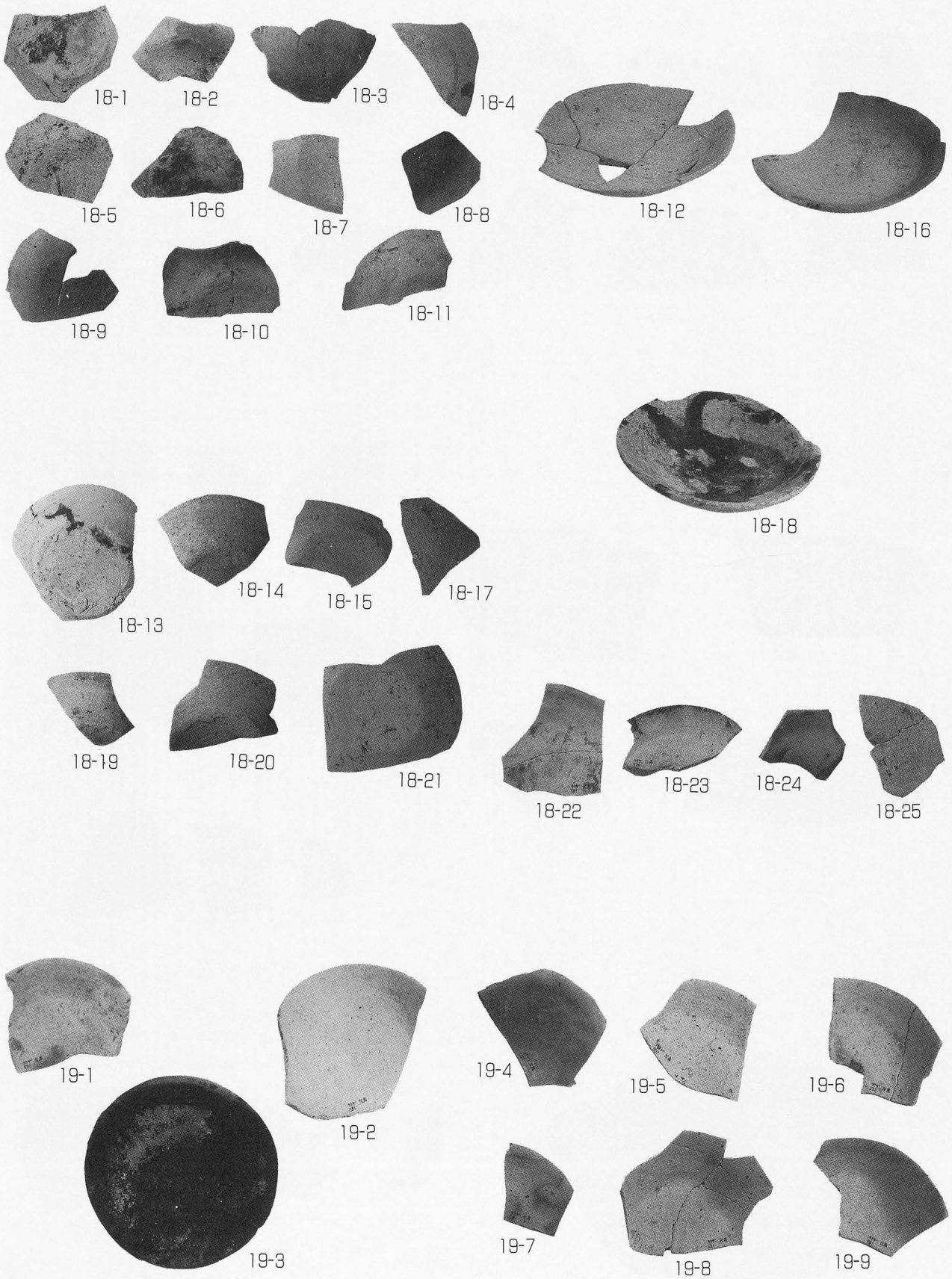
図版8　出土遺物（2）


14-1
14-2
14-3
14-4
14-5
14-6
14-7
14-8
14-9
14-10
14-11
14-12
14-13
15-1
15-2
15-3
15-4
15-5
15-6
15-7
15-8
15-9
15-10
15-11

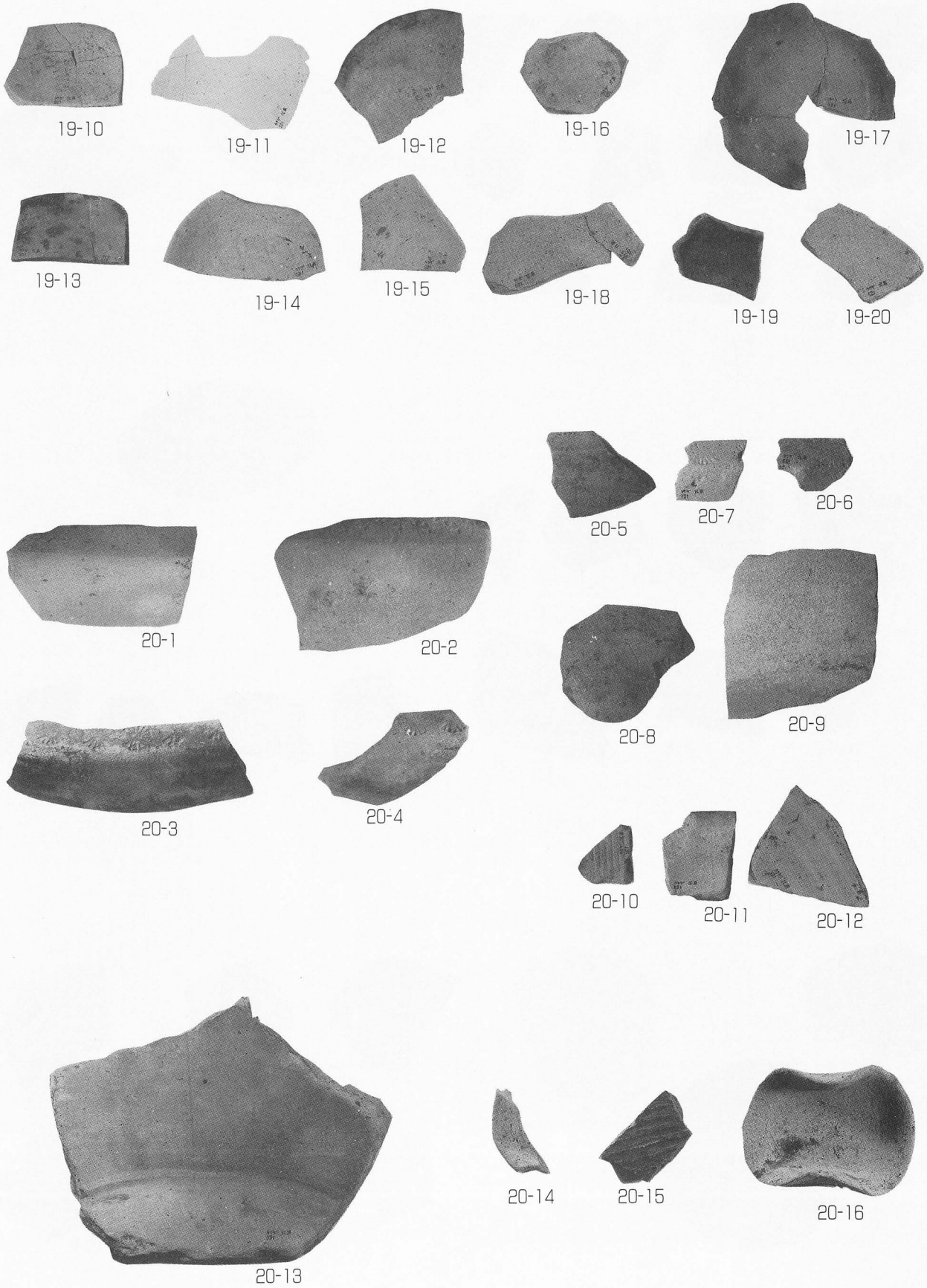
図版9　出土遺物（3）


16-1
16-2
16-3
16-4
16-13
16-14
16-5
16-6
16-7
16-8
16-9
16-10
16-11
16-12
16-15
16-16
16-17
16-18
16-19
16-20
16-21
16-22
16-23
16-24
17-1
17-2
17-3
17-4
17-5
17-6
17-7
17-10
17-11
17-8
17-9
17-12
17-13
17-14
17-19
17-20
17-21
17-22
17-23
17-24
17-15
17-16
17-17
17-18
17-25
17-26

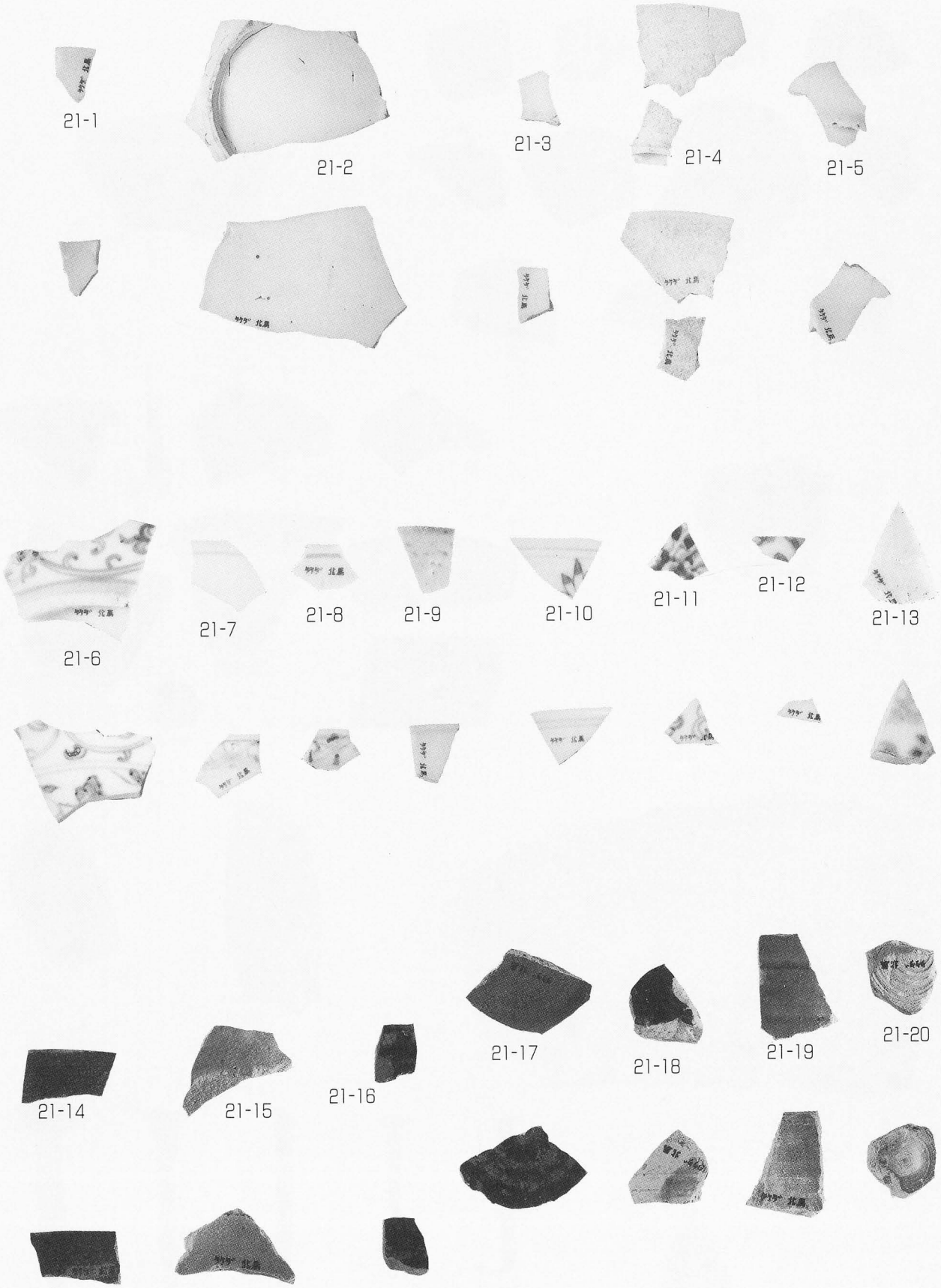
図版10　出土遺物（4）


18-1
18-2
18-3
18-4
18-5
18-6
18-7
18-8
18-12
18-16
18-9
18-10
18-11
18-18
18-13
18-14
18-15
18-17
18-19
18-20
18-21
18-22
18-23
18-24
18-25
19-1
19-2
19-4
19-5
19-6
19-3
19-7
19-8
19-9

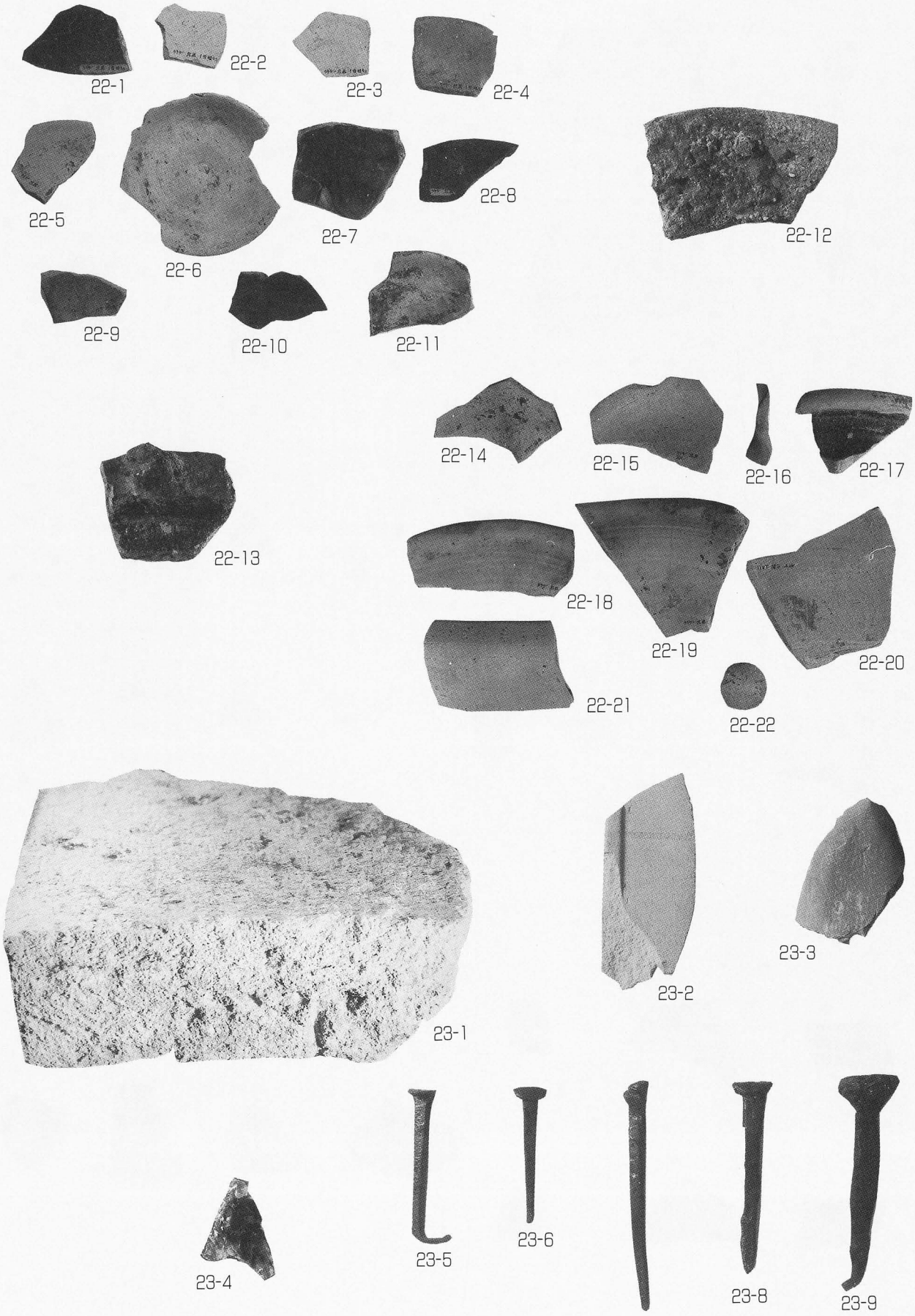
図版11　出土遺物（5）


19-10
19-11
19-12
19-16
19-17
19-13
19-14
19-15
19-18
19-19
19-20
20-5
20-7
20-6
20-1
20-2
20-8
20-9
20-3
20-4
20-10
20-11
20-12
20-13
20-14
20-15
20-16

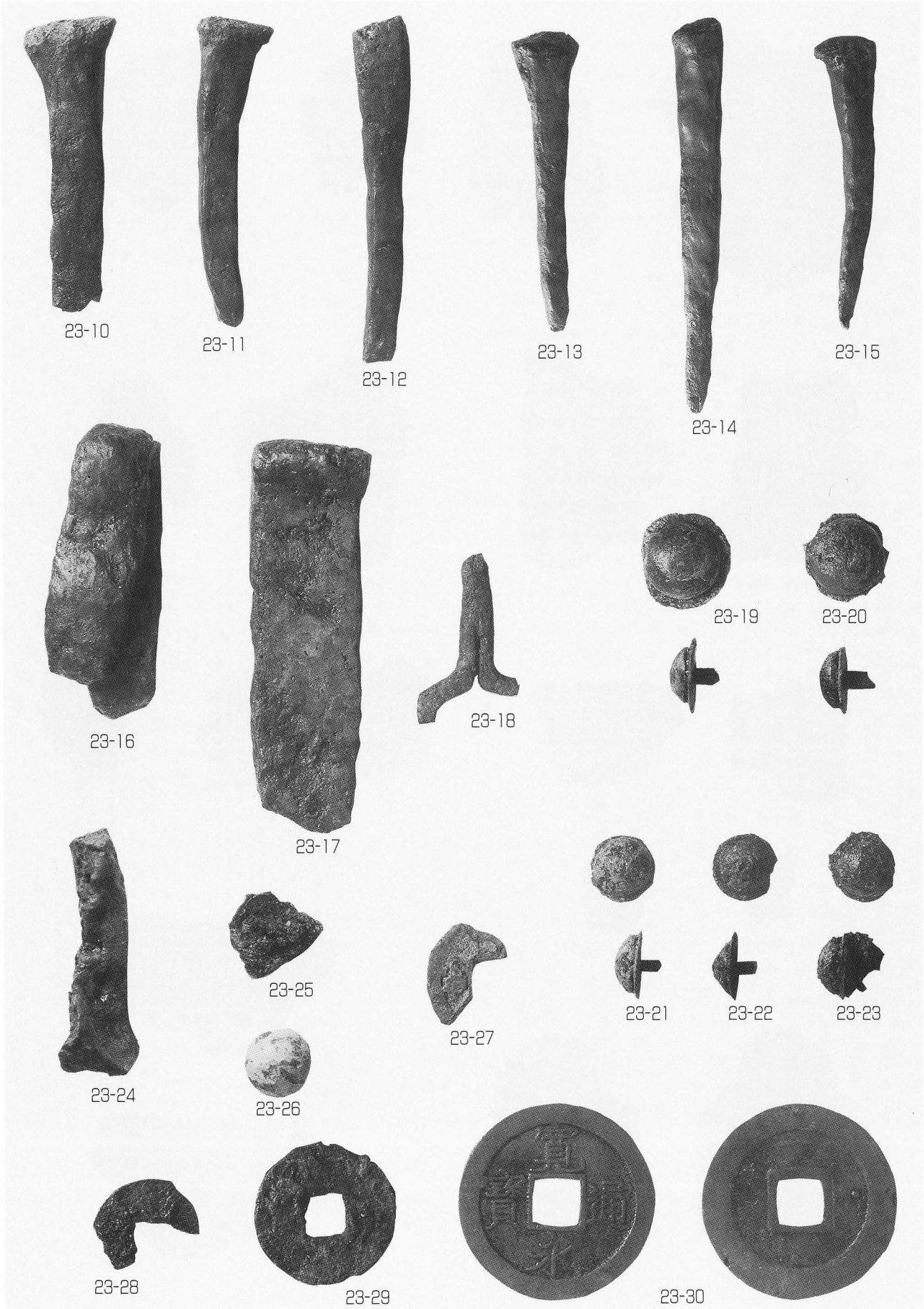
図版12　出土遺物（6）


21-1
21-2
21-3
21-4
21-5
21-6
21-7
21-8
21-9
21-10
21-11
21-12
21-13
21-14
21-15
21-16
21-17
21-18
21-19
21-20

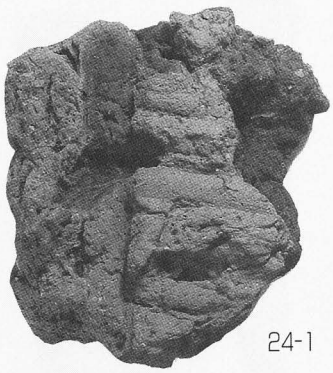
図版13　出土遺物（7）


22-1
22-2
22-3
22-4
22-5
22-6
22-7
22-8
22-9
22-10
22-11
22-12
22-13
22-14
22-15
22-16
22-17
22-18
22-19
22-20
22-21
22-22
23-1
23-2
23-3
23-4
23-5
23-6
23-7
23-8
23-9

図版14　出土遺物（8）


23-10
23-11
23-12
23-13
23-14
23-15
23-16
23-17
23-18
23-19
23-20
23-21
23-22
23-23
23-24
23-25
23-26
23-27
23-28
23-29
23-30

図版15　出土遺物（9）


24-1

24-2

24-3

24-4

24-5

24-6

25-7

25-8

25-9

25-10

25-13

25-14

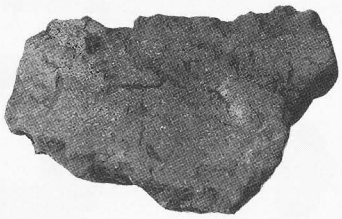
25-15

25-11

25-12

25-16

25-17



図版16　壁　土

報　告　書　抄　録

ふりがな	しせきたけだしやかたあと
書名	史跡武田氏館跡
副書名	平成13年度主郭部北側馬出、字三角地点試掘調査概要報告書
巻次	X
シリーズ名	甲府市文化財調査報告
シリーズ番号	21
編集機関	甲府市教育委員会
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番１号　電話 055(223)7324
発行年月日	平成15年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間 調査面積	調査原因
史跡（しせき） 武田氏館跡（たけだしやかたあと）	山梨県甲府市（やまなしけんこうふし） 古府中町 屋形三丁目 大手三丁目	19201	01110	35° 41′ 11″	138° 34′ 38″	H13.8.1 ～ H14.3.26	史跡保存整備 事前調査
				平成14年4月1日 測量法改正後		80m²	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡 武田氏館跡	城館跡	中世	堀、土塁、暗渠 石積	かわらけ、常滑、青磁 白磁、染付、釘、壁土 炭化材、銭貨	

甲府市文化財調査報告21

史跡　武田氏館跡 X

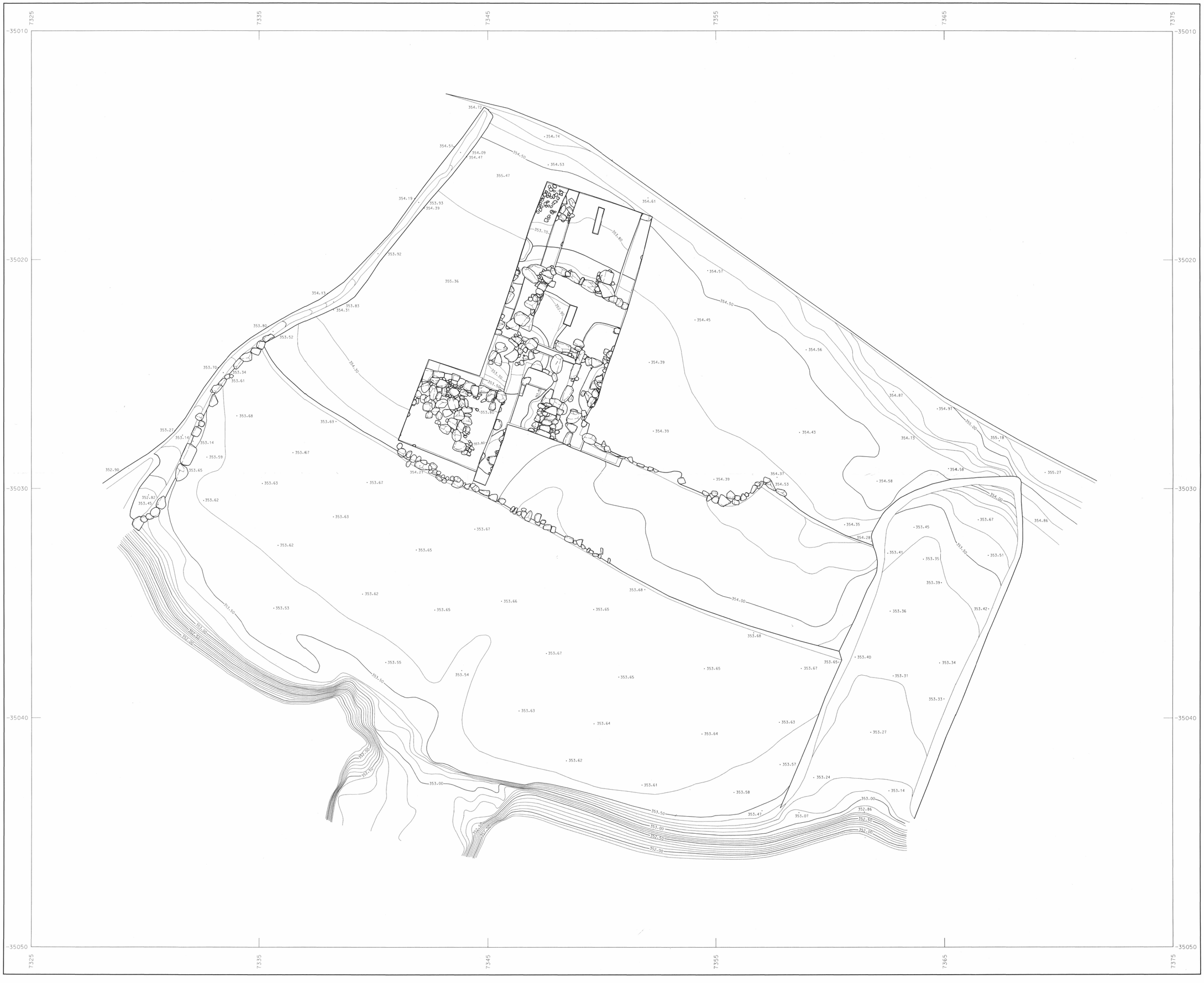
― 平成13年度主郭部北側馬出、
字三角地点試掘調査概要報告書 ―

平成15年３月31日

発　行　甲府市教育委員会
〒400-8585 山梨県甲府市丸の内１丁目18番１号
TEL 055（223）7324
FAX 055（226）4889

印　刷　㈱内田印刷所
〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目10-18

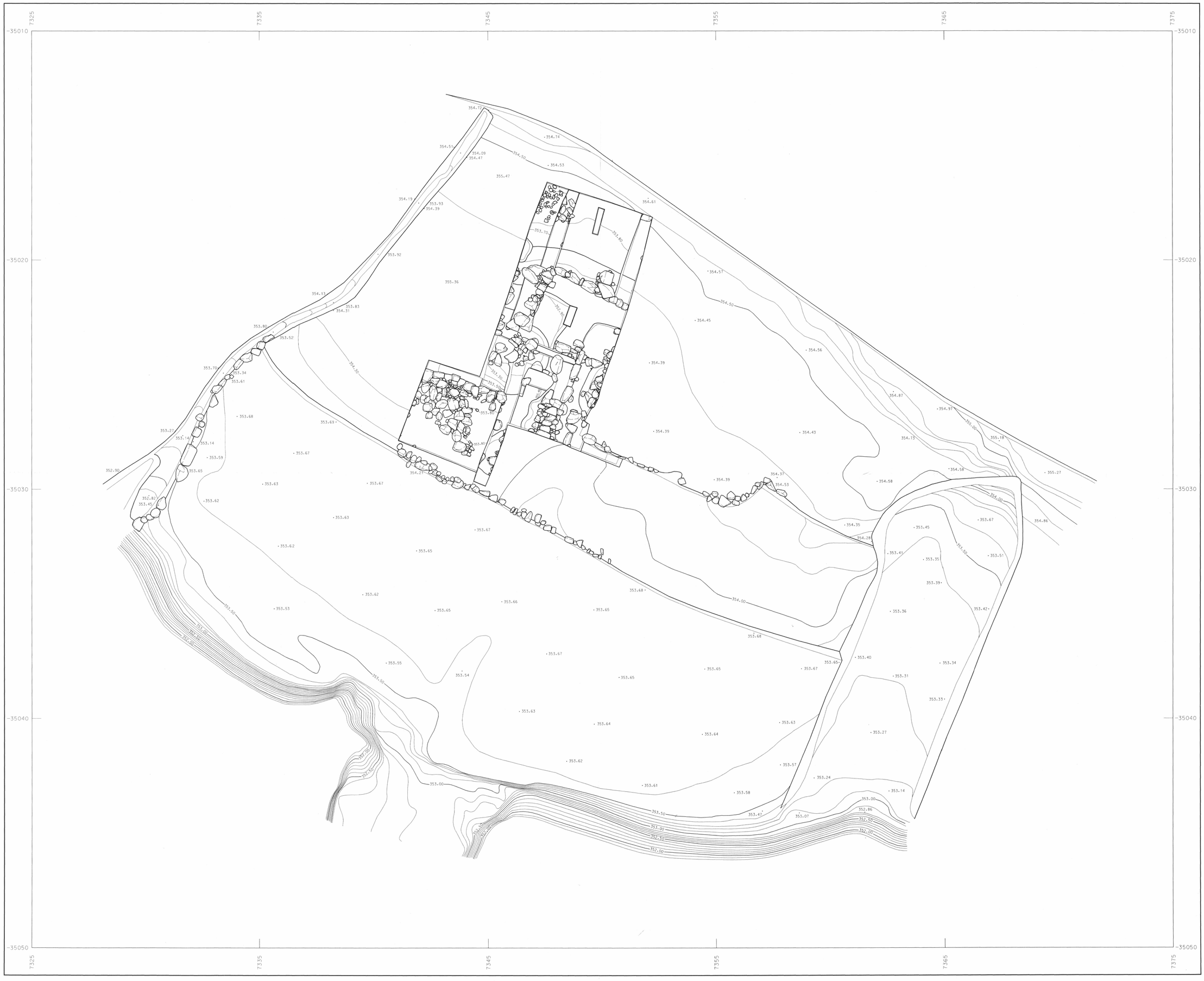
史跡武田氏館跡主郭部北側馬出地点



S=1:80

0 2 4 m

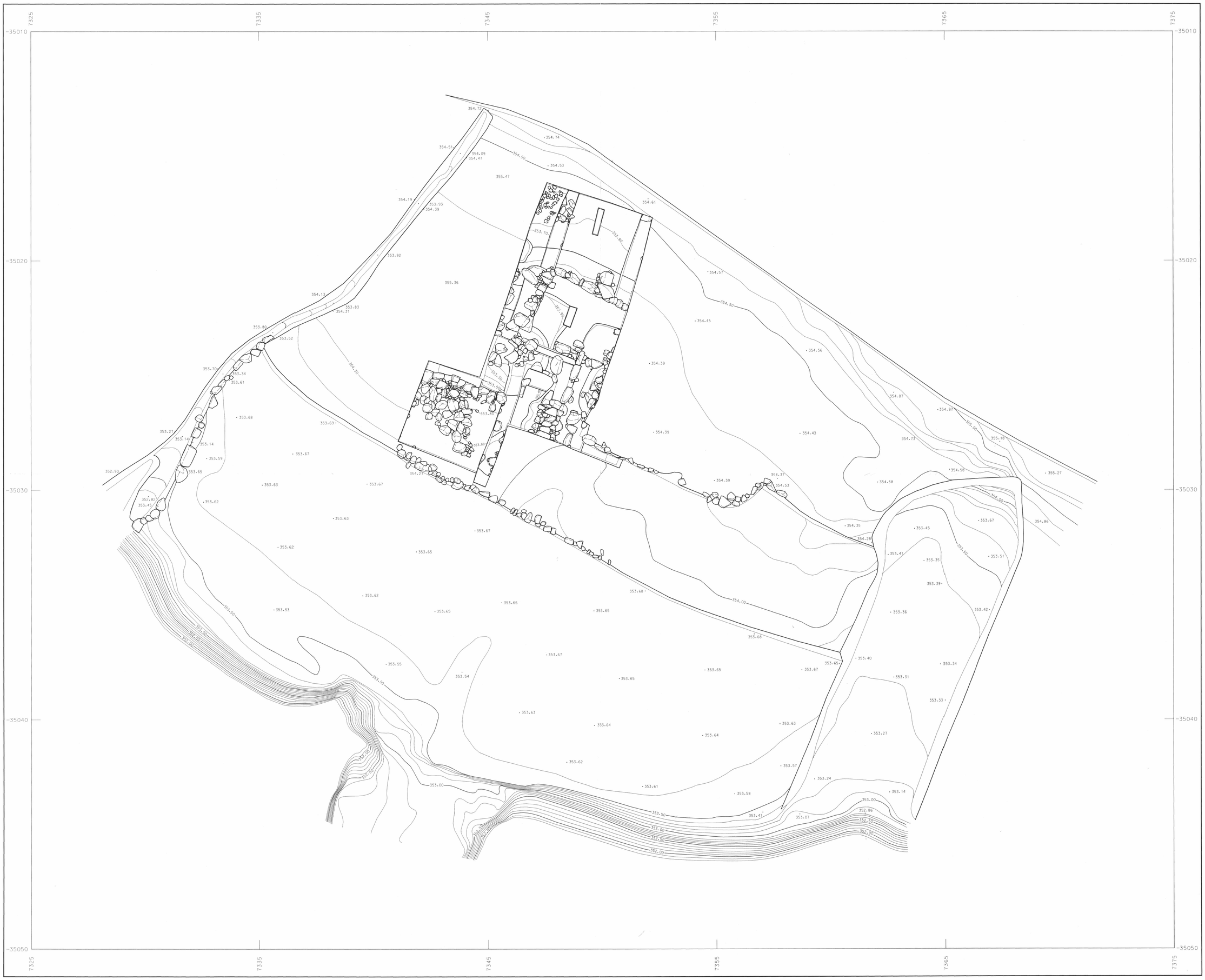
史跡武田氏館跡主郭部北側馬出地点



S=1:80

0 2 4 m

史跡武田氏館跡主郭部北側馬出地点



S=1:80

0 2 4 m